
時 報

No. 13

大阪大学山岳会

ある山行

5月の早月尾根より内蔵ノ助平を経て黒部往復-----72

小黒部谷溯行-----75

北海道日高山行-----79

コイカクシユ札内岳一ベテガリ岳一中ノ川

大峯山舟の川地獄谷-----84

1963年度の部活動-----86

会計報告-----88

ネパール紀行

ソロクンプ紀行 田村俊秀-----89

ヒマラヤの旅一山と人と一笠松卓爾-----128

文献邦訳「高度の人体に及ぼす影響(その2)」-----167

L.G.O.ピユウ, M.P.ウオード著

徳永篤司 } 共訳

松久博 } 共訳

坪井圭之助 } 共訳

会員蔵書一覧-----177

会員住所録-----201

テンジンとガーマー博士

会長 篠田 軍 治

今年2月テンジン・ノルゲが来朝した。外務省の招待で、関西の旅には榎さんが同行した。私も1日、梶本、住吉氏らと共に1日つき合つて、毎日新聞社訪問から森永、ダイハツの工場見学、ナショナル・ショー・ルームや宝塚歌劇から日本山岳会関西支部のレセプションまでずつと行を共にして、いろいろな話を聞く機会を得たが、特にテンジンからこんなことを聞きたいと思つていたことも少なかつたので、山登りの面で特に得るところはなかつたと言つてもよい。印象に残つていることと言へば、まず大阪駅へ着いたときに信州行の「彩雲」へ乗込むスキー客の多いのにびつくりしていたこと。コルチナ・ダンベツツオでスキーを覚え、イタリー・スイスの多くのスキー場を知つている彼にも、大阪のスキー人口は驚異だつたようだ。

宝塚では星組の「南海の憂愁」をやつていたところで、タヒチの島の巫女がヒンズーのそれによく似ていると、

びつくりしていたこと、楽屋で那智わたるに愛嬌をふりまかれて、大いにテレビしたことなど、また関西支部のレセプションでは彼も外交辞令がうまくなつたものであり、ダージリンの登山学校が最近なぜ生徒数が急増したか、また卒業生が何処で活躍しているかなどの点を、あまり表面に出さない点などをさすがだと思つたことなどである。

5月1日に米国カーネル大学のガーマー教授が来阪して、工学部で低速電子の回折についての講演会が開かれた。この日は阪大の記念日で休日であつたのにも拘らずなかなかの盛会であつた。講演の前にサイエンス・クラブで一緒に食事をしたときに、始めて同氏がアラチア山岳会のニューヨーク支部長であり、今でも岩登りをしていることを知つた。そうになると、しばらくは学問の話そつちのけで山の話、お蔭でニューヨーク北部の岩場の知識を大部得た。とうとう岩登りの装備を一切借すから一緒に岩登りを楽しもうということまで行つてしまつた。

ガーマー博士の名前を知つたのはデビソン博士との共著で発表された電子回折の研究で昭和2年のことである。同じく電子回折で有名な英国のフイン

日本に於る登山

横尾秀次郎

チが登山家としても知られているのと、よい対象であるが、ガーマー教授で特に敬服しているのは、連名で論文を発表した先輩のデビンソンおよびその後になつて同じ方面でよい論文を出したG・F・トムソンらはノーベル賞を得ているが、ガーマーは選に洩れている。ノーベル賞をとつてからの業績が芳しくない者が相当にあるが、ガーマー博士などはノーベル賞は逸したが、ずっと同じ方面の研究を続け、近年になつて真空技術の劃期的な進歩に助けられて、低速電子による表面現象の研究で実に立派な業績を挙げている。一体、電子現象は高速が草付きの尾根歩きならば低速はやぶ山であり、岩場であるから低速ほど困難である。私も回折の方はやつていないが低速電子の分光は長年やつているので困難さを身にしみを感じている。それだけにガーマー博士のように、若くして立派な業績を挙げた者が、たといレサーチ・プロフェッサーという講義その他の校務から開放されているという恵まれた条件にあるとはいえ、このように困難を分野で次ぎ次ぎと大きな成果を挙げつつあることは敬服すべきことである。そして彼の研究のやり方は如何にも山男らしいやり方であり、また彼が真実の山男であることは喜ばしいことである。

近年、山岳界は海外へのエキスペディションがますます盛んになり、その成果も華々しい。我々の部の先輩でも、既に十名以上のヒマラヤ経験者が居り、恐らく、海外をめざす者もあとを絶たず生れてくると思う。そしてそれに向い、多大の努力を惜まず真剣に取り組み、実現させて行くことと思ふ。

しかし、一方、日本の山では、遭難は絶えず、大学山岳部においても、そのあり方にたえず疑問を抱き、迷い、目標を失い、只、より高い技術を身につける、いわば登山学校的性格を帯びてきており、新しい精神的発揚を求めべくもない。

現在、我々の部でも、合宿毎に、新しい目標を求めぬのに苦労している。現在すでに、日本の山で地域的に全く新しいトレースを残すことはほぼ不可能である。本来の意味でのスポーツフルビニズムは、より困難を求め、未知なるものを求めようとする欲求を山へ向けたものと思ふ。勿論、山を訪ね、自然の中に没る楽しみは登山の最も大きな動機であり、大部分の登山者はそ

れだけで十分であろう。だが、我々の先人達、特に大学山学部は、その最先端で困難な課題を解決し、新しい技術を導入し、登山界を現在の水準に引き上げてきた。しかしこれらの活動は、未だ日本に於ても初登攀、記録的山行を行い得た時代になされてきたのである。新しい記録を伴っていた。しかるに現在では、新しい記録は、余程変わった地域でない限り無理である。そして我々が先人達の様な活動を求め、期待するのは無理であり、苦しむだけである。ではどういふ目標をたてていいのだろうか。私は、海外に目を奪われ、日本での山行の目的を失い、只困難だけを求め、背のびした山行の生れるのを最も恐れている。日本の山で何をなすべきかを真剣に考えねばならない時期に来ていると思う。この問題をはつきりさせることは、無謀な遭難を減少させる最も大きな柱になると思う。遭難の半数は正に、最も訓練されているはずの大学山岳部が占めている事実には恐らく、彼等が、より困難なるものを、生命をかけるに値するものを求め、真にパイオニア精神にあふれてそれに立ち向い、力及ばず負れた、と言うものではないと思う。只、何となく自分の力を試したくおもむき、只うっかりちよつとした不注意から失敗してしま

つた、と言う例が多いと思う。しかしその真の原因は、現在、日本に於る登山と言ひものが、大学山岳部が、目標を失い、自分をしつかり支えるに足る思想を欠いており、死と言うことを真剣に考えることを避け、漫然と困難のみを求め憧れていることにある様に思える。

では何をめざすべきか、恐らく誰もが考え、誰もが行き詰る疑問であろう。そして各人がそれぞれの目的を抱くだろう。海外へ、或いは山行自体の楽しみ、谷歩きの素晴らしさ、雪山の魅力に、と夫々ひかれ、飽かず山へ行く、そしてそれを制約する権限も意味もない。しかし、その根底に絶へず安全への考察がなされていなければならない。

遭難を如何に防ぐか、と云うことは一つの大きな課題である。遭難を防ぐこと自体を目標にするのは奇妙に見えるが、その中に多くの意味を含んでいると思う。他のスポーツでは能力の限界を打ち破ろうと努力し、敗れても又やり直せばよいが、登山では失敗すればそれまでである。山で困難に立ち向うのは、フィールドで全速力で駆けるのとははつきり違うことを認識すべきである。

危険を回避し、困難を安全に乗り切る努力から、新しい登山の系体が生れ

てくるかもしれない。生活圏を拡大し、確保されるかもしれない。

日本の山で何をなすべきか一言で言うことも出来ないし、正鵠を得た解答を言いうる自信もない。今後この問題が討議され、正しい道筋を開く人の現れるのを期待したい。

登山と言うものは登ると言う単純な行動だけでなく、その中に生活が含まれており、生命の問題すら含まれている。この多面性を考える時、登山は予想外の面を表しながら、今後とも発展

するものと信じている。そして、たえず新しい面を意思表示しつつ、遭難のない山行を行うことこそ一番立派な記録であると思う。初登攀時代に山に命をかけたことが一つの価値であつた如く、今後全く新しい試みの中での事故はやむを得ぬかもしれぬ。しかし、少くとも現在では、山に命をかけ、遭難することに何の価値もないことは、はっきりしていると思う。

夏山合宿（'63年7月21日～8月上旬）

立山東面

黒部中核部は黒四の完成に依り、一部を除いて完全にその神秘性は失せ、今やかつての秘境は、トロリーバスで運ばれてくる人々に、あつけなく、たあいもなくその全容をさらそうとしている。タンポ高地を少し下つて黒部ダムを見下した時、一種異様な感動を覚えた。そこに開けた人工的な美しさ、その巨大さにくたれた。人は知られざる所を探し求め、そしてそれを変えてしまう。夢を求め、その力で夢をつぶしてしまう。

'63年の夏、我々は、タンポ高地をB.C.として、今年が最後である静けさの中で立山東面全域を隅なく歩き廻り得たのは本当に幸いだと思つている。

B.C.をタンポ平に置いたことにより、一日のアルバイトはかなり強烈なものになつた。しかし、殆んど明瞭なルートのある所ではなく、藪こぎ、沢、岩、雪渓を混へた変化あるルートを取り得た。岩場もルート図のある岩場と違い、自分の目でルートを見つけ、判断しなければならぬ。12人にもものぼる新

人を動かすのに苦慮したが、出発前に各ルートにA・B・Cのグレードをつけ、新人にはA・Bコースのみを行かせ、Bは新人の割合を少くしたメンバーで行かせた。結果はほぼ予想通りで無理なく計画を行つた。岩登りは、立山東面の第1～第3尾根、中央山稜、初登攀と思われる丸山谷いずれも規模はそう大きくないが新鮮味があつた。

<夏山合宿の定着>

〔期 間〕 7月21日～7月30日
〔メンバー〕 横尾（L）、高田（S.L）
桑原、大川（以上4年）、吉川、牧野、豊坂、播本（以上3年）、中村、大笹（食料係）、石浜（食料係）、原、畑中、栗原（装備係）（以上2年）、渡部、大野、細川、佐々木、泉田、加藤、糸井、辻、黒田、平川、出雲路、平岡（以上1年）。
（以下O.B） 保母、佐藤毅。

〔行動概要〕

7月18日。先発隊牧野、中村、大川、畑中、佐々木、細川大阪発。

7月19日。牧野、中村タンボ平着。
他の4名にて縦走用食料を天狗小屋へポツカ。

7月20日。本隊19名大阪発

7月21日 晴。

荷物は約35Kg前後で快調。弥陀ヶ原へ出てからはバスの砂煙をあびて新人一人バテたに見えたがその当人夕食4合飯を平らげてまずは全員異状なし。

称名小屋発(9・00)弘法小屋(14・05)弥陀ヶ原ホテル(16・00)

7月22日 曇後一時雨。東一の越からみたタンボ平は何か別天地に思える。踏跡をタンボ平に下り、タンボ沢本流を横切り、2681尾根が北東から東に向きを変えるあたりから出ている沢に出合い、更に少し下つた小屋跡らしき所をB・Cと決めた。先に述べた小沢は2681尾根を越えて御前谷へ入る最短最適ルートとして合宿中のメインルートとして利用された。出発(5・40)一越(10・10~10・40)東一の越(11・00~11・30)テント地(13・30)。

7月23日 曇。雪上訓練を御前谷で行う。2年部員以上はサル又カールの右股をつめて立山往復。

帰路は東一ノ越經由、2681尾根小沢及びこの尾根を末端まで下つての3パーティーに分れてB・Cへ。

7月24日 晴。第一尾根=桑原、播本。第二尾根=吉川、畑中。

2681尾根一雄山一大汝一ノ越一竜王一B・C=豊坂、大笹、佐々木、加藤、細川。タンボ沢一御山谷一東一ノ越一B・C=大川、石浜、糸井、辻。御前谷一内蔵助平一B・C=牧野、中村、出雲路、大野、平岡、保母。竜王東尾根=横尾、栗原。御前谷一内蔵助平一真砂尾根一雄山一東一ノ越一B・C=高田、原、黒田。

7月25日 曇一時小雨。天候があまり良くないので今日を2回目の雪上訓練にあてる。タンボ沢本谷上部の雪溪で行う。

7月26日 晴。第1尾根=大笹、保母、加藤。第2尾根=横尾、中村、佐々木。第3尾根=高田、原。竜王東尾根=牧野、石浜、平岡。2681尾根一竜王一B・C=桑原、畑中、泉田、糸井、平川。黒四ダム一十字峽一内蔵助谷一B・C(27日夕刻B・C着)=豊坂、播本、渡部、大野。B・C一ノ越一立山一剣岳一三ノ窓一ハ

シゴ段出合(泊)一内蔵助平一
B.C (27日夕刻B.C着) =
吉川、栗原、辻、細川。

7月27日 快晴。第3尾根=横尾、
中村。竜王東尾根=高田、畑中、
加藤、平川。2681尾根=雄山
一竜王一B.C =牧野、石浜、原、
出雲路、黒田。豊坂、吉川両パー
ティ一B.C着。御前谷一中央山
稜一立山一B.C =桑原、大笹、
泉田、糸井。

7月28日 晴。第2尾根=大笹、
豊坂。竜王東尾根(途中で引返す)
=吉川、中村、糸井。タンボ沢一
御山谷一B.C =播本、栗原、
佐々木、出雲路。サル股右股一内
蔵助平一B.C =横尾、石浜、細
川、平川。B.C一内蔵平一黒部
別山一長次郎谷(泊)一剣岳一立
山一B.C (29日夕刻B.C着)
=高田、畑中、平岡、泉田、黒田、
加藤。丸山谷(29日夕刻B.C
着) =桑原、牧野。中央山稜=原、
渡部。

7月29日 曇。タンボ沢一御山谷
一B.C =豊坂、大笹、渡部、
平川。2681尾根一立山一B.C
=横尾、中村、辻、大野。第2尾
根=播本、栗原、佐藤。第3尾根
=吉川、石浜。高田、桑原両パー

ティB.C着。この日、3つの事
故が起つた。第2尾根取付きで播
本が少スリップ、約3米落ち、か
すり傷を負つた。更にタンボ沢の
下りで大笹岩につまずき軽傷。
第2尾根完登後、サル股の右股を
グリセード下降中の佐藤O.Bが
スリップし、ピンケルの石突きで
左大腿部を突き、歩行不能になつ
た。吉川、石浜が伝令にB.Cに
戻り、桑原、豊坂、が御前谷へ向
う。佐藤O.Bを右股基部の岩か
げに収容し、ピバーク。

7月30日。2年以上全員で佐藤
O.Bを御前谷、東一の越を経て
一ノ越迄運ぶ。彼はゆつくりとな
ら歩ける程度である。横尾、桑原
の2名が付添つて弘法の小屋へ泊
る。他は全員B.Cに戻り、合宿
解散パーティを盛大に行う。
明日から新たな気分で縦走に出発
だ。

<食糧報告>

例年の食糧計画と大差はないが、蛋白源として缶詰の他に牛肉をからあげし塩づけにしてもつていつたがこれは合宿中最後まで腐敗しなかつた。重量の点からいうと缶詰より軽くなり無駄がないので良いだろう。ただ、費用の

点で少々高くつき又手数がかかるのが難点であろう。野菜としてキヌーリ、ピーマン、ナス、を使用したが生キヌーリは変質がはげしかつた。しかし保管の方法を改善すれば十分使えると思う。

なお合宿最後になつて食糧が足りなくなつてきたことは明らかに食糧系の失敗であつた。

〔夜〕

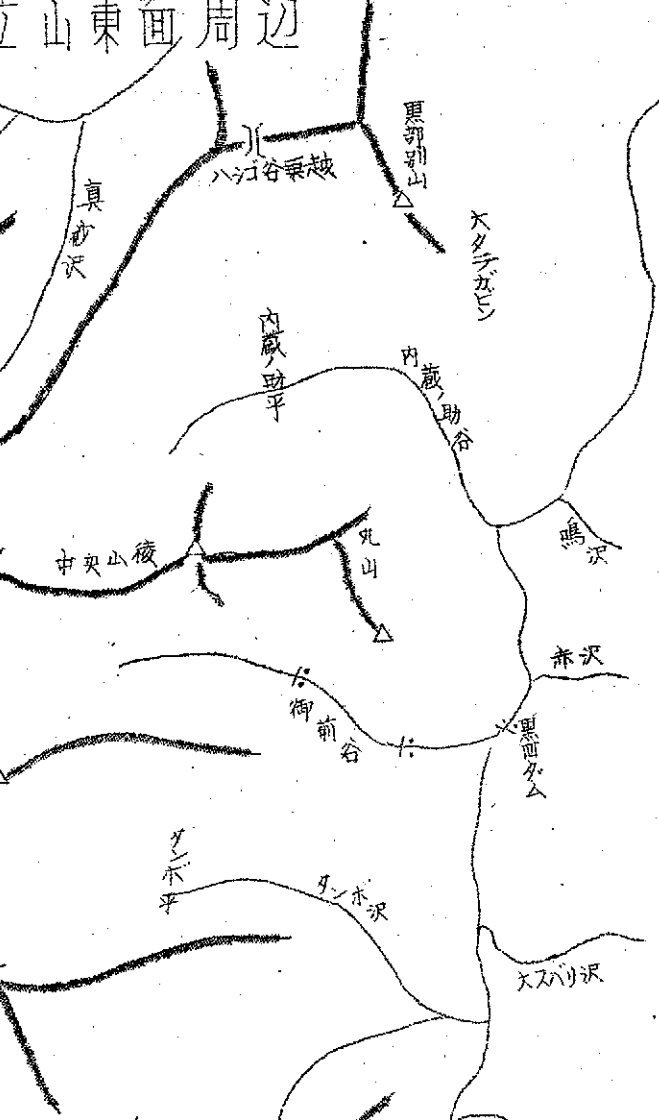
次の三つを交代にやること

	八 宝 菜	サ ラ ダ	ハ イ ジ
マ ト ン	1 Kg		
ソ ー セ ー ジ		15	
カ ン ズ メ			6
キ ヤ ベ ツ	1	2	
ジ ヤ ガ イ モ		10	10
玉 ネ ギ	5		5
ピ ー マ ン	5		5
ニ ン ジ ン	1		1
キ ヌ ー リ		20	
カ タ ク リ	2		
マ ヨ ネ ー ズ		大 3	
ハ イ シ の 素			50 皿分
炒 飯 ノ 素	50 皿分		
ナ ス ビ	25		
サ ン マ		17	

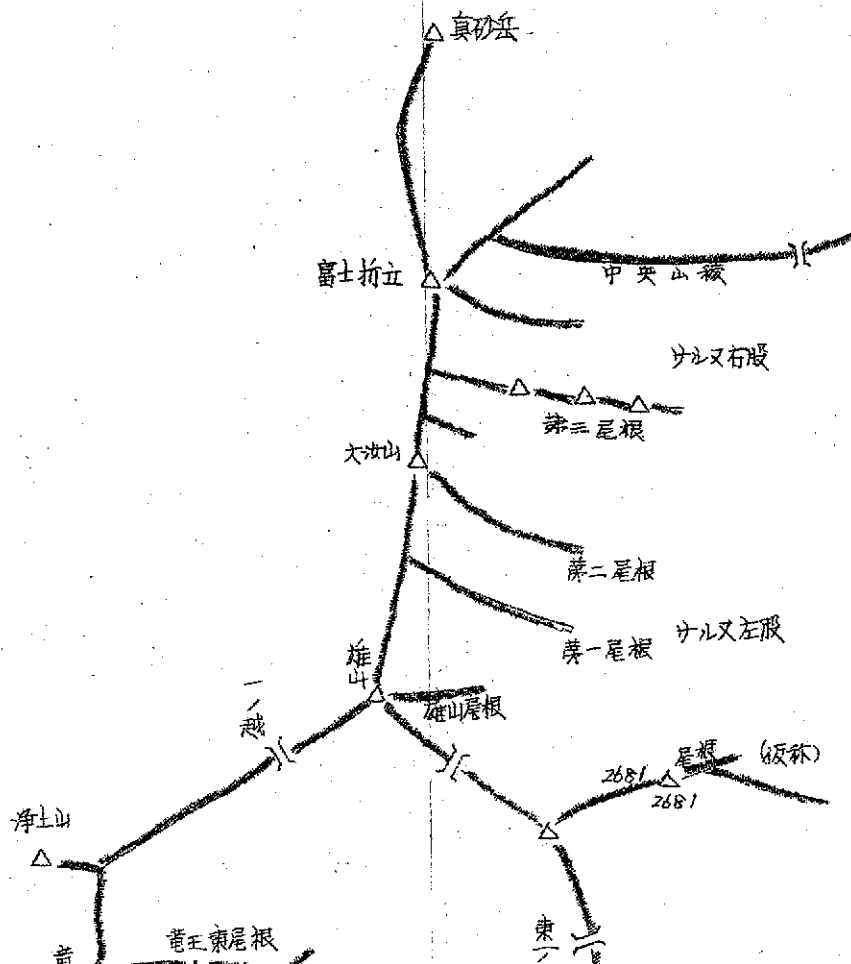
米 1人 1.8合 25人 45合

(注) サラダの日は昼にジャガイモをゆがいておく!!

立山東面周辺



立山東面



〔昼〕

フランスパン	2日	1人	3コ
ア ル マ	8日	1人	1コ
キ ュ ー リ		1人	1/3
マ ヨ ネ ー ズ		小	6 (1日)
ビーナツバター			6 (1日)
ジ ュ ー ス		1人	1袋

〔朝〕

次の二つを交代にやること

(1) みそ汁

みそ	1袋
フ	3 "
ワサメ	1 "
ナス	5

ウメボシ 1人 1コ

米 1人 1.2合 2.5人 3.0合

(2) スープ

炒飯1素 40皿分

ナス 5

玉ネギ 5

(石浜記)

〔装備報告〕

(P 記)

<夏山合宿医療報告>

夏山合宿医療品リスト

分 類	薬 品 名	携行量	使 用 法 (注 意)
抗 生 物 質	マトロマイシン ケミセチン ジユンマイシン アイロタイシン	50	1回1錠 6時間間隔 総ての発熱性化膿性失患 外傷における化膿防止
サルファ剤	アブシード メトフアジン	40T 30T	初回4錠 後1回1錠6時間おき 抗生物質と同じ場合に使う。
鎮 痛 下 熱	ザベロン ハイピリン	60T 20T	頭痛、歯痛、生理痛 37℃前後の微熱(風邪)に使用
下 痢 止	エンテロヴィオフォルム	30T	1日 1~2錠
腹 痛	フラゾリドン カルバミジン錠	30T 80T	1回1錠 4~6時間おき。 赤痢etcに有効
鎮 痙 剤	ブスコペン	30T	痙攣性疼痛(激しい胃痙攣、 腹痛)
下 剤	ラキサトール	20T	
自 律 神 經 安 定 剤	ウインタミン	10T	嘔吐、悪心、山よひ。
鎮 咳 抗ヒスタミン	エフェドリン錠 アンダントール	100T 10T	アレルギー性失患く気管支ゼンク 鼻カゼ)
胃 腸 薬	パンシロン	30包	食欲不振(胃腸と肝臓にパンシロ ン)
熱 眼 剤	アドルム	10T	
止 血	アドシー	3ピン	総合止血
注 射 薬	ノルアドレナリン ロートボン ボンピリン マネトール ビタカンファー	2CC 2CC 3CC 1CC 5CC	意識不明者にうつ 腹痛 下熱 止血 強心剤

注射器セット		1	
眼 薬	新 ロート目薬	3	
	ブレドニン眼軟コウ	1	
外 用 薬	ヒ ル ド イ ド	1	
	テ ラ ジ ア バ ヌ タ	3	
	ヒ ナ ル ゴ ン	1	
	エ ビ ソ ー ル	3	
	メ ン タ ム	3	
	赤 ち ん	5	
	ア ル コ ー ル	3	
	オ キ シ フ ル	2	
	ホ ウ タ イ		
	ガ ー ゼ		
	脱 紙 綿		
	バ ン ソ ウ コ ウ 紙 パ ン		
体 温 計		2	
消 毒	D D T (B H C)	2	
	蚊 取 線 香		

個人でビタミン剤（B₁、B₂、C）、痔の薬、胃腸薬（クレオソート丸）
etcは持参

○ 縦走はこの中から適当に分配する。

以上の薬品はO B徳永篤司氏より御容附していただきました。
ここに敬礼申上ます。

（豊坂記）

＜夏山合宿の分散＞

○表銀座縦走パーティー

〔期 間〕 7月31日～8月10日

〔メンバー〕 播本(山)・畑中・黒田・
渡部・泉田・平川

〔コース〕 室堂―薬師岳―祖必沢―
岩苔小谷―立石―奥の廊下―楡岳―
燕岳

○針の木岳パーティー

〔期 間〕 7月31日～8月7日

〔メンバー〕 豊坂(山)・石浜・大野・辻・
平岡

〔コース〕 室堂―薬師岳―東沢乗越
―東沢―平―針の木岳―扇沢

○東沢溯行パーティー

〔期 間〕 7月31日～8月9日

〔メンバー〕 牧野(山)・大笹・細川・
加藤

〔コース〕 室堂―五色ガ原―平―
東沢乗越―高天ガ原―ワリモ乗越
―双六岳―ワサビ平

○樺小屋沢パーティー

〔期 間〕 7月31日～8月8日

〔メンバー〕 高田(山)・原・出雲路・
糸井・佐々木

〔コース〕 雷鳥沢―真砂沢出合―劔
往復―二股―池の平―阿曾原―樺小
屋沢溯行―白馬岳―梅の木寮

○小黒部谷溯行パーティー

〔期 間〕 7月31日～8月6日

〔メンバー〕 吉川(山)・中村・栗原

〔コース〕 雷鳥沢―劔沢―劔岳往復
―一俣―池の平―小黒部谷―広河原
―中の谷―毛勝岳―西の谷―毛勝岳
―阿部木谷。

(詳細はP 〇〇に記す)

× × × ×

<夏山合宿装備表>

品名	定着	朝日	餓鬼	赤井	構小屋	小黒部	総量	総重量
ザイル	7	1	1	1	1	1	7	23.0kg
ハンマー	7		1	1	1	2	7	3.5
ハーケン	70		3	5	3	10	70	4.2
カラビナ	35		3	4	3	7	35	4.2
アブミ	6						6	1.2
捻 繩	30m				10m		30m	2.5
フイツクス用ザイル(30cm)	2						2	6.0
テント No.1	1						1	10.0
" No.2	1		1				1	7.8
" No.3	1	1					1	5.0
" No.4	1			1			1	5.0
" No.5	1				1		1	5.0
ツエルト	3			1			3	3.0
鍋	2						2	2.0
鋸	1						1	0.5
なた	2					1	2	3.0
たわし	3						3	0.2
お玉	5	1	1	1	1	1	5	0.5
しゃもじ	2						2	
魚焼網	2						2	0.4
やまん	2						2	0.7
ビニールシート	1						1	
うちわ	3						3	
火吹き竹	1						1	
ローソク	50	14	14	14	12	8	112	
赤布(10cm×30cm)	20						20	
秤り	1						1	
ラジオ	5	1	1	1	1	1	5	3.0
電池スベア	1set	1s	1s	1s	1s	1s	6s	
天気図用紙	30	30	30	30	30	20	170	
ラジオム	2	1	1	1	1	1	6	6.0
ケロシン	4ℓ	3ℓ	3.5ℓ	4ℓ	4ℓ	2ℓ	20.5ℓ	20.5
けい燃	5	2	2	2	2	2	15	1.5
ロツフェル		1	1	1	1	1	5	4.0

秋 山 合 宿

この合宿は、今度の春山に備えての双六小屋への荷上げと偵察を主目的とし、ボツカ隊は荷上げ終了後3パーティーに別れ縦走をおこなつた。

○偵察隊 10月31日～11月6日

〔メンバー〕 牧野、豊坂、原

(詳細はP 42 に記す)

○ボツカ隊

10月31日夜 大阪出発

11月 1 日 ワサビ平

11月 2 日 双六往復

11月 3 日 双六小屋

以上で荷上げ終了

○薬師パーティー

〔期 間〕 11月4日～7日

〔メンバー〕 吉川(中)、播本・大笹・

黒田・泉田・出雲路

〔コ ー ス〕 双六小屋—太郎小屋—

薬師往復—有峰

○笠パーティー

〔期 間〕 11月4日～6日

〔メンバー〕 大川・石浜・中村・辻・
糸井・加藤・平岡

〔コ ー ス〕 双六小屋—笠ヶ岳—槍見
温泉—中尾峠—上高地—徳本峠—
島々

○裏銀座パーティー

〔期 間〕 11月4日～5日

〔メンバー〕 横尾・栗原・佐々木・
渡部・細川・大野

〔コ ー ス〕 双六小屋—裏銀座—烏帽
子岳

冬 山 合 宿 (' 6 3 年 1 2 月 下 旬 ~ ' 6 4 年 1 月 上 旬)

新人が半数を占る現状から、一つの計画に新人を完全に吸収し、しかも新人にも上級部員にも相当の実力を発揮出来る山行を考えたが、こう云う計画は、上級部員には不足感を与えるか、新人に無理がくるかである。そこで、新人全員を別の、スキーを中心とする合宿を持つことに決定した。幸い、桐池の阪大榎の木寮の完成は、我々に新しいホームグラウンドを与えてくれた。天狗原はスキーには最適であり、白馬岳への稜線はアイゼンの領域である。天狗原にテントを出し、約一週間雪上での生活を行い、後半は榎の木寮に下り、スキー練習を行つた。

2年部員以上は、冬期縦走の第一歩として、南アルプスを2パーティに分れて縦走を行つた。冬期の南アルプスは、比較的晴天に恵まれることが多いが、どの冬山でもそうである様に、年により、その困難さは著しく異なる。幸い、この冬は異常な好天に恵まれ、予定通りの計画を行えたが、事前にあらゆる逃げ道を検討し、最悪の条件に備えた。(横尾記)

○南アルプス北部パーティー 三峰川より北岳

(期 間)

1963.12.24~1964.1.1

[メンバー] 桑原(山)(T₃)、牧野(S₃)
播本(T₃)、石浜(装備)(T₂)、
畑中(食料)(M₂)

[コース] 小瀬戸湯一風巻峠一熊沢
出合一枝沢一野呂川乗越一三峰岳一
間の岳一比岳一夜叉神一芦安

[行動概要]

12月24日(火)18時10分

大阪発「彩雲」

12月25日(水) 晴

杉島でバスを降り、とぼとぼと眠気を払いつつ歩く。冬山合宿ともなれば、行き交うトラックを捨りつりにもなれない。しかし、トラックの運転手の親切さをいつまでも断るのも悪いようなので乗せてもらう。おかげで小瀬戸湯までの予定が大いに助かる。寝不足のせいで背中荷がいつもより、ずつとこたえる。風巻峠に近づくにつれ、雪がちらほらしてくる。峠の積雪は約10cm内外、明日に備え天気図をつける。そこか

ら見ると予定の熊沢出合におりている対岸の尾根は真点でブツニエがひどい。月の光が木の間からもれるころ、ようやく河原にテントをはつた。

杉島(10.30) 一小瀬戸湯(11.30) 一風巻峠(3.55~4.20) 一熊沢出合(5.30)

12月26日(木) 晴時々曇

予定の尾根に積雪がない為、野呂川乗越まで、まわる事にする。かなりよい夏道があるが、霜のはつた1本橋には、かなりひやつとする。枝沢出合を少し登つた小さな所にテントをはる。水近くよき幕营地なり。雪は少量。

Start(7.30) 一メンバ沢出合(10.00) 一枝沢出合(12.30) 一枝沢中間部(1.00)

12月27日(金) 快晴

野呂川乗越へはジグザグでかなりバテたが、予定より早く着いた。積雪3.0cm位。ここから三峰岳に向うのだが、いよいよラッセルは深く、倒木が多くなる。これはまるで全精力を注いでの山との闘いそのものだ。三峰岳まで何とか行けると思つていたので、まだまだ三峰岳は遠かつた。風が樹に降り積つた雪を落す中、樹間の小池を今日の寝場所とした。ガスの切れ間に時折見える北岳、間

の岳、中白根が大きく、美しく、全く白く神々しかつた。

Start(7.25) 一野呂川乗越(9.50) 一テント地(15.40)

12月28日(土) 快晴

1 昨年温度計を失つたので、温度は不明、しかし何ともうららかな陽気はまるで春山のような。しかし、変らぬ倒木と深にラッセル。背中のスコップとストックがしやくに障つて仕方がない。しかし、間もなく、樹林帯を抜け出た。三峰岳がすぐそこ、まるで手の届くところにある。樹林帯をぬけた所に岩峰あり。フィック2をして乗越す。約20m位。岩峰をこえた所でテントを設営し、牧野と播本は三峰岳まで偵察に出る。始めてのアイゼンの感触が何ともすてきた。三峰岳のPeak下をトラバースレ 稜線をのぞくと風はきつい。雪煙のはるか向うに富士がかすんでいた。

Start(7.45) 一樹林帯をぬけたテント地(13.30)

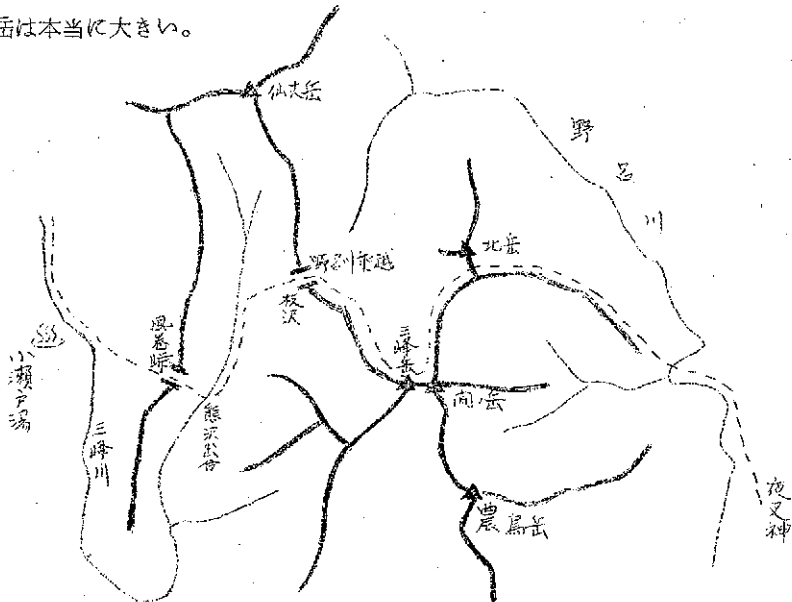
12月29日(日) 快晴

今日も快晴。いよいよ本格的なアイゼンの領域だ。三峰岳から間の岳にかかるころから、南アルプス名物の風が強まつて来た。逃げ道として考えていた黒檜山への稜線は意外にや

せていて不適だろうと思えた。以後は逃げ道は資料、偵察と共に充分確めて採用したい。間の岳中白根間にて風を十分に味わつた。中白根と北岳とのコルに設営する。ブロックをつむのに忙しい。夜半風強まり、テントがドンと揺れる。前線の通過。
 Start(7.30) 一三峰岳
 (8.40) 一間の岳(9.50) 一
 中白根(12.00) 一テント地
 (12.45)

12月30日(月) 快晴
 出る準備をしていたが、ガスがかかり天気図をつける。良くなると思つていたが、いよいよ停帯と決めたら快晴となつた。ここから見ると北岳は本当に大きい。

12月31日(火) 快晴のち曇り
 北岳にかかるとさすがに人が多くなつてくる。アイゼンをつけない人、スキー靴の人、北岳の頂上は、無責任登山家の展示場のようだつた。八本歯では人待ちをする程。ここから下るに従つてパットレスの偉容が大きく迫つてくる。快晴のせい、雪をまといながらも黒々したまるで牙をむいた野獣のような壁にいどむパーティーも2、3見られる。八本歯も終るところ、鋸岳から来た京大パーティーと一緒に、そのまま下る。道をまちがえたりしながらも荒川出合に至る。夜、京大パーティーと交歓会を持つたが、彼らの歌のよく知つ



ているのに驚くと共に少しコンプレックスも感じさせられた。ほぼ終りかけた合宿をかざる楽しい夜だった。Start(7.00) 一北岳(8.35) 一御池小屋(12.00) 一荒川出合(14.30)

1月1日(水) 元旦 快晴時々曇
奈良田へ出る京大パーティと別れて夜叉神への道をとる。ここからは地図とちがい著しく近代化されていて、全く立派な林道がつけられている。

夜叉神トンネルの入口でふり返つた白根3山の美しさ。深い青の空に喰い込んで、そびえ立つ白銀の峯は神々しいまでの風景だった。短い合宿とはいえ、甲府で見た娘さん達の美しかつた事といつたら.....

街は全くの正月ムードでいっぱいだった。

Start(6-55) 一夜叉神(10.00) 一芦安(12.00)

1月2日朝 大阪着 (播本記)

< 装 備 報 告 >

	品 名	数 量	重 量(Kg)
露 営 用 具	テ ン ト	T ₁	8
	ツ エ ル ト	1	1.2
	ベ グ	22本	2.2
	張 線 予 備	20m	
	タ ワ シ	2	
	ス コ ッ プ	1	1.6
	ロ ー ソ ク	12本	
	エアマット修理具	1 set	
登 攀 用 具	ザ イ ル (ナイロン)	30m	3.0
	ハ ン マ ー	1	
	カ ラ ビ ナ	5	1.5
	ハ ー ケ ン	5	
	ス ト ッ ク	2 sets	

炊 事 用 具	ラヂウス	1	1.45
	メタ	5	1.0
	コップエル	1set	0.8
	テルモス	2	2.0
	ケロシン	7.7ℓ	6.0
	ポリタン	2	
そ の 他	ラヂオ	1	0.8
	寒暖計	1	
	天気図	20枚	
	スリオンテープ	1	

1. 工具類(針金、ペンチ等)を持つていかなかつたがこれらは必携すべきものと思われる。
1. テルモスはすぐ破損するが少し良いものを持つていく方がかえつて安くつきそうだ。
1. 雪はらい用のタワシはもつと力のあるものにする必要がある。

(石浜記)

○南アルプス南部パーティー

聖岳より塩見岳

〔期 間〕 12月23日～1月4日

〔メンバー〕 高田(4・E)、吉川

(3・気象)、豊坂(4・記録、医療)

原(2・食料)、大笹(2・装備)、

栗原(2)

〔行動概要〕

12月23日 23・50大阪発。

あまりに遅い時間の出発なので、送りに来て下さったOB諸氏も帰つてしまわれ、少し淋しい出発であつた。しかし、電車はガラ空きで、ぐつすりとおむる。

12月24日 曇り一時小雨

静岡駅下車。バスにて約3時間半、終点の畑藪第1ダムに降り立つたのは私達6人だけであつた。コンクリート造りのダムの上、しかも周囲の山には雪のかけらさえも見えず、しばし茫然とした。目的の中の宿が途方もなく遠いように思われ、又、とんでもない所に置きざりにされたように感じたのだ。昼食をすませ、パッキングした荷は一人約10貫、延々と続くトラック道に歩を運ぶ。やがてトラック道が細い山道に変わり吊り橋を何度か渡り替え、夕闇が濃

くなつた頃、中の宿着。Xマス・イブとあつて、夕食はいつになく豪華で、牛肉もたつぷり。

畑藪第1ダム(14.20)——中の宿(17.05)

12月25日 雨のち晴

早朝は雨。雪なら行動できるのにと残念がつている間に雨も上つたので、出発。赤石渡から聖岳東尾根のとつづきの飯場まで来たが、ここで尾根の状態をたづねるところ、心配していた通り、東尾根の道は廃道に近く、行つても引き返すのが落ちだとの事。急拠、計画を変更して聖沢コースをとる事にした。

一汗かいて出会所小屋、やつと雪を踏むよになつた。昼食ののち、沢伝いの道をたどるが、このルートは複雑で、一度沢を離れ尾根に向つて登り出したかと思うと、又、沢にもどるといつた調子である。結局、聖平までは無理なので、沢に入つてから2番目の飯場で泊。天候は悪化の兆で、夜には粉雪がちらつき出した。中の宿(7:40) —赤石渡(9:10) —赤石沢の飯場(10.5~10.30) —出会所小屋(11.20~12.00) —聖沢の飯場(15.30)

12月26日 風雪

このところ毎朝時間通りに目がさめ

ず、今朝も4時に起きるはずのところ
が、5時すぎ。雪のちらついたり
な天候だ。飯場の少し上流から尾根
にとりついてジグザグの急登、長い
長いトラバース、そして、又、沢伝
いと時間ばかりが経つてゆく。やが
て、ランセルに苦勞するようになり
風も強くなつたと感ずる頃、ポツカ
リと小屋の屋根が現われ、聖平に着
いた。下の飯場で教えられた新しい
小屋は少し離れた所にあつた。スト
ープも備えた快適な小屋だ。

とにかく昼食をとり天候回復を待つ
たが、風雪はいよいよ激しくなる一
方なので、そのまま小屋に泊る事に
した。さすがは主稜線、夜の冷え込
みはきびしく、眠りづらい一夜をす
ごす。

出発(8.10) 一聖平小屋(12.50)

12月27日 風雪のち晴

依然、風雪は続いているが、出発準
備をして待機する内に、風は強いま
まだが雪も止み青空が見えてきたの
で、完全装備に身を固めて聖岳に向
かう。アイゼンが快よく利くので楽
だが、風が強くて体がフラフラするた
め、ゆつくりと確実に足を運ぶ。

天候は回復したといつても、まだガ
スがたちこめ、時折、ガスの切れ目
からちらつと望まれる伊那側の岩壁

が陰惨な感じを与える。頂上が近づ
くにつれ風は強くなり、頂上直下の
急斜面は半ばはうようようにして進む。
吹きつさらしの頂上では食事も早々
に下りにかかる。心配していた聖の
下りは予想ほど悪くはなかつたが、
小突起が続き、ヤセ尾根とブツシュ
のため面倒であつた。兎とのコルは
非常に狭く、伊那側は岩が露出して
いる為、ハーケンを併用して設営。

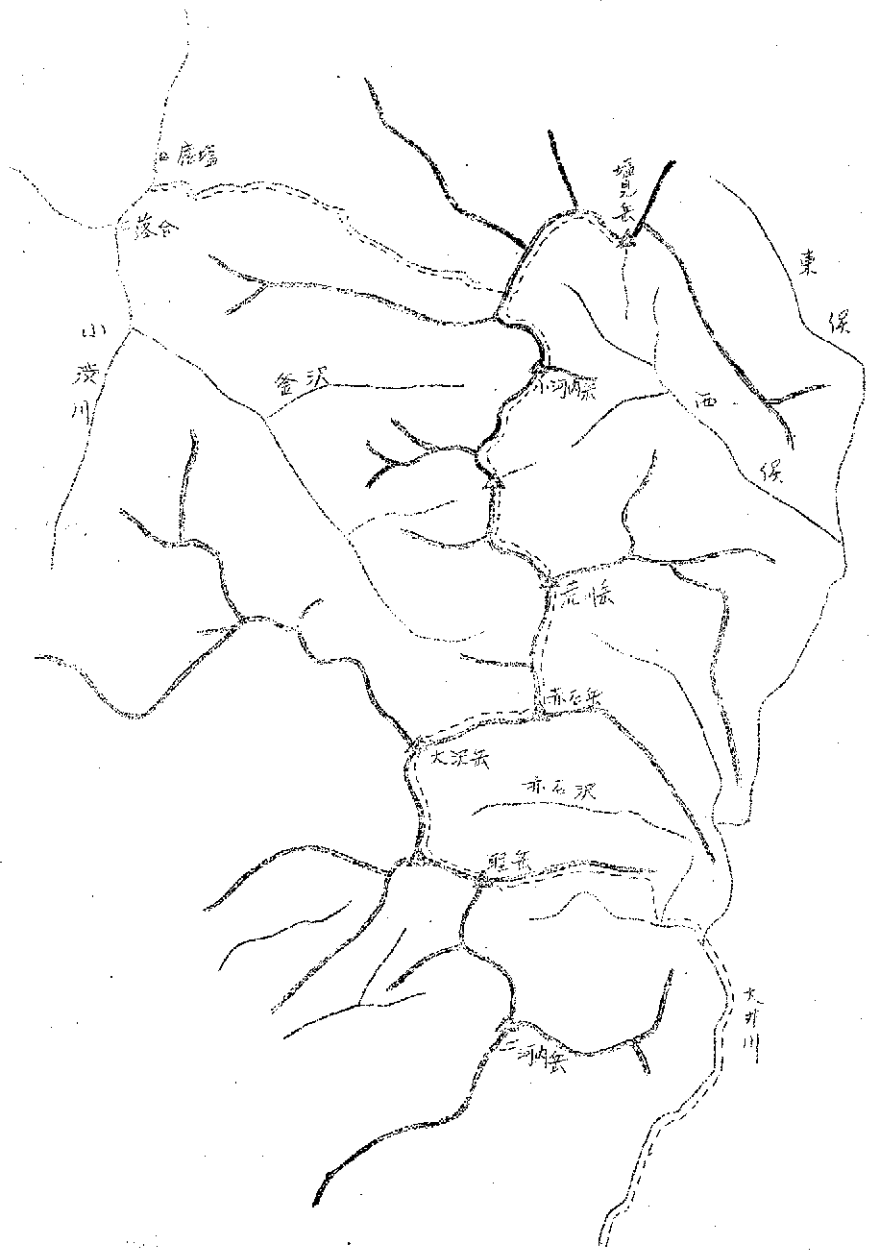
その夜は、長いアプローチも終り、
いよいよ本格的な縦走に入つた事を
喜び合ひ。

聖平(9.00) 一聖岳(13.00)

一兎とのコル(15.10)

12月28日 快晴

天候回復に気をよくする。兎までは
依然としてブツシュの多いヤセ尾根
で時間を食う。ブツシュ帯を離れる
と、やはり風が強くて、兎を越え風の
弱い所で昼食。赤石岳が次第に近づ
くのがうれしい。中盛丸山をファイ
トたつぷりで越し、大沢岳とのコル
に降り立つと、わずかながら百間洞
の方角へ古いトレースが残っており、
これを伝つて沢に下る。トレースと
いつても腰近くもあり、やつとの事
で百間洞山の家に辿り着いた時、私
達のトレースを使つて京都府立医大
の連中が追いついてきた。唐松峠か



らやつて来たそうで、私達の重装備に比べてその軽装はうらやましい限りであつた。

その夜は形ばかりで風が吹きぬけの小屋にテントをかぶつて寝たが、寒さにいじめられると、やはりテントの方がよかつたなどと言ひ合うのも後の祭り。

出発(8.10) 一兎岳(10.30)
—essen(11.10~35) —
中盛丸山(13.10) 一大沢・中盛丸山のコル(13.30) 一百間洞山の家(14.20)

12月29日 快晴 風強し

風は強いが上々の天候。どうやらツキが回つてきた様子だ。まづワツバをつけ稜線に向う。

途中で沢の雪が割れ流れが露出していたので、久し振りの清水にのどをうるおす。稜線でアイゼンに付け変え、百間平にかかる。

甲斐駒・仙丈はもちろん、遠く北アルプスの槍・穂高まで、それと名指してできるほどの好天候で、縦走の雲囲気は今や最高潮。「苦勞のかいがあつた」「来てよかつた」を全員が連発。赤石の登り手前で昼食。赤石の登りは夏道がほとんど出ているので容易。猛烈な雪煙をなびかせている頂上が次第に近づく。どうしたわ

けか、頂上付近だけ風が強く、ふらふらとよろけながら頂上着。大聖寺平はすぐ下というので、展望を楽しみながら、のんびりと下る。大聖寺平ではうまい具合にブロックをつんだテント跡があつたので、ブロックを補強して設営。天気図は発達した低気圧の接近をつけており、ラジオでも警報が出されているので、明日は休養をかねて停滞ときめ、夕食後、ブロックの壁を再度つくり直す。

出発(8.00) 一百間平(10.15)
—essen(11.15~50) —赤石岳(13.10) 一大聖寺平(14.30)

12月30日 快晴 停滞

停滞ときめてあつたので目がさめたのは7時頃。予想通り風は強いが、どうした事が青空が広がっている。その内に風もほとんどなくなり、入山以来最高の上天気となつた。「今日みたいな天候は冬山の天候ではない」などと強がりを行いながら、ゆつくりと食事を取り、午後はカードに興ずる。

12月31日 晴

昨日のバカ陽気とは打つて變つて、今朝は空一面に薄雲が広がっており、今になつて昨日行動しなかつたのをくやむ。荒川岳へは夏道にトレースがあり快調、時間的にも夏と大差な

かつた。天候がはつきりしないので、悪沢往復は中止、中岳のみ往復する。荒川カールは夏道にトレースがあり、積雪も少ないので問題なかつたが、上部では雪が少ない為、かえつてハイ松や岩に足をとられ、アイゼンのツアツケを引かけないように注意が必要であつた。

カールを降り切つて長いトラバースに入ると、もう風もなく、空を覆つていた薄雲も消えてしまい、ポカポカと睡気を誘うような日和になり、完全装備がわずらわしい。

高山裏から板屋と、樹林帯の小起伏が続きうんざりとする。暑さとアイゼンの団子に業を煮やして板屋の頂上ではアイゼンもオーバースボンもぬぎすて軽快な姿になる。一時は三伏までと張り切つたが、結局、大日影を越えたところでダウン。

大聖寺平(7.00) 一荒川岳(9.30~10.20) 一高山裏(12.20) 一 大日影・小河内のコル(15.40)

1月1日 曇風強し

三伏峠までなのでゆつくりと出る。樹林帯では風もさして気にならないが、小河内の頂上近くになると風当りは強くなり、さすがは2800m級だと改めて小河内岳に敬意を表する。この辺りも伊那側をトラバース

するところなど、地肌が露出して、しかも固く凍てついているので、アイゼンを付けていても滑りやすく不安定で気味が悪い。

三伏峠はにぎやかなテント村で、トレースも舗装道路といつたところ。さつそく木立の中に空いた所をさがして設営。周囲のテントでは夜遅くまで歌声が響き、一体彼らは明朝何時に起きるのだろうと、よそ事ながら気になるくらいだ。

出発(9.30) 一小河内岳(10.40) 一烏帽子岳(12.20) 一三伏峠(13.00)

1月2日 一時小雪

最後のアタックと緊張したせい、今朝に限つて時間通りに目がさめる。みんな疲れているのか、食事をすませ休憩している間にも、こつくりこつくりと櫓をこいでいる。塩見へのルートもラツセルの要もない舗装道路なので、どんどんとばして3ピッチ少して頂上着。さすがに風が強くて寒かつた。長かつた縦走のフィナーレを飾るには少し物足りなかつたが、残り少ないタバコを分け合つて喫いつつ、過ぎ来し方を振り返ると、深い満足感とともに、改めて大きな喜びが胸一杯に広がってくるのを禁じ得なかつた。

出発(7.20) —塩見岳(10.05

～20) —テント帰着(13.10)

1月3日 曇

いよいよ下山の日。下山とをると、早く家に帰りたいという気持と、あと少し山に居りたいという気持とがからみ合つて複雑な心境になるが、一旦下り出すと、他の事は忘れてしまつて、早く降りてしまいたいとばかり思うようになるのが常である。峠からのジグザグ道は、よく踏まれているため固く凍りついて、アイゼンなしで下るのは骨が折れる。転倒続出。吉川は転んだはずみに上等の尻皮を捨て、「転んでもただでは起きない」というヒロイズム？の真髄を発揮。ジグザグ道を降り切つて塩川沿いにしばらく、やがて部落が現れた。夏のバス終点らしく休憩所がある。ここからのバス道路は道全体に厚い氷が張りつめており、又も転倒続出。鹿塩では、さつそく食堂にとびこんで栄養補給。正月のこと故、バスはやはり超満員で立ちづくめ。

三伏峠(7.20) —鹿塩(11.00)

1月4日 大阪着。

☆ ☆ ☆

この計画の実施に際して念頭を離れなかつたのは、60年度の荒川—赤石—大沢の縦走が終始風雪に苦しめられたという記録であつた。そして、この事を十分計算に入れて、所要日数、エスケープ・ルートなど、できる限りの対策を準備していた。しかしながら、結果は正に上々、終始、好天に恵まれ、塩見岳までも足を伸ばす事ができた。

だが、この記録を読まれた諸君に注意を促がしたいのは、これが冬山の真の姿ではないという事であり、この山行があまりにも恵まれすぎていたという事である。

だから、この記録のみによつて厳冬の南アルプスを安易なものとなすのはもつての外である。対称的ともいえる60年度の記録をも併読される事をお推めする。

(高田記)

< 装 備 報 告 >

		備 考	一コ当り 重 量	数	重量Kg
生 活 用 具	テント一式	テトロン	12.0	1	12.0
	ベグ	竹	0.1	18	1.8
	スコップ	大	1.6	1	1.6
	張線予備			20(m)	
	タワシ		0.05	2	0.1
	マジックインキ				
	ツエルト		1.2	1	1.2
	ラジウス		1.2	1	1.2
	コツヘル		0.8	1	0.8
	オ玉		0.05	1	
	テルモス		0.54	2	1.1
	クロシン	0.7ℓ/tent day	1.0Kg/ℓ	10ℓ	10.0
	ポリタン			2	
	メタ	放出品	0.12	6	0.7
	マンドリン			2(組)	
ロウソク	百匁ロウソク	0.2	5	1.0	
ふきん					
登 攀 具	ザイル(40m)	ナイロン	2.5	1	2.5
	カラビナ		0.12	3	0.2
	Fix ザイル	麻		50(m)	0.5
	ハーケン			5	
	ハンマー		0.4	1	0.4
そ の 他	天気図用紙			1冊	
	ラジオ		0.8	1	0.8
	エアマット 修理具 工 具		1	1セット	1.0
	ブラックテープ		1		
	ストツク		2		
					3.6Kg

(大 笹 記)

<食糧報告>

この度の縦走は、2日おきの完全なレイシヨンシステムをとつた。14日分の食糧のうち2日分は、生きるに最低のものがあればよいとの意見で極力軽量化をはかり、殆んど乾パンにした。例年の如く、たん白及び脂肪源はスープ袋を作りこれに頼つた。その内容は6人12日分で、鯨及び牛肉が夫々2Kg、ラード3Kg、野菜若干である。全部で12袋作り1日1袋の線であつた。なおスープ袋の作成は購入から調理まで生協に頼んだ。主食は朝夕は主として玉ランでたまにビーファン、昼はビスケット、クラツカー、カンパンかの何れかである。朝夕の主食は色々の点から判断しても玉ランが一番よいようだ。勿論個人差もあろうが。なお正月用としてもちを一食分持つて行つた。幸い縦走が早く済んでエッセンに対する大した苦情も出なかつた。

<献立表>

		1人分	回数	
朝	A	タ マ ラ ン ス マ ブ 袋 切 ー フ 干	1/2袋 1/6 若干	7
朝	B	ビ ー フ ン ス ー ブ 袋 切 ー プ 干	1袋 1/6 若干	7
		味つけはコンソメ(1/3) チャーハン(3袋)ミン(1/3)		
昼	A	ビ ス ケ ッ ト ジ ヤ ケ ャ ム ソ ー セ ー ジ	1本 1/6 1/3	5
	B	ク ラ ツ カ ー ジ ヤ ャ ム ソ ー セ ー ジ	1本 1/6 1/3	5
	C	カ ン パ ン ジ ヤ ャ ム ソ ー セ ー ジ	1本 1/6 1/3	4
晩	A	タ マ ラ ン ス マ ブ 袋 切 マ ネ ギ 干	1/2袋 1/6 若干	4
	B	ビ ー フ ン ス ー ブ 袋 切 マ ネ ギ 干	1袋 1/6 若干	4
	C	モ ス ー ブ タ マ ー プ 切 マ ネ ギ 干	5個 1/6 若干	4
		味つけは チャーハン(3袋) カレー(1/6はこ) ハンライス(1/6) 1回につき使用する		
		スープ袋は ラード120g 鯨肉 ラード120g 羊肉	120g 120g	18個 10個

<総 量>

「梶池新人パーティ」

タマラン	33袋
ビーフン	66袋
モチ	180個
ビスケット	30本
クラッカー	30本
カンパン	24袋
スーパ袋	28袋
ジャム	14本
ソーセージ	28本
タマネギ	14個
切干	適量
ニンニク	若干
チャーハン	42袋
カレー	1はこ
ハヤシ	1はこ
コンソメ	2本
ミソ	1袋
塩	1袋
砂糖	5袋
片栗粉	2本
紅茶	2カン
コーヒー	1本
緑茶	1本

阪大梶の木寮周辺にて

新人11名を2年部員以上とせしめることにより、新人の基礎訓練を確実にし、また逆に上級部員の行動を、ある程度ひろげようと、完全に2年部員以上と新人とは分れた合宿をとることになった。こういつた合宿が、今後望ましいか、どうかということはもちろん、最終的にはその年のリーダーグループの状態により決定されるものだろうが、原則として、今年度のような方針をとるのがよいものと思う。

新人合宿の目的として、雪山での基礎技術の習得と一口にいうが、結局、行動の一つ一つが、全て基礎技術であり、その積み重ねであることを、今一度、新たにしたい。このことは、上級部員であつても同じである。

以上のことを念頭に、私達は「新人の雪への馴れ」ということに特に気をつかつた。もう少し具体的に述べると、

1. 雪上露営。テント地の選定とテントの建設及びテントマナー、またテントの撤収。
2. 天気図と観天望気とによる気象判断の諸注意を實際面で身につけて

いくこと。

3. 本で得た雪質についての知識を、体験を通して自分のものにする
こと。
4. 雪上での実際の行動について
ほかにも細かい点はあるが、この
4点に注意して計画を考えた。

そこで行動面では

1. 新人の割に上級生がいないこと、
したがって、テント、キーパー等
にも問題が残ることと、上級生に
負担がかかりすぎること。
2. 前述した本来の目的を考えて
白馬岳往復はせずに、小蓮華往復
に留めることに決定した。また、
スキーによつて、雪を知ってもら
うが、この点に関しては梶本OB
に全面的にコーチを頼むことにし
た。

幸い、ラジオの予報よりも私達の予報の方が適中し、全員、小蓮華往復もでき、スキーもみつちり練習したわけだが、以下、反省点を書いておく。

これらの反省点の帰するところは、結局リーダーグループの責任であることを自覚したい。

1. 時間のロスが多い。とくにエッセンの支度に時間を要する。テント内でのラデイウスの扱いに慣れていないことも原因であるが、やは

りテント内の生活に慣れないところから起るロスが多い。

2. 行動のけじめをはつきりすること。
休憩のときは、はつきり休憩すること、テントの出入りその他で、これは、ロスタイムの原因ばかりでなく、けがの因でもある。
3. フアイト不足である。寒さからか、強風からか、雪山の生活に馴れぬものか、とにかく風に向かい、雪に向かつていこうとする気概がみられない。
4. 食い気、色気も結構である。しかし、山岳部ではそれが第一でないこと。
5. 小屋での生活も、本質的に、テントのマナーと変るところがない。ところで、小屋では、OB連と共に生活する。私達の計画は、予めの予定以外は、あくまで現役のみ力でできる範囲内におさえられている。従つて、OB連の自由な行動を目前にして、現役が規律を失つて、ある種のだれた雰囲気をもつてはいけぬ。これは、私達がともするとOBの束縛から開放された自由な行動にばかり目をとられるからであつて、もつと、山を本質的にどのように眺め、登つているのか、その態度から感じる

ようにしなければならぬ。

6. 天気図の作成は、一部を除いては、全員が書けるようになってきている。又、冬山での気象変化を身で以て経験し、天気図の解析に興味をもつ新人が現われてきたことは、喜ばしいことだ。

上級生は、自分で自分が嫌になる程、新人に対して、口やかましく注意する義務と責任があるということである。私達自身、この点を深く反省する。

次に行動表を掲げておく。又スキー練習の段階ものせておくから、今後の参考になれば幸である。

〔期 間〕 12月23日～11月4日

〔メンバー〕 L横尾(T₄)、大川(T₄)、木原(T₄)、出雲路(T₁)、糸井(E₁)、大野(T₁)、加藤(T₁)、黒田(M₁)、佐々木(S₂)、辻(T₁)、平岡(M₁)、細川(T₁)、渡部(S₁)

〔OB参加者〕 大島浩、梶本、住吉、宮本、野田、大工原、保母、酒井、佐藤毅、米沢、金子、三沢

< 行 動 表 >

	千国	猪股氏宅	御殿場	桐ノ木寮	天狗原	小蓮華	備考
12月23日 ◎→○		横尾・大川・木原・他新人		10名			千国→猪股氏宅 平均40K強 2時間 御殿場小ヤに 15K×12人 デモ 往復5時間
12月24日 ◎→①→◎		横尾以下全員			横尾・大川		猪股氏宅→ 桐ノ木寮 5時間20分
				木原以下1名			

12月25日 ◎→○			横尾以下9名 木原以下4名		榊ノ木寮→天狗原 3時間20分
12月26日 ⊗		大野(梶本OB)	木原以下4名		
12月27日 ⊗		(大島OB)	大野・梶本 木原以下4名		
12月28日 ⊕		(米沢)	木原以下4名 (大島) 新人3名		
12月29日 ○	(野田)(保母)(三沢)		横尾以下13名 (大島)以下2名 (米沢)以下2名	新人の 1部メンバーチェンジ 小蓮華往復 4時間40分	
12月30日 ◎→○	(酒井)(佐藤)(宮本)		(大島)以下9名		
12月31日 ①	(住吉)(大工原)		(大島)以下OB6名 現役2名 横尾以下14名	天狗原テント撤収 全員 小蓮華往復	
1月1日 2日 3日					
1月4日					猪股氏宅で解散

○ スキー練習日程

12月26日

11:00~12:00 直滑降・キックターン

12:00~13:00 全制動

12月27日(⊗)

11:00~12:00 直滑降

12:30~13:00 直滑降・全制動滑降

12月28日(⊗)

11:00~12:00 直滑降・斜滑降

12:30~13:30 斜滑降・横滑り・山廻り回転

13:45~14:30 全復習

12月29日()

12:00~13:00 直滑降・斜滑降・横滑り

山回り回転

13:15~14:00 ブフック・フアーレン

ブフック・ボーゲン

14:15~15:00 同上復習

12月30日(◎)

10:00~11:00 斜滑降・横滑り・山回り回転、スケーティング

11:30~12:30 ブフックフアーレン

ブフック・ボーゲン

システム・ボーゲン

1月1日()

8:00~9:00 斜滑降・横滑り・山回り回転、スケーティング

9:15~10:15 ブフック・フアーレン

ブフック・ボーゲン

システム・ボーゲン

10:45~11:45 同上復習
滑走

1月2日()

8:00~ 9:00 斜滑降・横滑り・山回り回転
プフフック・フアレン
プフフック・ボーゲン

9:15~10:15 シュテム・ボーゲン
シュテム・クリスチアニア

10:45~11:45 同上復習

1月3日()

8:00~ 9:00 斜滑降・横滑り・山回り回転
プフフック・フアレン
プフフック・ボーゲン
シュテム・クリスチアニア

9:15~10:15 シュテムボーゲン
シュテム・クリスチアニア

10:45~13:00 自由練習

以上でスキー練習日程終了。

(大川記)

<冬山スキー合宿装備報告>

今回、特に気のついた事を記すと、
 (1)ベグに竹を使用したのが、強度の点では最高である。アルミ位の重量と竹製の強さのベグがないものか。(2)スコ

ップは、実用性から云つても大きいのに限る。(3)スキー合宿である事を考えて、の装備が不十分であつた。又、合宿中、修理具の置き場など決めて置く必要がある。(4)タワシ、赤旗、マンドリン等を、大事に使つてほしい。
 以下、装備の数量などを記す。

	数	重量
テ	V ₁₁	12.00Kg
ン	V ₂₁	12.00
ト	V ₃₁	12.00
ツ	3	3.60
エ		
ル	60	6.00
ト		
ベ	20 ^{mm}	0.20
グ		
張	6	
線		
予	3	4.80
備		
タ	2	1.40
ワ		
シ	40	
ン		
ス	1	
コ		
ツ		
プ		
ノ		
コ		
ギ		
リ		
ロー		
ソ		
ク		
エ		
ア		
マ		
ツ		
ト		
具		
ザ	2	6.00
イ		
ル		
カ	5	3.00
ラ		
ラ		
ビ		
ナ		
赤	50	3.00
旗		
ラ	3	4.30
ジ		
ユ		
ー		
ス		
石	1	3.00
油		
コ		
ン		
メ	20	4.00
タ		
コ	3set	2.4
ツ		
フ		
エ		
ル		
マ	6set	
ン		
ド		
リ		
ケ	24 ^ℓ	
ロ		
シ		
ン		
ポ	3	0.1
リ		
タ		
ン		
ラ	3	
ジ		
オ		
寒	3	
暖		
計		
天	60	
気		
函		
用		
紙		
針	20	
金		
ス		
リ		
オ		
ン		
テ		
ー		
プ		

(辻 記)

<食糧報告(新人合宿)>

合宿の性質上、千国から天狗原までのボツカで済むこと並びに皆の要請で量質共に豪華にした。そのために費用の方は1日、200円を越してしまつた。なお桐ノ木寮に置いてあるカンパンを当てにしていた。カンズメ、ショウ油も少量残つていた。梱包は大部分一斗罐にしてしまつた。天狗原では外に置くし、小屋ではネズミにやられるからだ。主食は朝はモチ、マイルーメン、晩は米とビーフン(但し天狗原ではビーフンオンリー)をそれぞれ交互にした。モチは好評だつたようだ。昼は従来通りにクラッカー、カンパン。特製カンパンでぐつと力が出るのを考え出す時期に来ているようだ。肉はキャベツ、ニンジンをいため、ラードをほりり込んでスープ袋にした。これは生協にやつてもらつたが手数料をとられるので、各自家で作つて来る方がいいだろう。小屋ではラードが余つて棄ててしまひもつたないことであつた。天狗原の方では丁度いいようだつた。栄養の点では満点であり、オヤツにカンズメ2人で一個スープ袋もふんだんに使い、皆食ひばてし、肉を見るのもいやな程であり、ぜいたくなエツセン

であつた。それから種々様々な豪華な差し入れ(ハム、ソーセージ、カス汁、乾燥野菜、モチ、汁粉等)をしてくれた先輩達に感謝する次第だ。

<携行総量>

マルチラーメン	57袋
フランスパン	230個
ビスケット	80個
カンパン	120個
玉らんち	80個
もち	23Kg
牛肉	5Kg
鯨肉	10Kg
玉ねぎ	30Kg
馬れいしょ	23Kg
切干	1.6Kg
キャベツ	10Kg
ジャム、マレード	(50個) 7.5Kg
バター	15個
スキムミルク	7個
紅茶	7個
緑茶	7個
サンマ味淋干し	30個
砂糖	20個
塩	5個
カレー粉	30個
ソーセージ	80個
福神漬	30個
ラツキヨ	適量
梅干	15Kg

し ょ う ゆ	4 カン
み そ	10 袋
ワ カ メ	5 袋
ア	5 袋
ジ ャ コ	0.2 Kg
粉 あ ん ・ ア メ 玉	
リ ン ゴ ニ ン ニ ッ	適 量
に わ と り	

< 献 立 表 >

		1人分
朝	A	も ち 肉 鯨 玉 ネ ギ 200g 25g 1/4
	B	マルタイラーメン サンマ味淋ぼし 1人前 1/4
		味付は しょうゆ味噌
昼	A	カ ン パ ン タ ー ソ ー セ ー ジ 1.5 個 1/3
	B	フ ラ ン ス パ ン ジ ャ ム ソ ー セ ー ジ 3 個 1/3 1/3
	ことにフランスパンとビスケット1袋が入れかわる時あり 又各食とも紅茶がつく	
晩	A	(肉汁) 牛 肉 じゃがいも 玉 ね ぎ キ ャ ベ ッ 切 干 玉 ラ ン つけもの紅茶 50kg 1/2 100g 100g 若干 1/2 袋
	B	(カレー) 鯨 も ち 肉 じゃがいも む ね ぎ カ レ ー 粉 米 紅 梅 ぼ し 茶 50kg 1/2 1/2 1/4 袋 (1回につき) 1.5合

< 気象報告 >

月日	時刻	場所	天気	雲量	雲向	雲質	気温	風向	風力	雪
12月23日	7:00	山麓	☉	10					微風	
	10:00 ~18:00	"	○							
12月24日	6:00	"	☉	10	SSE	St	+6°	SSW	微	
	12:00	桐ノ木寮	○	1	SSE	Ci	5°	"	"	
	17:00	"	○	1	WSW	星	(63°)		"	クラスト
12月25日	6:00	桐ノ木寮	☉	10	WSW	Sc, St	+1°		微	
	12:00	天狗原	☉☉	9	"	As	-3°		"	
	19:00	"	☉☉	2	?	星	-4°	W	や強	
12月26日	6:00	小ヤ 天狗原	☉☉ ガス	10	?	St	-2° -4°		微	乾燥新雪 5~15cm
	12:00	小ヤ 天狗原	☉☉ ☉☉	10	?	St	-0.5° -9°	SW	微 かなり強	乾燥電であるが 顔にあたると すぐとける
	18:00	小ヤ 天狗原	☉☉ ☉☉	10	?	St	-1° -14°	W	微	
12月27日	6:00	小ヤ 天狗原	☉☉ ☉☉	10	?	St	-14°	WSW	強	新雪 15cm
	12:00	小ヤ 天狗原	☉☉ ☉☉	10	?	St	-9°	"	"	
	18:00	小ヤ 天狗原	☉☉ ☉☉	10	?	St	-5° -13°	"	弱	
12月28日	5:00	小ヤ 天狗原	☉☉ ☉☉	10	?	?	-5° -14°	WSW	かなり強	
	11:00	小ヤ 天狗原	☉☉	10	?	?	-9°	S	かなり強	
	18:00	小ヤ 天狗原	☉☉	10	?	?	-35° -14°	S	強	

12月29日	6:00	小ヤ 天狗原	○ ○	0	WSW	Ci	-5 -13	WSW	微 かなり強	乗鞍岳まで ヒザまでの ラッセル
	12:00	小ヤ 天狗原	◎ ①	6	WSW	Ci, Cs Ac	-5 +1	WSW	や強 微	
	16:00	小ヤ 天狗原	◎ ⊕				-2 -145		強	
12月30日	6:00	小ヤ 天狗原	① ガス	10	WSW	St	-3 -9℃		微	
	12:00	小ヤ 天狗原	◎ ◎	8	WSW	As	0	WSW	微	
	18:00	小ヤ 天狗原	◎ ①	4	WSW	Cc	-2 -6	WSW	微	
12月31日	6:00	小ヤ 天狗原	○	1~2	?	Ci	-2 -9	WSW	微	
	12:00	小ヤ 天狗原	①	5~6	S	Ac, As	+1			
	18:00	小ヤ	○	2		Ci	+2		微	
1月1日	6:00	小ヤ	◎				-3		微	
	12:00	"	◎	9	S		0	SW	"	
	18:00	"	◎	9~10	S	As, Ac	+2	SW	"	
1月2日	6:00	小ヤ	◎	9			-4.5		微	
	12:00	"	①	6	SSW		-1	WSW	"	
	18:00	"	①	6			-4.5	ENE	"	
1月3日	6:00	小ヤ	○	0	SW	Ci	-3		微	
	12:00	"	◎	8	SW	Ac, Cc Cs	0		"	
	18:00	"	◎				+3		"	
1月4日	6:00	"	⊕	8	WSW	Cc, Cs	-6		微	新雪 15cm

(注) : 小ヤの温度は便所における温度を載せてある。

(大川記)

春山合宿（'64.3.7～4.6）

— 双六より針木岳及び三俣新人合宿 —

【計 画】

春山合宿の計画にあつて我々が最初にしかも最も重点的に考慮したことは、当然のことながら、如何に事故を回避できるような計画を考えるかであつた。このことはすべての山行計画に於て強調されねばならぬことであるが、我々がこの事を特に強調するに至つた経過を述べてみたい。3年前の苦い経験以来、先輩達は着実に一度白紙に戻された形の部の再建の為に努力してきた。しかし、あの苦い経験も3年の年月を経ると、直接経験した者は最上級生のみとなり、なにかその失敗を忘れていく様な傾向が表われてきた。また、今後の部の発展の第一段階にあるとみられる今回の春山合宿に於て、事故を起こすことは唯単に失敗で片付けられる問題ではなく、今後の部の存在というものに致命的な打撃を与えるものであると判断された。従つて技術的な成果がある程度軽減されようとも、絶対に事故を起こさない確信のもてる計画を立てる必要に迫られたのである。

過去の部の再建時に行われた、冬、春山合宿は山を広く知ることの基礎の習得ということに重点がおかれた山行が行われた。これらの合宿では一応所期の目的を果たし、かつ広範囲に山を見直すという点も一応の成功を収めた。しかしこれらの合宿といえども積雪期の或る程度の岩尾根、ヤセ尾根をこなす技術、沢に対する知識といつたものを充分には与えてくれなかつた。積雪期の困難さというより危険度の増した岩場は大学山岳部のテーマとして適切かどうかについては我々は常に疑問を抱いているが、山行に於てそのような技術が不可欠のものであり、また広く山を知るといふ事に関しても必要であるとの判断から、沢、岩尾根を含んだ計画をたてることとした。

冬山が終つてリーダーグループの交代が行われたとき、今後部を如何なる方向にもつていくべきであるかについて多くの意見が出されたが、結局この問題については積極的な結論を得るこ

とができず、春山合宿も夏山合宿を過ぎるまで決まらないような状態であつた。このことは、とりもなおさず、まだ部の沈滞を意味し、かつまた山に対する考え方ができていないのではないかと考えられた。このような状態を考えてみて、部の活動が完全に軌道に乗るには、まだ2～3年の年月を必要とするように思えた。それに加えて、新人部員が小人数ならともかく、10人を越すような人数となると、新人の訓練という事を十分に意識しないと成果があがらないのではないかと考えられた。これらの観点を考慮して、今回の春山合宿を、新人の訓練ということに例年と比べてかなり大きな比重をおくような計画にもつていつた。しかしながら、2年、3年部員にとつては、今までの勢力を足がかりとして何か自分達にある程度の満足感が得られる山行をやりたいという気風がみられた。このような観点に立つとき、そのような気風を新人訓練のために一挙に壊してしまうことは残念であつたし、先に述べたような技術的な面からいつても、そのような気風を十分に延ばしていくべきだと思ひ、このような点をも考慮せねばならなかつた。

少くとも北アルプスに限つた場合、
いわゆる記録面でのパイオニアワーク

的な山行は、最早殆んど望めない状態であるといひ得る。そうかといつて、北アルプス以外に対象を求めるには、その場所における我々の経験が不足であるため、一挙に合宿にもつて行くことに不安を感じたし、かつトレーニングの場として考えた場合、北アルプス以上に好都合な場を提供してくれる所は他にそうざらにあるものでもない。この事から、その山行に何か広い意味での新鮮さを求めるには、山行自体の形式を変えていくとか、あるいは古い山行形式の中にもある意味を見付け出して、それを目標として行なつていくとか、いわゆる頭で考える山行をやつていかねばならぬように感じた。このように、パイオニアワーク的な山行ができないことは我々にとつては非常に悲しいことであるが、その反面より高い目標に目を向けさせてくれることもまた事実である。このより高い目標とは人によつて種々の受け取り方があるだろうが、それは部内に於ける人間関係であつてもよいし、海外の山であつてもよいと思ひ。そしてこのような高い目標を持たない限り、部の活動はマンネリズムに陥り、ひいては部の沈滞をきたすに至るように思えるのである。

以上春山合宿の計画立案に際して考

慮した点を列記した積りであるが、なにせ拙文故、充分に御理解願えるかどうか疑問とするところである。しかしとくに角上記のような事を考えて計画を進めていつたが、これらの考えがその関連に於て多くの矛盾をもっているため、それらを如何に処理していくかも大きな問題点であつた。以下に計画概要を記しながらこの問題について述べてみたい。

計画は、全員がワサビ平より鏡平を経て双六に至り、ここから縦走隊が赤牛迄のサポート隊をつけて出発し、赤牛北東尾根より東沢出合に至り、黒部川を遡行して南沢北西尾根より口元ノ木挽沢出合に降りる支尾根に取付き、北西尾根を越して針木谷南沢出合に至り、ここより針木西稜ジャンクション2100mより南沢出合に降りている尾根に取付き、西稜台地をA.C.として針ノ木をアタックし、帰路は同じルートをたどるといふ計画である。

また一方双六に残つた新人訓練を主眼とした隊はサポートが帰り次第、三俣蓮華小屋に入り、ここをベースとして、鷺羽、黒部五郎、雲の平、黒部源流を広く歩き廻るといふ計画である。

まず双六までは、先発が弓折カギ尾根の鏡平迄のルートを確認し、このカギ尾根を使つて途中鏡平に中継点をお

き、双六小屋に入ることとした。双六小屋からは縦走隊6人が、サポート4人と出発し、赤岳とワリモのCOLに設営し、水晶にフィックスを行い、赤牛までサポートを受けた後単独縦走を行う。ここに帰路のためのデポを行う。赤牛北東尾根の下りが、荷物が重いことから懸念されたが、実際にはワンボツカで通過できた。黒部川遡行は最も懸念された。特に渡渉の問題と、雪崩が心配されたが、雪崩に関しては古い記録であるが、三高の東沢生活のときの雪崩地図を参考にして考慮した。実際面での我々の積雪期の沢に対する知識が希薄なため、その記録の評価が困難であり、これを解決するため1日の偵察を設けることとした。しかし実際には往路では未だ底雪崩の危険はなかつたし、かつ新雪雪崩も5分おきにアワとなつて落ちる状態でさして心配はいらなかつた。渡渉も実際に行なつてみると水温は夏と殆んど変りがなく、十分に行うことができたが、帰路は増水により雪橋が流されたため、一ヶ所腰位までの渡渉を強いられた。次の問題点であつた西稜は、関大と京大及び岡山大の記録を参考とした。アタックには4日間をあて、そのうち1日は偵察を行いできたならそのまま頂上に向かう予定であつた。秋の偵察から、ローソク

岩付近はスバリ沢側を巻けそうであつたが、実際にはスバリ沢側はかなり傾斜がきつく、かつ一部氷化していたのでルートとするのをみあわせ、完全にリッジ通しに行つた。サポートはローソク岩までつけ、マタツクの帰路を確保してもらふこととした。アタックは16時間を要した。

三侯蓮華での合宿は比較的問題点が少なく、三侯蓮華以外にテントを出すか否かを考慮したが、人員構成の関係でテントは出さないことと決めた。

次に秋の偵察時の記録を記す。

〔期 間〕 1963年10月31日
～11月6日

〔メンバー〕 牧野(L₁) 原、豊坂

10月31日 P.m 9:35 大阪発

11月 1日 曇時々晴

大町7:00 一下瀬沢8:00 一

大沢9:45 一針の木峠13:30

岩陰に少し初雪の名残りがあるだけで夏山と変りはなかつた。

11月 2日 快晴

8:55 一針の木7:30 一第1

ギャップ8:50 一第1岩稜の頭

9:40~10:40 一針の木13:00

一小屋13:50 春山偵察の為に針

の木西稜を下る。西稜は第1岩稜の

頭まで偵察に下つたが、後から考えると岩稜地帯をもつと詳しく偵察すべきだつた。第1岩稜の頭までは雪がついても別に問題となる様な所はなかつた。岩稜は、リッジをいくには岩があまりにももろそうで時間がかかりそうに思え、関大ルートのようにスバリ側を大きく巻く方が良い様に思う。

11月 3日 雪後みぞれ後曇

8:15 一南沢出合9:35 一平

11:40 一木挽沢出合12:20

雪の中を針の木谷を下る。全身びしょ濡れで木挽沢出合の飯場につく。

11月 4日 晴

8:40 一東沢出合7:30 一

赤牛北東尾根途中9:30 一東沢

10:10 一テント地11:30 一

南沢13:45

春山に東沢一(平)一南沢間を通過

する。東沢出合より南沢岳北西尾根

2380mに突き上る尾根はアルバ

イトが激しく黒部川ルートの方が良いと思われる。しかしダムの為現在

木挽沢出合まで水がきているので、

又平を通過して南沢へいくのは雪崩

の心配があるため木挽沢出合より南

沢岳北西尾根1920へ突き上げて

いる尾根が最善のルートと思われ明

日、逆に南沢より偵察することにする

る。

11月 5日 高曇り

8:30 - 南沢出合より針の木谷

2つめの沢 - 南沢北東尾根上 9:00

一木挽沢出合 10:00 - 南沢 11:00

~13:00 - 船窪小屋 16:50

雪がないのでガラガラの沢を登り尾根上へ、ここからブツシュの中を何なく木挽沢出合にて。別に問題はない。

船窪小屋より 化粧の西稜の眺めはすばらしい。もう少し降つてくれれば良かったのに。船窪小屋に着く頃は皆クタクタになっていた。

11月 6日 快晴

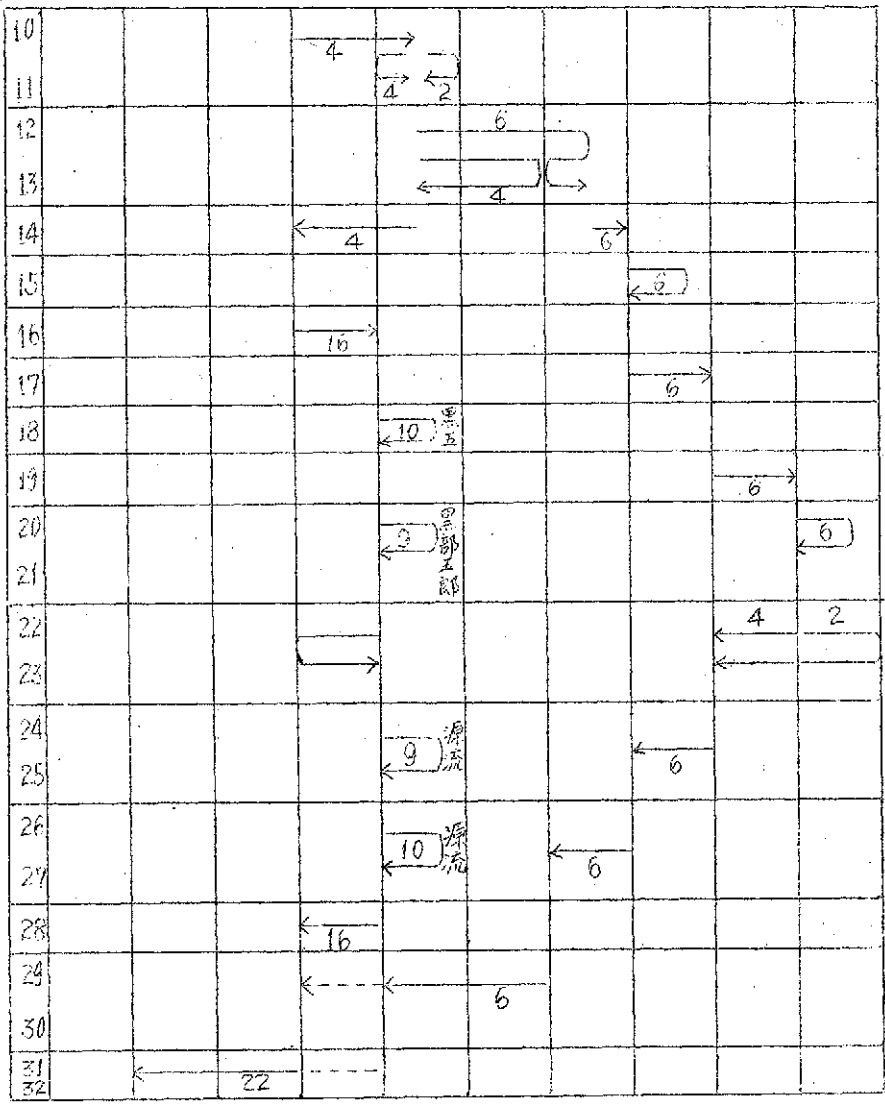
8:30 - 葛温泉 12:00

昨夕は遅くついたので、ゆつくり起きる。新雪の中を葛温泉に下る。

(豊坂記)

< 行動予定表 >

日	ワサビ平	鏡平	及六	三俣	水晶	赤牛	東出沢合	南出沢合	西台稜地	針ノ木
先1	3 →									
先2		3								
1	10 →	11 ←								
2	11 →	22 →								
3										
4		9	5(2+3)							
5			6							
6			5(1+4)							
7			12 ←	5 ←						
8				4 ←						
9			12(8+4)							
				6 →						



< 行 動 表 >

新 穂 高	ワ サ ビ 平	鏡 平	弓 折 六	三 侯	水 晶	赤 牛	東 沢 出 合	南 沢 北 西	南 沢 出 合 尾 根 シ ヤ ン ク ン	西 稜 台 地	針 の 木
3/8	→ 播本原 栗原										
9	← 播本	← 原栗原									
10		← 播本原 栗原									
11	→ (17) → (2)	→ (17) → (3)									
12		→ (20) → (16) → (4)									
13			→ (5) ← (15)	← 牧, 大庄							
14		● 停滞 (16)	→ (15) → (15)	← 牧, 栗原 ● (2) 大庄							
15			→ (15) → (15)	→ (5)							
16				● (20) 停滞							
17											
18				← 栗原104箱							
19				→ 後, 音川, 原, 白, 瑞木, 不, 次, 大, 管, 以, 中, 原, 栗原, 中, 村							
20				→ 吉川, 瑞木, 石, 洪, 大, 管, 以, 中, 村, 栗原							
21				● 停滞							
22											

＜ 行 動 記 録 ＞

[メンバー]

- 縦走隊 牧野(C.L, S3) 高田(E4) 橋本(T3)
 大笹(T2) 原(S2) 石浜(T2)
- サポート隊 吉川(S.L, S3) 中村(S3) 栗原(T2)
 畑中(M2)
- 新人合宿 桑原(T3) 木原(T4) 豊坂(M4) 以下新人
 佐々木、加藤、泉田、辻、出雲路、平岡、黒田、細川、
 渡部、糸井

＜ 行 動 概 要 ＞

- 3月7日
 夜先発3名大阪発
 の雪にうすくなつたガトレース通り
 に行く。非常に旨いルートを取つて
 いるが、なにせ大乗間沢のこと安心
 はできない。ところどころデブリが
 押し出している。尾根取付より2ピ
 ッチにデポ。尙入山に際しては新穂
 高までトラックをチャーターした。
- 3月8日
 蒲田で今田館の御主人に挨拶の後ワ
 サビ平まで入る。
- 3月9日 ⊗→◎
 2名が鏡平への登路偵察に向かう。
- 3月10日 ○
 昨日の関大のラッセルに助けられて
 快調にとばし、結局弓折までのルー
 トを確保する。
- 3月11日 ◎
 本隊入山。ワサビ平に4人を残して
 鏡平の途中までデポに向かう。前夜
- 3月12日 ◎晴又①
 ヘッドランプを付けてワサビ平を
 出発、鏡平に向かう。荷物はさ程な
 い。尾根の登りでトレーニングの足
 りぬ新人がバテる。矢張り参加させ
 るべきではなかつたのか。ラッセル

も軽く簡単に鏡平に入る。すぐデポを回収。

ワサビ平500—鏡平1100—
デポ地1300—鏡平1500

3月13日 ㊦→㊧

弓折までは尾根通しに行く。大人数であることも手伝ってラッセルは軽い。弓折にかかるころから槍、穂高の上にいやな感じのうす黒い雲がかかっている。水晶の方も吹雪いている様な感じで荒れてきそうなので急ぐことにする。双六は相変わらず風が強い。雪が降り出したため、5人を双六に残し残りはすぐに鏡平に引き返す。双六小屋には関大が入っているので、我々は階下に入る。2名が三俣蓮華までのカンニングルートをさがしに行くがガスのため視界が利かず途中で引き返す。

鏡平550—双六小屋940—鏡平1040

3月14日 鏡平㊧ 双六㊨時々㊩

鏡平では終日雪のため停滞。双六の連中は3名が三俣蓮華まで散歩。矢張り尾根通しに行くのが最も良い様だ。双六のピークで鏡平の連中とトランシーバー交信。

3月15日 ㊨→㊪

一応前線が通過し、後に大きな前線が控えているので鏡平の連中は前線

の間を利用して出発。新雪のためかなりきついラッセルとなる。弓折に立つ頃より晴れ間が見えてくる。

アイゼンを利かしてはやばやと双六に入る。双六の連中は風雪のため停滞。2名が縦沢に登り本隊と一緒になる。これで入山以来1週間目に全人員、物質とも双六に集結。まずは一安心。あとは天候の回復を待つのみ。小屋が急ににぎやかになり、話がはずむ。

3月16日 風雪

停滞 ラジオは春一番の到来を告げている。真暗な穴ぐらで終日寝る。小屋の汚なさに驚く。確かに一部の岳人の良識を疑いたくなる。

3月17日 月雪後㊪

停滞 階上にいた関大が出発したので階上に移る。相も変わらず荒れている。

3月18日 風雪

風雪が可成り弱くなつたので出発とする。縦走隊6名、サポート隊8名が出発。双六の登りはかなりきついラッセルで雪崩を危惧して休まず一直線に登る。風が強くはやくも足指の先が痛んでくる。あとは強風の中をアイゼンを利かせて快調とばし三俣蓮華小屋に入る。昼食。ここでサポートの4名が引き返し残り10

名が更に共に向かう。鷲羽の登りに
さしかかる頃より猛烈な地吹雪とな
り風に体をとられる。懸念していた
ワリモのピークも雪がついているた
め意外と簡単に通過し、赤岳とワリ
モのコルに設営する。

双六小屋645一鷲羽1200一
O.S.1330

3月19日 ○

風は少々強いが昨日とうつて変わつ
てぬぐつたような快晴。気温も
-20°と一流の冬山並みに昨日の
凍傷がひどい2人を残して8名が喜
びいさんで出発。3名は水晶のフイ
ックスに向かう。赤岳側は殆んど夏
道通しのルートが可能だが、一ヶ所
いやな雪のつまつた小さなルンゼに
フイックス。赤牛側は予想に反して
全然氷化がみられず簡単にフイッ
クスする。針の木がはるかかなたにか
すんでいる。帰途は全く風がなくな
り写真をとりながらシャツ1枚での
んびりと帰営する。三俣蓮華小屋の
デポ回収に向かつた5人も午前中に
帰営。午後のはんびりとエアマット
の上でトカゲを楽しむ。

3月20日 風雪

停滞 ブロック作りに精出す。終日
ホットケーキ作りに精出す。

3月21日 風雪

停滞 出発準備をするも天気好転せ
ず停滞する。サポート隊が赤牛を往
復するのに10時間の好天を必要と
すると判断し、無理をさける。風邪
が流行り、全員が苦しうに咳込ん
でいる。夜喉の痛みが激しく寝られ
ない。

3月22日 ⊕

停滞 朝は好天であつたが何となく
怪しいので様子を見てみると案の定
吹雪出し沈とする。サポートをつ
けた縦走の難かしさを感じる。そろ
そろ身体がなまってくるし、気持も
イライラとしてくる。明日は好天で
ありますように。

3月23日 ①

3時に起床。直ぐにテントの入口を
あけて天気を見る。雲の切れ目から
星がみえる。思わずニタリと笑う。
出発時にはかなりの強風となり時折
地吹雪が襲うが、晴れ間が多いので
気が楽である。人数が多いので水晶
のフイックスに想当の時間を食う。
風邪は末だ勢いを弱めず全員咳こみ
ながら歩を進める。喉がはれている
ので呼吸が苦しい。赤牛までは夏道
が出ているので完全に夏道どうして
進む。サポートは赤牛頂上より直ぐ
引返す。赤牛頂上はガスに包まれ北

東尾根が定かではない。昼食をとつて様子を見るが、ワンボッカで行ける見通しもつき、天気も好天しないのでピークの北東尾根側に設営する。

C.S.640 一赤牛頂上1140

3月24日 ○

烏帽子のあたりが朝焼けで真赤に染まっているが、今日1日天気は良さそうだ。荷物はかなり重いが天気が良い。頂上直下のヤセた急な尾根を慎重に下るとすぐに岩峰につきあたるが、黒部側を簡単に巻く。以後は樹林帯迄は快速に駆け下るが、樹林帯に入った途端股位迄のラッセルとなり、落とし穴も手伝って、下りながら荷が重いのでちよつときついが、全員いかにも幸福そうに。ハシヤギながら歩く。途中の岩稜も黒部側の急な斜面を使つて巻くことができた。東沢出合付近で京大のパーティーに会う。春こんな所をウロウロしているのは学生ぐらいのものだろう。互に自己紹介のあとしばらく雑談をして別れる。東沢出合の橋を渡り対岸に設営。原がさつそく岩魚釣りをするが収獲零。吉川名人の話だと春は良く釣れるそうだが。

C.S.640 一東沢出合1400

3月25日 ⊙

湿雪がシンシンと降る中を3人が黒

部川の偵察に向かう。東沢出合より300m位で早くも渡渉を強いられるが、思つた程冷くないので安心する。雪崩も降つた雪はすぐ落ちてしまふし、底雪崩も先ず心配ない。

三高の東沢生活の時の記録と雪橋の位置まで一緒に変わるようで変わらない自然に改めて驚かされた。関電の話では口元の木挽沢出合までダムの水がきているということだつたが、平付近までしか来ていない様だ。

予定の尾根もはつきり確認できたので引き返す。往復16回の渡渉と湿雪の為全身ビショ濡れでテントに入る。

CS730 一口元の木挽沢出合1130
—CS1330

3月26日 ○→⊗

口元の木挽沢までは昨日の偵察通りのルートを取り簡単に出合に着く。途中播本が渡渉中にひっくり返つて全員大喜び。口元の木挽沢出合で昼食をとり身仕度を整えて対岸の南沢北尾根の支尾根に取付く。初めから猛烈なラッセルで1ピッチで50mも稼げない。先が思いやられる。しばらくするとラッセルは軽くなつたがザラメに変わり、下とのなじみがりすいたためトップの作つたトレースがたちまち崩れてしまふ。まつたく

懸地獄に登っている様で段々荷々してくる。石浜はとうとう本気になつて怒り出して大声で喚んでいる。

ジャンクシヨン 1920m に着いた頃は雪も降り出し既にフラフラであつたが全くホツとした感じ。明日も雪らしいし、この調子では明日中に西稜台地まで行く事は無理であると判断し、明日は南沢出合迄ということにする。

CS705—口元の木挽沢出合
1030~1145—ジャンクシヨン1630

3月27日 ⊗

最初の計画では1920mのジャンクシヨンより更に200m程登つて尾根を使つて針木谷に降りる予定であつたが、ジャンクシヨン直下の沢がかなり安定してそうなので沢を下ることにする。が、雪崩の心配は抜けず一列になつて真直ぐ一気に駆け下りる。南沢出合に設営。

CS845—南沢出合1105

3月28日 ◎

漸く西稜に取付く日である。が、雪質が悪く傾斜もきつく最初の50mに1時間もかかり、頭にくることおびただし。積雪量ももう少し多かつたら楽なのだろうが意外に少ない。今日中にはどうしても台地に着きた

い一心で黙々と荷々しながら登る。しかしこの苦勞も西稜台地が見え、その右手に針の木を見るに及んで報われた感じがした。ついに来た。

CS640—ジャンクシヨン1630
3月29日 ○→⊗

昨日の疲れが残っているため偵察のみを目的として出発。直ぐに「隠砦」なるものにぶつかるが右に左に急斜面を巻いて西稜台地に出る。ピーナツ岩峰が非常に大きく見える。ピーナツの基部まではリツジ通しに行けそうだが時間を食いそうなのでスバリ沢側を巻いて「樺ランゼ」に入る。傾斜も思つた程なく、雪質も良いので割合楽にピーナツの基部に立つことができた。次の1ピッチは細い、ブッシュの出た急なリツジとなつているため10m位のfix を行う。次の岩峰は可成り手強そうだ。どのルートも似たりよつたりで適切なルートを選びにくい。雪が降り出したので引き返すことにする。明日は良い天気になります様に。

CS845—岩峰基部1330—
CS1500

3月30日 ○

3時に叩き起こされる。寒い。思わずニヤツとして入口を開く。星がキラキラ輝いている。雲一つない快晴

だ。播本と石浜が徹夜で靴を乾燥していてくれますますやる気がでてくる。アタックの牧野、原、サポートの高田、大笹は4時丁度ヘッドランプをつけて出発する。幸い昨日のラッセルはクラストしておりピッチがはかどる。ピーナツ岩峰基部で丁度夜があける。清々しい。直ぐに岩峰に取付く。最初牧野が右寄りのルートを取るが雪が非常に不安定で苦労する。右側に3m程のトラバースをする所で一枚岩に阻まれる。全然ハーケンが打てない。ここを越せば以後は行けそうなのだが。1時間程頭張るがとうとう力尽きて高田と交代するが、高田もとうとうあきらめる。次いで大笹が左寄りのルートを試みる。3m程の垂直な雪壁に取付く。旨く乗越し水平に10m程トラバースする。「行けるぞ」と声がかかる。ホットして後に続くが全くいやなルートだ。トラバース終了点の小さなテラスからは這松と雪のミックスした50度位の斜面を40m一杯に使って岩峰の頂上に立つ。まだこれからというのに既に9時で時間的に相当ロスしている。岩峰からは2人づつがアンザイレンして雪と岩のミックスしたナイフリッジを忠実にたどる。スバリ側は雪面が氷化している

ような感じがかつ急傾斜なのでとても巻く気にはならない。針木谷側も雪崩れそうでちよつと使えない。

10時頃ローソク岩の最後の岩峰に突きあたるが、岩がもろく大いに手こずる。細い岩稜を馬乗りになつて進み11時核心部を抜け出る。ここでサポートと別れる。アタックの2人は時間も遅いし明日の天気が悪そうなので頂上までノンストップで行くことにしてすぐ出発する。第一ギャップの下りはスバリ沢側を少し巻いて底に達し、登りは真正面からブッシュを掴んで強引に登り切る。後はクラストした所を選びながらも言わずがむしやりに歩く。全くの快晴で猛烈な暑さだが止まつてジャケットを脱ぐ時間が惜しいので我慢する。頂上直下の岩壁も真中を走るバンドを利用して難なく乗り切り2時頂上に立つ。2人で握手を交わし、残り少ない煙草をわけ合つて喫む。たちまち30分が過ぎ記念写真をとつてかけ下る。第一ギャップでテントとの通話でアタック成功を知らせる。ローソク岩にかかつた時には既に6時になっていたが明日の天気怪しいというテントの意見でサポートがつけてくれた捨て繩で時間を稼ぐ。朝登るのに苦労した岩峰も2回のアッ

2回のアップサイレンで降りきる。
ここでちょうどつよりと日が暮れ
ヘッドランプをつける。全くいいタ
イミングだ。あと30分遅かつたら
岩峰上でビグアークを余儀なくされ
るところであつた。後はテントまで
踏み跡をたどりながらブラブラと歩
く。東の空が薄明かるくなつている。
月の出らしい。8時過ぎテント帰着。
16時間動いた割には全然疲れを感
じない。明日は南沢出合までなので
夜遅く迄アタックの残つた食糧を食
べながらダべる。良い一日であつた。
アタック：CS4000-ピーナツ岩
峰基部5000-岩峰上9000-ロー
ソク岩11000-頂上14050
14300-ローソク岩基部19000
-CS2030
サポート：ローソク岩引返し点

3月31日 ○→①

ラッセルの跡を迎える足も軽い。天気
は良いし、アタックは成功したし、
荷物も軽くラッセルもなく、かつま
た加えて下りともなれば気分の良い
事限りなし。たちまち南沢出合に着
く。針木谷のせせらぎを見ながらザ
ックに腰かけているとつくづく幸福
感を味わう。エッセンが乏しくなつ
てきたのがつらいが、明日はたらふ

く食えるだろう。

CS9000-南沢出合1145

4月1日 ①→②

往路の沢は雪がしまりラッセルも苦
にならない。黒部川は相当増水して
いる様だ。底雪崩がこちらこちらに
発生してデブリが押し出している。
往路に使つた雪橋が崩れていたので
渡渉回数が増える。東沢出合にテン
トを張る。デポのカンガ一つ何か動
物にやられたらしくカラッポで全員
ガツカリする。これで赤牛頂上まで
はまた腹を空かせて歩かねばならな
い。

CS6100-19200mジャンクシ
ョン8500-東沢出合13000

4月2日 ①

北東尾根はトレースがうき出してい
思つたより楽に行ける。2400m
付近にドン。

CS6200-北東尾根24000m
14200

4月3日 ①→②

真赤な朝焼けと共に歩き出す。赤牛
頂上のデポは健在。水晶にかかると
より雨のはげしくなり赤岳とワリモ
のゴルにテントを張る。夜暴風雨と
なりシュラフに池ができる。

CS6000-赤牛7500-CS
14000

4月4日 ①

強風と雨はまだおさまっていない。
石油缶には半分位水がたまり昨夜の
雨が激しかったことがわかる。午後
から晴れたので干し物に大わらわ。

4月5日 〇

一昨日、昨日の雨で地肌が露出し全
く情ない限りの雪山である。鷲羽の
頂上で三侯の連中が双六へ向かつて
いるのが見える。三侯蓮華小屋で吉
川の伝言より連中今日ワサビ平まで
撤収するとの事。我々も急いで追いつ
こうとするがまずは腹ごしらえと
エッセンにとびつぐが、あまり多い
ので却つて食欲減退する。双六小屋
でサボツて暗くなつてからワサビ平
に向かう。深夜ワサビ平の小屋に入
る。

〇8600—三侯740—900—
双六1100—1830—ワサビ平
2300

<三侯蓮華パーティー

行動概要>

3月23日

3:10 テント地着

テント地まで来ると、弱い風雪気味
になつた。時間も遅いし撤収は明日と
する。とにかくこれでサポート隊の一
つの任務は終つた。明日からは我々こ
のテントの中の連中を主力にしての行
動である。三年二人、二年三人、新人
10人、このメンバーでとにかく北ア
ルプスの稜線上で行動するのである。
とにかく無事故でありたいと思つた。

3月24日 快晴

ガスが晴れているので源流から祖父
岳附近もよく見える。源頭より祖父岳
の間は問題はなさそうである。鷲羽の
下りのところで豊坂、加藤、黒田、辻、
の登つてくるのに会つた。吉川はその
4人と共に鷲羽のピーク往復。他の3
人は三侯蓮華小屋先行することになつ
た。小屋には泉田、出雲路が来ていた。
鷲羽へ登つた連中とともに双六から来
て、ここで連中が帰つて来るのを待つ
ているのだ。山での行動を下界で考え
ていた計画以上のものにするときには
余程慎重になる必要がある。とにかく
無事に双六小屋に集結することが出来
た。小屋では風邪がますます流行して

いた。

3月25日 風雪、停滞

3月26日 曇

風邪のひどい者がいるので三俣へ行く天気ではあつたが中止し元気を連中だけで三俣まで往復するにとどめた。

3月27日 曇

全員三俣遊華に入る。風邪のひどいものだけ小屋に入り、他の10名はテントに入る。午後全員で雪洞を掘る。出来上りは余りよくはなかつたが、雪洞の掘り方はわかつたものと思う。

3月28日 雪 停滞

3月29日 晴のち曇

黒部五郎へ出発する。出発する時は快晴だつたが三俣のピークに達するところから急に曇りはじめた。黒部乗越へ降りている斜面以外は適度にクラストして歩きよい。黒部乗越は風が吹き抜けないのか、雪が全然しまつていない。小屋なんかは影も形も見当らなかつた。乗越からワツバをアイゼンの上につける。夏道のある尾根を登る。ピークに近づくにつれてガスが出てくる。全くどこにピークがあるのか解らなくなる。ピークの道標を発見することによつてピークに達したことが解つた。しかし全く何も見えない。少し待つて見たが晴れそうにないので引き返す。黒部乗越附近から見ると、このガスはピーク

にかかっている雲のためらしい。帰途、黒部源流、祖父沢の出合附近まで見えた。まだ流れは出ていない。

6:40発一(8:30~45)黒部乗越一(11:20~20)黒部五郎ピーク一(12:20)黒部乗越一(14:15~25)三俣ピーク一14:45テント地

〔メンバー〕吉川、豊坂、栗原、出雲路、平岡、泉田、糸井、辻
他は三俣にてスキー練習

3月30日 快晴

本日は2パーティーに分けて、黒部五郎と鷺羽へ行くことにする。風邪は少しは下火になつてきたが、足の故障者が出てきた。

鷺羽パーティー

頂上で用足しをした。余り魅力的なので鷺羽の池畔を散歩する。快晴無風である。本当に春山らしい天気である。帰途再び頂上まで登らずに直接急斜面を下つて三俣のコルに達したが、新人をつれて行くコースではなかつたようである。反省の必要がある。

〔メンバー〕吉川、畑中、辻、平岡、泉田、細川

6:30発一7:15鷺羽一9:05テント地

〔テントキーパー〕佐々木、糸井、出雲路、黒王

3月31日 曇→ミゾレ

前半が終了したので小屋へ食料をとりに行くことにする。まだ鷲羽へ行っていない新人は本日行かせることにする。

〔メンバー〕 鷲羽：吉川、栗原、渡部、出雲路
双六：豊坂、畑中、中村、平岡、辻、黒田、加藤、細川

〔テントキーパー〕 黒田、佐々木、糸井

4月1日 雨 停滞

4月2日 快晴

小屋の近くはクラストしていたので少しスキーをかついで行つてからスキーをつけた。新人が冬に大分ソコカれたのかスキーによく慣れている。源流をシールをつけて登る。乗越までシールが快適にきいた。乗越でスキーをアイゼンに代えて祖父岳に向う。祖父岳は北アルプスの展望台のようであつた。帰途シールをはずして源流をスキーで下つた。京大の記録にも書いてあつたが、実に楽しい斜面である。源流が三俣のゴルからの沢との出合の付近で顔を出していた。皆喜々として水を飲んだ。吉川、栗原にて祖父沢の出合付近まで偵察に行つた。源流は祖父平の附

近から流れが現れていた。岩魚は釣れなかつたが澄み切つた空のもとで沢の音を聞きながら林の中をスキーでボンボン歩くのはこの上もなく楽しい。

7：30発—(8：25～8：45)

三俣蓮華のゴルへの登り口—9：30乗越—9：50乗越発—10：10祖父岳—10：40祖父岳発—11：20乗越発—ゴルへの登り(11：37～12：30)—1：25祖父沢の出合—4：30帰着。

〔メンバー〕 泉田、平岡、黒田、出雲路、細川、吉川、豊坂、栗原、中村

4月3日 晴→雨

偵察の結果祖父沢をつめるのは相当の時間がかかりそうなので天候とメンバーを考慮して昨日と同じコースを行くことにした。一時間早く出発したので雪がゴリゴリでスキーのエッジも立たないようなところがあつた。しかし日射があるとすぐに溶ける。テントを徹収して全員小屋へ入る。

〔メンバー〕 吉川、豊坂、畑中、中村、辻、糸井、渡辺、加藤

4月4日 雨 午後前線が通過し晴れる。

風邪はまだ完全に治まっていなし、全員が体の調子があまり良くないので

ドクターは早く下山させた方がよいと言う。縦走の連中がまだ帰らない先に下山させることにした。それで次の晴天には下山することに決定した。

4月5日 晴

平岡、吉川の二人が双六で縦走隊を待ち他は本日下山することにする。

6:50発 (9:00~9:20)

双六

4月6日 ◎

ワサビ平にて9時解散。蒲田館に寄つて御礼をする。下山が遅いので心配して下さつていたとの事。下界はすっかり春の景色である。女性がキレイに見えて仕方がない。

< 装 備 報 告 >

		鈴の木 サポート隊				黒五 居残り隊			
		品 名	数 量	単位重量	総重量	数 量	単位重量	総重量	
露 営 用 具		テント(含ポール)	T ₂ T ₁	1 2.0 8.0	2 0.0		120 120	2 4.0Kg	
		ツェルト	附T ₂ 附T ₁ 1	1.2	1.2	附V ₂ 附V ₃ 1 1	1.2 1.2	2.4	
		雪洞用入口				1	1.5	1.5	
		グランドシート				1	1.5	1.5	
		テント用ペグ	24 20	0.1	4.4	20 20	0.1	4.0	
		雪洞用ペグ				11	0.15	1.6	
		予備張線	12			15			
		タワシ	2 2			2 2			
		スコップ	大 小 1 1	1.6 1.2	2.8	大 大 1 1	1.6 1.6	3.2	
		ノコギリ	1	0.7	0.7	1 1	0.7 0.7	1.4	

登 攀 用 具	ザイル	ナイロン 40m	3.0	3.0	ナイロン 30m 40m	2.5 3.0	5.5	
	ハンマー	1 1	0.7 0.7	1.4	1 1	0.7 0.7	1.4	
	カラビナ	6 4	0.12	1.2	5 5	0.12	1.2	
	ハーケン	10	0.1	1.0	5	0.1	0.5	
	ハーケン	2	0.4	0.8				
	フィクスザイル				100m (8mm)		3.0	
	竹ざお(旗付)			1	50 +30	0.1	ボツカずみ 3.0	
炊 事 用 具	ラジウス	2 1	1.2	3.6	1 1	1.2	2.4	
	コップエル	1 1	0.8	1.6	1 1	0.8	1.6	
	マンドリン	4 3			3 3			
	テルモス	2 1	0.4	1.2	1 1	0.4	0.8	
	ポリタン	2 1	0.2	0.6	2 (1)	1 (2)	0.2	0.6
	オタマ	1 1			1 1			
そ の 他	ラジオ (電池スベア付)	附T ₂ T ₁	0.8	1.6	V ₂ 1	V ₃ 1	0.8	1.6Kg
	天気図用紙	70 20			70 70			
	針 金	5m			5m 5m			
	テ ー プ	1	0.5	0.5	1	0.5	0.5	
	ベ ン チ				1	0.5	0.5	
	トランシーバー	2	1.0	2.0				
	寒 暖 計	1			1 1			

日毎消費物について(双六から後)

ロウソク (1テント毎 1日1本)	14 3	0.06	0.26	23 23	0.06	4.2Kg
メタ(3日/1個)	17 2	0.1	1.7	8 8 17 17	3 1 0.1	3.4
クロシン(1日0.7ℓ) 80ℓボツカずみ	15 2.8ℓ	0.8	2 1.6	161 161 30ℓ 30ℓ	2.1 0.7 0.8	4.8

前半(双六まで)5日分とみる

ロウソク25本(1.5Kg) メタ7個(0.3Kg) クロシン14ℓ 11.2Kg)

(注)数量のタテ覧に示してある量は全て最上のテントに従うものとする。

(例、テント用ベグ24はT₂に20はT₁に)

< 装備報告 >

40日にも及ぶ長期日を要する遠大な合宿計画であるために全て細心の注意を払って計画した。途中ラジウスの調子が思わしくなかつた事が生じたが別にとりたてて支障が生じなかつた。これは部員一人一人の自覚のたまものであり各部員の装備にたいする意識が充分高まつて来ているのは良い傾向であると思う。

自分では各装備一つ一つについて細心の注意を払い、いろいろと工夫して来たので自分の計画を強引に進めた。

(中村記)

< 食糧報告 >

A. 献立について

B. H での食糧は秋のボンカによるものと使い従来と変化ないので、縦走隊の食糧表を最後に示しておいた。[] は1人当りの量、①②・・・は解説である。かなり軽量化と云う点に留意したつもりである。1日1人当り、780gである。

B. Packing

ダンボールの箱に塗料を塗って使った。一斗カンを使うよりずつと軽い、つぶれないかと少々心配であつた。塗料の選択、ボンカ中の扱いによつては、十分保たす事が出来ると判つた。東沢出合ではデポを行つたが(一斗カン)、獣に破られて中味をすつかりやられた。これから工夫の要る所である。梱抱は、最初完全なレーション制にするつもりであつたが、非常に手数がかかりそうなのでやめ、縦走やサポートの分だけテント毎(6人と4人)2日分のEssenを一つの箱に梱抱した。調味料、砂糖、茶、紅茶、ミルク etc 毎日少しづつ使うものは、別に開け閉めの簡単な箱にPackした。今度の場合、メンバーの移動等割と単純

な山行であつたが、テント数の多い
 ボーラー等、複雑な人員配置と予定
 変更のある山行の場合、完全に充た
 されたレーションの箱を幾つも作る
 事が最良であらう。

Table 1

種類	主 食	副 食		
テ ン ト 食 ①	小麦粉ダンゴ (125g) ②	ブタ汁 = みそづけ豚肉③ (40g ^肉 + 20g ^{みそ}) カンラン ④ 切 干 ラード		
	玉らん (1/2袋)			
	米 (1.4合)	コンソメスープ = 油揚げ牛肉 (40g) ⑤ カンラン 切 干 ラード ニンニク コンソメ 炒飯の素		
	玉らんモチ			
行 動 食 ④	イタリアントースト カステラパン アルマ カンパン バターランド クラツカー	ココア	ウインナーソーセージ (1本) チ ー ズ (1コ) [2コ]	チョコレート ハム ピーナツ サラミンソーセージ
		紅 茶		
ア タ ク 食 ⑦	ラ ス ク ク ツ キ ー クラツカー バターランド	コ コ ア レ ー ズ ン チ ヨ コ レ ー ト 焼 豚	ハ ム チ ー ズ ベ ー コ ン ヌ ガ ー	

(解説と反省)

- ① テント食とは、夕食、朝食、停滞の時の昼食etc、ラジウスを炊き調理を必要とするもの。
- ② 沸とうしている汁の中にスプーンで落していく。1人前10円にもつかず経済的である。スキムミルク、塩を混ぜてこねると案外うまくいった。
- ③ 豚肉40gの片を6片、ガーゼにつつまみその上からみそ(白みそ+普通のみそ)でくるみ、すずハクとポリエチで梱包する。みそはそのまま調味料となる。生の肉の美味さが一月近く保存され、好評であった。少々重い、今後ベース等で使ったら良いと思う。
- ④ 雪山で生野菜を食べたいと云う願望に応えたもの。かなり長くもつたが、20日をすぎると赤く変色したりした。おいしくて好評だった事は云うまでもない。
- ⑤ 従来のスープ袋に代つてお目見えしたもの。牛肉を油でから揚げにする。夏山でも10日間保たす事が出来る。
- ⑥ 行動用の昼食や予備食、朝の早い日の朝食etcに使う。アルマ一本やりを改め、目先をかえて種類を豊富にしたが、そのためかさ

高いものになった。副食を充実させ良質なタンパク質を一定量

(30~40g)とるようにした。

- ⑦ アタック食は三日分であつたが、調理を全く必要としないものに限つた。とにかくおいしく食べれそうなものを片つばしから買つてパッキングしたが、実際非常な悪条件の中で疲れてビヴァークした場合、どの程度食べれるか?アタックが十数時間の行動から帰幕した時、何も食べたがらずに、(普段は人一倍がつつく連中なのに)水ばかり飲んでいるのを見て考えさせられた。
- ⑧ 最後に、計画にはあつたが実現出来なかつたものについて。主食としてはマカロニやスパゲティー。それからチーズや卵入りの好みに合つた特製カンパンも今後の課題だろう。市販されているポタージュ類を使つてホワイトソースを作つたら、又粉末しょう油を手に入れて八宝菜や高野豆腐やしいたけの煮つけを作るのも楽しいだろう。肉はすぶたに使うようにサイコロ状に切り、カタクリ粉をまぶしてから揚げれば、保存もきくだろうし、又違つた味があるだろう。考えていると次々浮んでくる

のだが、こうなるともう山に登るために食べるのか、食べるために山に登るのかわからなくなってくる。もうこの辺でおいとおこう。

(大笹記)

< 医療報告 >

今年の春山は縦走隊、サポート隊、新人隊が途中から別れ、医療係が遅れて入山し、連絡が不十分であつた為、間違つて新人隊用の薬品がサポート隊に持つていかれ、薬品が少々不足したことは十分反省の必要がある。今年の春山程風邪にかかると者が続出したことはかつてなかつた。新人隊、サポート隊中8割はゴホンゴホンとやつていた。その中2人は 38°C 以上の高熱を出し、最初は微熱だつたので普通の風邪薬を与えたが高熱になつてしまつた。

37.5°C 以上になれば直ちに、抗生物質を投与し早期に治してしまつた方が良いでしょう。新人が2人足先の感覚がなくなり夜間痛みの為寝られぬ者が出た。別に悪天の時歩いた訳でもないのに起つたことは靴が合わなかつたのと、体質的なものと重なつたものと思われる。症状としては凍傷という程でもなく、帰飯したらすぐ治つたとの由。

縦走隊で1人足指に凍傷(2度)を受けたがこれは完全に靴が合わなかつた為である。今年は入山時天候が悪く、その為馴れぬ新人に風邪をひくものが続出した。小屋中心だつたから良かったが、入山前体の調子の悪いものは治しておくこと。又凍傷にかかり易いものは平素より心掛け、入山の時は医者に処方してもらつた薬品を持参することが望ましい。

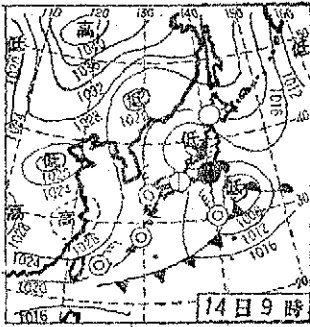
春山、冬山の医薬品リストは表の通り。この医薬品は先輩徳永篤司氏より全て丁載致しました。ここにお礼申し上げます。

分 類	薬 品 名	携 行 量 針の本 三保	使 用 法	
抗 生 物 質	キヤンサイクリン	10	1回1錠4~6時間隔 総ての発熱性化膿性 疾患に用う 高熱 肺炎 虫垂炎 外傷 歯痛	
	ブリサイJX	12		
	アイロタイシン	23		
サルファ剤	スルキシリン	20	初回4錠 1回2錠 4~6時間隔 処方は抗生物質と同じ 頭痛 歯痛 疥癬痛 関節痛 感冒 etcの微熱に使用	
	ドミナン	20		
	メトフアジン	20		
	鎮 痛 下 熱	バンピリン		15
	ザベロン	18		
	ノクラン	12		
鎮 痙 剤	レジタン	10 10	ケイレンetcの強いひきつけ 総ての腹痛(急激な)	
鎮 咳	アスベリン	10 10	感冒 センソク 気管支炎	
強 心 剤	アジスチン	50	ショック 虚脱状態 (凍傷 衰弱)	
循環増強剤	エホチール	20 30	ショックetc 循環不全 凍傷etc	
腹痛下痢	エマホルム カルバミン	30.60		
上 血 プド	アドシー	1 2	総合止血(1ビン10g) 1回1g 1日3回 咬血 外傷出血	
精 神 賦 活	メタリン	10	ビバークetcの疲労時の睡気 防止 1回1~2錠 1日1回	
末梢血管拡大	ズフアジラン	10 40	凍傷の予防 治療に用う	
	ヒデルギン	10 20		
	イミダリン	10 10		
眼 薬	ロート目薬	1 2		

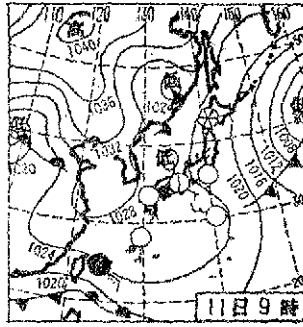
軟 膏	D S 軟 膏	2	1	凍傷 雪眼
	ヒナルボン	2	2	
	ユ ベ ラ	1	1	
	ペニシリン軟膏	1	2	
	オロナイン軟膏	5	5	
	テラジアパスタ	1	2	
		1	1	
外 用 薬	赤 ち ん	1	2	
	ア ル コ ー ル	1	2	
体 温 計	バンソコウ			
	紙 パ ン			
	脱 紙 綿			
	ホ ウ タ イ ガ ー ゼ			
注 射 器				
注 射 薬				
	ビ タ カ ン			

天氣圖 (三月十一日 - 四月六日)

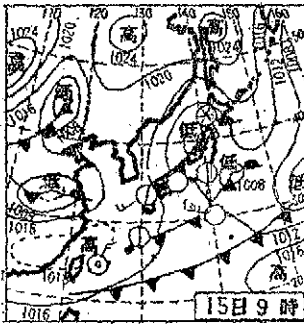
14日(風雪)



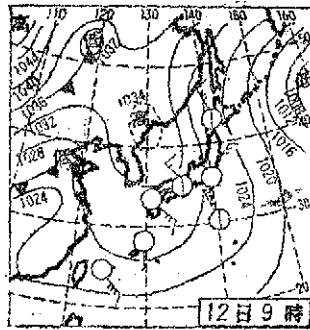
3月11日(くもり)



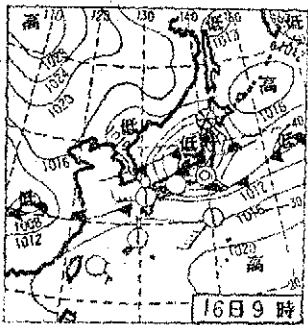
15日(小雪)



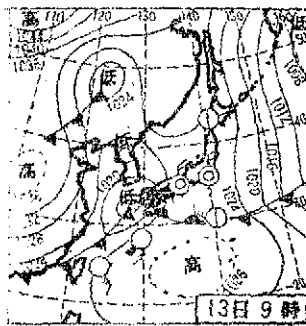
12日(くもり時々晴)



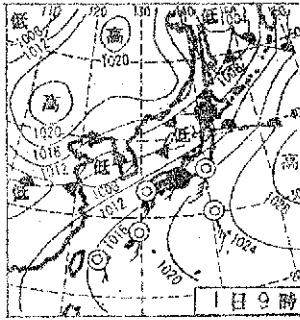
16日(風雪・春一番)



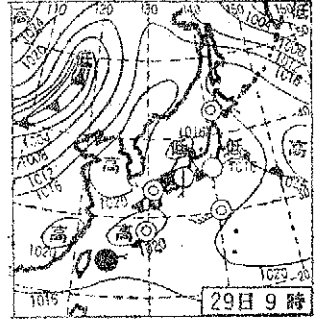
13日(くもり後雪)



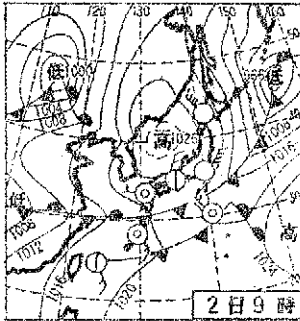
4月1日(晴後雨)



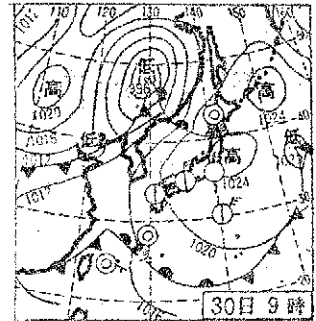
29日(晴後くもり)



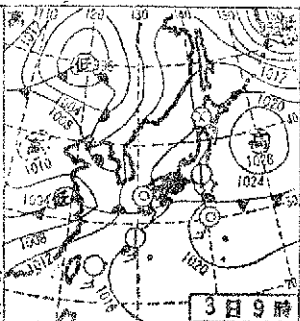
2日(晴)



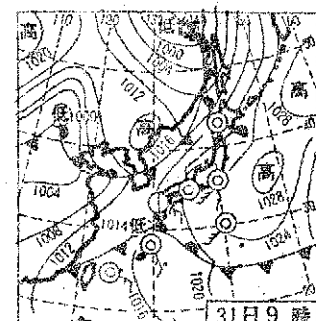
30日(無風快晴)



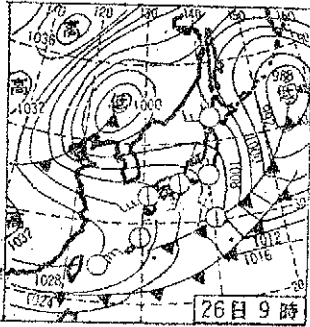
3日(晴後雨)



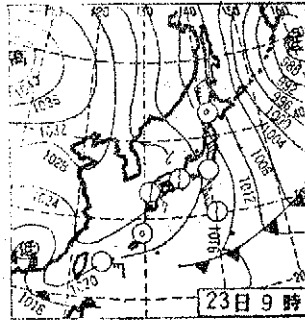
31日(快晴後晴)



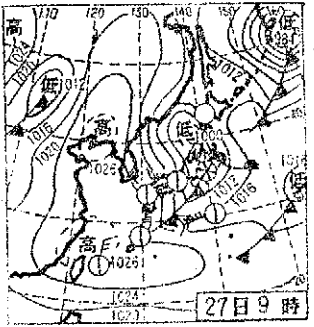
26日(快晴)



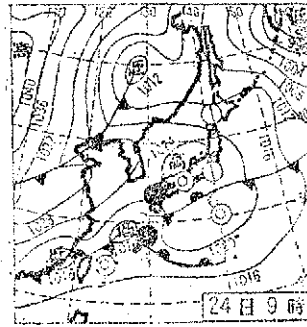
23日(晴・強風)



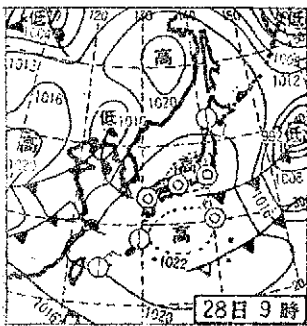
27日(雪)



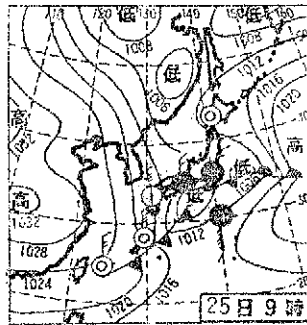
24日(快晴)



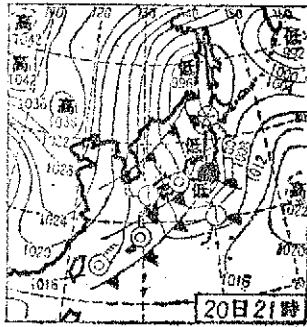
28日(くもり)



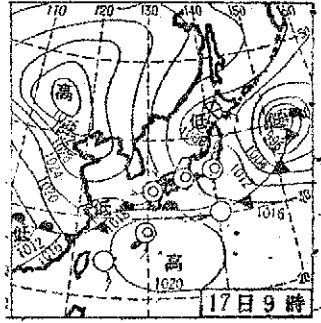
25日(雪)



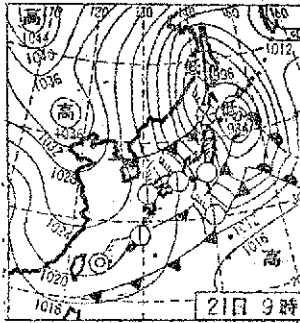
20日(風雪)



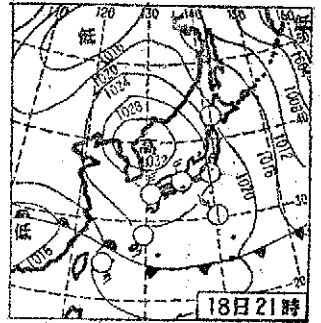
17日(風雪)



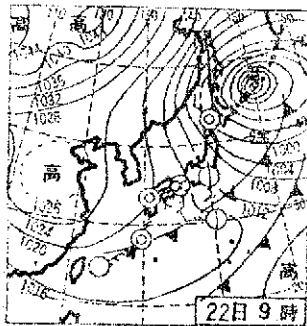
21日(風雪後一時晴)



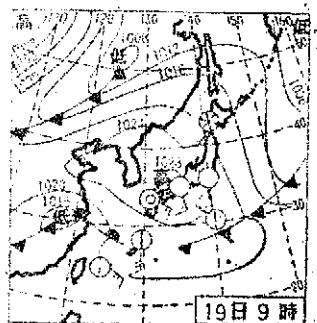
18日(風雪)



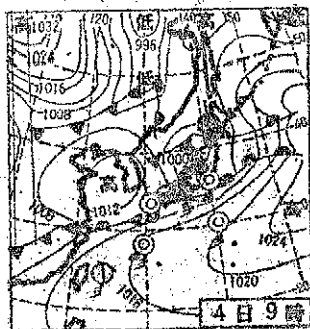
22日(地吹雪)



19日(快晴強風)



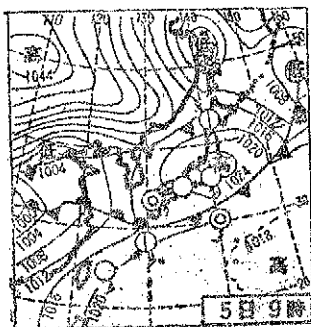
4日(暴風雨後晴)



ご覧の如く、前半23日頃迄連日天候悪く、一日中快晴という様な春らしい天気は一日としてなかつた。しかし24日以後はさすが春山らしい天候となつた。

(原記)

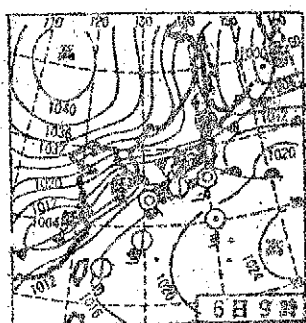
5日(快晴)



(反省)

27日間を要して一応の目的を果たし、合宿を無事に終ることができたが、反省会、報告会でとりあげられた問題点について記してみたい。第一の問題点は、縦走隊と三俣合宿とが分離したために、一部新人部員の間が生じた。それら2パーティー間の疎外感であつた。即ち彼等の主張するのは、この2つのパーティーは完全に分離したものであり、各々単独とみなすべきで、このように同じ合宿として組み入れた場合の、縦走隊と自分達との特に食糧面での待遇の違いは納得できないというものであつた。我々はこのような考えを全く予想してはず、かつ新人訓練にかなりの比重をおき、部員同志の人間関係をより密接にしたいと思つただけに、最初驚くとともに、かつ落胆し、憤りさえ感じた。しかし彼等の意見を冷静に聞いているうちに、今度の合宿に対しての我々リーダーグルー

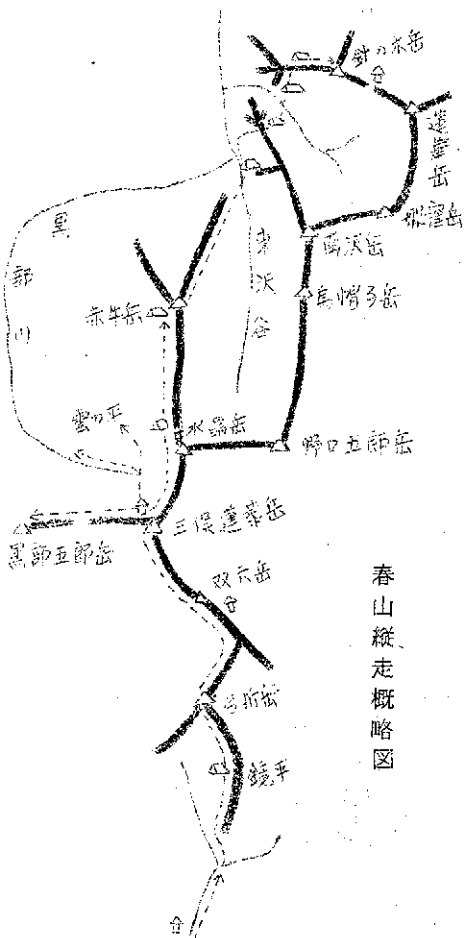
6日(くもり)



プの行方説明が非常に不明確であつた
 ためにこのような考えが出てきたこと
 がわかり、我々が前に述べたような考
 えでもつてこの合宿を計画したことを
 説明すると、非常によく納得してくれ、
 上級部員と下級部員間のしこりも取
 る除かれて、却つて良い方向に進むこ
 とができたのは喜ばしいことであつた。
 その他の問題点としては、先ず西稜ア
 タックの際の2年部員の往路と復路で
 同じところで2回スリップしたことが
 取りあげられた。幸い事故には至らな
 かつたが、これを単なる不注意として
 取り扱つてよいものかどうか、或いは
 単なる不注意としても、それがどこか
 に根をもつた不注意であるのかどうか
 過去の例が教えているようにこのよう
 な些細な事でも重大な結果を引き起
 す可能性があることからして、結論は
 出ずに終つたが、結論を出すのがい
 ずれの場合にも目的ではなく、このよ
 うな結論の出にくい対象に関しては、
 それを議論する過程に於てその対象を充
 分に意識することが大事であると思
 うのであるが、真剣に議論がなされた。
 また最後の撤収の際双六小屋に残つた
 数人が、リーダーとサブリーダーとも
 に残つたのであるが、十分に時間的余
 裕があつたにも拘らず、雪が縮まるの
 を待つて、(後で考えれば決して雪が

縮まる状態ではなかつたにも拘らず、)
 夕方から下りだし深夜ワサビ平に着い
 たことは、計画が殆んど終つたために
 生じた気の弛みが重大な誤ちに往々に
 して結びつく可能性があることを考え
 れば、十分に反省されねばならない点
 であつた。

(牧野記)



春山縦走概略図

自由山行報告 (1963年5月~1964年3月)

◁五月山行▷

- 裏銀座~槍ヶ岳パーティー
〔メンバー〕高田(山)・桑原・原・畑中
・石浜

〔期 間〕4月27日~5月5日

〔コ ー ス〕大町一濁小屋一野口五郎
岳一三俣蓮華岳一槍ヶ岳一蒲田

- 早月尾根一内蔵の助平一黒部往復
〔メンバー〕梶本(山)・吉川・大笹

〔期 間〕4月27日~5月4日

〔コ ー ス〕早月尾根一長次郎谷一
ハシゴ谷乗越一内蔵の助平一丸山一
中央山稜一富士の折立一内蔵の助の
カール一内蔵の助平一黒四ダム一
御前谷一弥陀ヶ原

- 大峰登山一新人歓迎
〔メンバー〕岡久(山)・大島(OB)・
大野・渡部・細川

〔期 間〕5月1日~4日

〔コ ー ス〕下市口一川追川一弥山一
八剣山往復一狼平一多門の滝往復一
坪内

◁夏山自由山行▷

- 日高山行
〔メンバー〕豊坂(山)・原・栗原・加藤

〔期 間〕8月19日~29日

〔コ ー ス〕札内川一コイカクシユ札
内川一コイカクシユ札内岳一ヤオロ
マツ岳一ルベツネ山一ベテガリ岳
一中の川

- 大峰・舟の川地獄谷行
〔メンバー〕高田(山)・桑原・大笹・
畑中

〔期 間〕9月3日~6日

〔コ ー ス〕川瀬峠一舟の川一地獄谷
一弥山一坪内

◁10月山行▷

- 穂高岩登山山行
〔メンバー〕梶本(山)・大笹

〔期 間〕10月6日~10日

〔コ ー ス〕奥又白・北壁よりAフェ
ース。滝谷第4尾根。滝谷・クラッ
ク尾根・第2尾根

- 聖・赤石山行
〔メンバー〕大島(山)・糸井・細川・
黒田

〔期 間〕10月9日~14日

〔コ ー ス〕転付峠一樺島一聖平一
聖岳一赤石岳往復一大沢岳一大沢渡

○ 甲斐駒行(冬山偵察)
〔メンバー〕 桑原(山)・石浜・平岡・
渡部・泉田・辻・出雲路
〔期 間〕 10月11日～17日

〔コース〕 杉島一風巻峠一野呂川乗
越一北沢小屋一甲斐駒岳一北沢峠一
戸台

早月尾根より内蔵ノ助平を経て黒部往復

(5月山行)

〔メンバー〕 梶本、吉川、大笹

4月27日 大阪発
28日 上市より大熊谷出合まで
京都府立大のチャーターしたトラック
に便乗させて頂く。

8:30 出発。残雪のあるトラク
ク道を馬場島までゆつくり歩く。他に
小型トラック2台分位の登山者があつ
た。

10:00～11:30 馬場島の
早月尾根末端附近にて、用足し、馬場
島荘の附近は一面に雪があつた。のど
かな陽射しを浴びて、少し早いがメン
とする。

11:30 早月尾根の末端にとり
つく。松尾平では、くるぶし位までも
ぐる雪であつた。早月尾根を登るパー
ティーは我々以外には二人パーティー
があるのみ。踏み跡は雪上にはつきり
と残っているが、先ずは静かな山行が
楽しめそうである。

19:00 1900m避難小屋着
もう1ピッチ歩いて小屋がなければ
テントを張ろうと言つていたら小屋が
あつた。セメント造りの穴蔵のような
小屋でそのうえ雪が吹きこんで中はビ
シヨビシヨであつた。ほとんど屋根ま
で雪にうずもれているので中は真暗。
エントツのようなところから中へ入る。
どうもあまり心地よい小屋ではなかつ
た。それでもテントを張るよりはと思
い泊ることにする。

29日 晴。2時頃よりガス。

3:30 起床

5:30 出発

小屋のところから上を見ると、屋根
が覆いかぶさるように落ちてきている。
些かフアイトが薄く。

9:00 2600mピーク

ここまでは尾根もひろく、傾斜もさ
ほどではない。少し休憩してまわりの

景色を楽しむことにする。天気は良いし風はなし、実に快的である。ここから上はこれまでと少し様子が異なる。ザックを持つていても全く不安はないが、時にはステップを切ることもある。ふり仰ぐと、雪と澄み切つた空と時折去来するうすいガスとが印象的である。シン頭の下りで一ヶ所ザイルを使つたほかは殆んど問題なく通過することが出来た。頂上に近づくにつれて去来するガスが多くなつてきた。

14:15~15:00 劔岳頂上。

16:30 長次郎のコル

バケツのようなステップがあつたが、ザイルを使つてコルへ下る。

18:00 長次郎谷の出合

コルより長次郎谷を走るようにして下る。コルの直下以外は雪が割合しまつていた。ヒザまでもぐるところはなかつた。今年は雪が少いようだ。

18:30 劔沢の一峰東面の三ノ沢の出合の対岸にある低い台地にテントを張る。

30日 午前中雨、正午頃より曇時々晴、昼過ぎから日が照りはじめる。実にこのテントは暑い。

12:30 テント地発。

劔沢の流れが出ている。降りてその水をのむ。

13:00 ハシゴ谷出合

14:00 ハシゴ谷乗越

陽射しは実にきつい。春山以上に焼ける。ハシゴ谷はあつところだつた。ハシゴ谷乗越に出る。『新人のときの夏山合宿のとき、ここから内蔵ノ助平を初めて見た。そのときどうも人が住んでいそうな気がして仕方なかつた。桃源境を上から見たら多分こんな具合であろうと思つた。しかし今は雪に閉ざされて静かに眠つているように見える』

14:45 乗越発

15:00 内蔵ノ助平のほほ中央にテントを張る。

5月1日 雨、夕方より雪、夜晴
停滞、このテントは完全防水だそうだが、ナイロンのレインコートのように内側に水滴がつく。

5月2日 晴のち曇

1:20 起床

3:00 テント地発

今日はヘッドランプをつけてサブで出発である。

3:50 丸山のコル。

コルに着いたときまだ薄明りであつた。

5:00 2281mピーク

ここからコンテナユアスで歩くことにする。ここで夜が明けた。

6:00 出発

ここから中央山稜の上方のコルまでは問題はない。そこから2700mまでは稜線上に雪が多いが、雪壁状になつたりナイフリッジになつているところが多く、ほとんどスタカットで登る。頂上真下は岩が多くなっている。右手にルンゼが頂上に突き上げている。これを登ることもできるだろうが、我々は中央山稜から離れなかつた。

15:00 富士の折立。

帰りは稜線を通つて内蔵ノ助のカールを通る。また濃いガスが出て来た。視界が全くきかないときカールの急斜面を下るのはあまり良い気持ではない。ゴルジュを通つて内蔵ノ助平のテント地に帰る。今日は高橋OBが来て居られた。

16:10 テント地着

5月3日 快晴

5:45 テント地発

今日は御前谷へ行くことになつた。高橋OBは勤務の都合でもう帰られる。

6:45 内蔵ノ助谷出合

8:00 黒四ダムの下。

下から見上げるとダムは実に大きい。ダムの上の人間が豆粒程に見える。

9:00 御前谷滝上

御前谷は出合から滝のところまで廊下になつている。滝は左岸を登る。

9:40 滝上発

滝を過ぎると谷は明るく広くなる。しかしすぐに第二の滝(五万分一地図上の上流にある滝)のところでもまた狭まる。

10:10 第二の滝右岸取付

滝の右岸の細い雪溪の中間位から岩にとりつく。40mザイルで約3ピンチではあるが案外時間を要した。特に2ピンチ目の非常にもちい斜面のトラバースには汗をかいた。

13:00 滝上部

14:30 中央山稜のコル。

(上部のコル)

15:20 テント地

5月4日

4:40 テント発

今日はサルヌのカールを登り雄山より弥陀ヶ原へ出ることにする。考えて見ると劔のピークを出てから今日雄山の頂上へ行くまで、高橋氏以外の登山者には会っていないのである。人が多いと言われている北アルプスにもこんなところがあつたのである。

6:00 中央山コル

6:30 御前谷

10:00 御前谷乗越

11:10 雄山

14:20 弘法小屋

スキーヤーのウジャウジャしている
ところを黙々と靴で歩いた。弘法小屋
までバスが来ていた。

(吉川記)

小黒部谷溯行 (7月31日～8月6日)

(メンバー) 吉川(田)・中村・栗原

7月31日 天狗山荘一雷鳥沢

8月1日 雷鳥沢一剣山荘テント
地。剣往復。

8月2日 テント地—二俣—池の
平。

8月3日

さあいよいよ本番だぞと思うと自然に心が緊張する。オレ達はこの日が来ることを一カ月前から準備して待っていたのだ。京大、東京農大の部報、冠氏の黒部紀行等を読み大体を大づかみに調べ上げていたのだ。

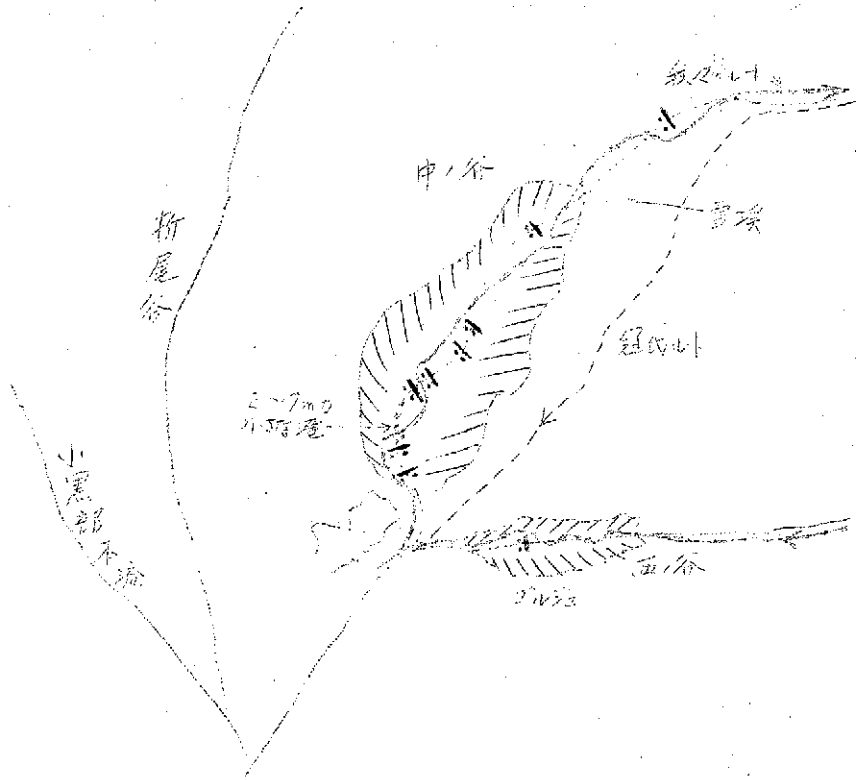
昨日懸意になった東京の女性にさようならもいわないで澄み切った朝の中に谷を下つていった。池ノ平小屋から雪溪までの下りが大変急でいやらしい草付きが続く、高度にして150m程下つたところで雪溪にとりつく。想像以上に雪量が多い。大窓の出合いから少し下つたところで雪溪が切れて滝が現れている。これは京大の報告によると40mの大滝と記されているものと思

われるがどうみても40mはない。

せいぜい25mというところであろうか。ゴルジュ状になつていて兩岸は岩の壁でへつれそうにもないので右を少しまいて何なくすぎる。

アイゼンのつめが草付に大変きいて快適だつた。白ハゲ沢出合付近で一度雪溪が切れてその後ブツブツに切れた雪溪が下流に続いている。赤ハゲ沢を少し下つたところに又滝が現れる。

この滝の下流の両岩壁にスノウブリッジがかかっているのであそこまでたどりつけば何とかなると期待して高まきを始めると目の前でポエンという音と共にスノウブリッジが豪然とくずれ落ちた。そのため大高まきをして河原に下つた。この附近でテント場の跡らしきものを発見する。これは一昨年の失敗した京大のテント地の跡と断定した。さらに下流で又雪溪に出合い雪溪の切れ目で渡渉することができず又高まきする。このとき懸乱して河原に下る。高まき中、カモシカが二頭目の前を横



切り飛跳ねて草奔の中へ消えた。後一路河原の中を下流に向う。この間渡渉すること数回、この水は以外に暖い。この日は折尾谷の出会いでドン、期待していた岩魚の姿が全然見えないうし又、針を入れてみるが全然反応がないので失望する。夜はせせらぎの音が耳についてなかなか寝つかれない。月に照らされた小黒部の溪流がまるで全の糸を流すように光つて流れている。京大が三年目でやつと遡行に成功したところをオレ達は一回が成し遂げたのだとい

うある誇りが我々の心を満足感で一杯にした。

- 6.00 池の平発
- 6.30 雪渓取付
- 7.10 大窓の雪渓出合い
- 8.00 白ハゲ沢出合
- 8.10 赤ハゲ沢出合
- 8.25 ガレ通過
- 10.00 滝、廊下通過
- 10.00~10.30 Essen
- P.M 1:00 大スケ
- P.M 2:15 折尾谷出合い

8月4日

カラリと晴れた青空の中を中ノ谷を上流に向う。大変な水量だ。昨日通つて来た小黒部本流よりも多いぐらいだ。途中渡渉数回、西の谷との出合いに到着。ここで三日分の食料と岩のぼり道具のみを持つて残りの食料等を残して中の谷へ向う。西の谷と中の谷との水量を比べると1:3ぐらいの割で中の谷の方がはるかに多い。

ここはもつばら冠氏の報告をたよりに登つていくが、冠氏の報告も全くあてにならぬ事がだんだんに分つて来た。昨年の京大パーティは中の谷の遡行は断念しているの、何ら報告はない。又冠氏も大変大きく高まきしているの、当然正確なものとはつかみ得なかつたものと思ふ。ちなみに我々の通つた路と冠氏等の通つた路を並記しておく。入口より巨岩をすぎて100m程行くと第1の滝に出合う。高さは大体20m前後と思われる、これは何なく右岩をへつる。岩はボロボロのところもあるが十分なホールドがあり難く通過第2の滝も同程度の大きさでこれも右岸をまく、第3の滝は渡渉して左岸をまく。ここで左岸はゆきづまり、滝の落ち口を渡渉して右岸によ登り、第4第5の滝は左岸をへつる。これらの滝の大きさは大体15m程、第6の滝は

20m級のものでこれも右岸をまく。この後渡渉をくり返して左岸にてて行きづまる。左側には崩れかけたスノウブリッジがかかり、前方には20mクラスの大水がどろどろと音をたてその上に巨大なスノウブリッジがかかりさらに上流に向つて雪溪が続いていた。ここで残るは下流にひき返して大きく高まきするか、それとも右側の岩壁をよ登つてまくかの二つである。考えた末後者のルートがとられたが、この滝をまくためにおよそ2時間程要した。あとは雪溪が続いて次の第8の滝のところまで楽にゆけた。第8の滝では15m程の滝が雪溪の下でとどろいていた。その上部でデッカイクレバスがあんぐりと口をあけていた。これも岩壁をよじのぼつて少し高まきし何なく雪溪の上におりた。その上流には長い長い雪溪がたんととして続いていた。ついにやつた。完全遡行に近い形でこの大ゴルジュを乗り切つたのだ。喜びがこみ上げて来た。多分夏期このように完全遡行に近い形で中の谷を乗り切つたのは我々が一番最初ではないかと思ふ。

明日は猫又山に向うつもりで中の谷の雪溪の左俣に登り始めたがガスと雨に攻められて出合いに引返してビバーク。

7:00 テント地発
 9:30 西ノ谷出合
 10:30 中ノ谷へ出発
 11:30 第7の滝の前
 1:30 7の滝、高まき終了
 2:40 第8の滝の高まき終了
 3:30 雪溪出合
 4:30 引返し点
 5:00 ビバーク

8月5日

天気がかずれそうに見えたので猫又を断念して毛勝山に向う。1時間ばかり雪溪を利用した後ガレ沢にとりつき稜線にて頂上に立つ。かねてより、黒ゆりの花が咲いているという話を聞いていたのでそこら一面をさがしたが見当らなかつた。毛勝谷に充分の雪溪が残っている事を確認して稜線ぞいに北へ向い。サンナビキ山との間の毛勝山に近い、第二番目に低いコルから西谷に下つた。

A.M 6:45 出発
 7:45 ガレ沢入り
 9:15 稜線
 10:30 毛勝頂上
 11:20 頂上発
 12:30 西谷の二俣
 1:35 出合(B.C)

8月6日

昨日下つた同じコースを通り毛勝頂上に出て毛勝谷の雪溪を下る。このルートはかなりよく利用されているとみえて踏跡があり、ケルンもつんであつたので乗々と下る。

思つたより雪溪の量が多くてずいぶん時間を短縮できた。この谷では全然渡渉しなくてもすんだことは気持ちのいいことであつた。下流では新しい発電所が建設されつつあつた。

5:40 出発 6:05 ゴルジュ通過 7:10 二俣 8:15 ガラ谷(側谷)入り 9:20 稜線 12:00 毛勝
 12:20 出発 1:30 雪溪ととりつき
 2:25 大明神沢出合
 4:30 東又谷出合

最後に我々の計画が全てうまくいったのは第一に天気的好かつた事が挙げられる。何十日間雨らしい雨も降らず谷は完全に減水していた。どの渡渉でも腰以上水につかる事はなかつた。行動中に雨の降らなかつた事も一番の幸いだろう。

次に雪溪が充分残つていた事。等又できるだけ軽装とし、メンバーも2年と3年部員であつた事も一要因であらう。

(中村記)

XX

日 高 山 行

コイカクシユ札内一ベテガリ岳一中ノ川縦走

原 治左エ門

我部としては多分最初の日高行きであつたろう。北大は勿論京大等も随分入っているが、あそこはどうだこうだと言つても実際行つて見て自分の目で確めなければその面白さは分らない。空想家はどうか知らないが。最初の計画では中ノ川をつめベテガリ西尾根を下りることになつていた。しかし釧路で北大OBの中野氏に会つて色々お聞きした結果、中ノ川を上りよりは下りに使つた方が楽だし、それ以上に日高をもつと広く知る必要があるので、標題のようなコースをとることに相成つた訳である。

〔期 間〕 1963年8月19日～
29日

〔人 員〕 豊坂(口)・原・栗原・加藤
〔行動記録〕

8月14日 夕刻大阪港発

8月17日 朝夕釧路着

8月18日 阿寒湖めぐり。夜中野征紀氏を訪ね、日高のことヒマラヤのことなど色々とお聞きし、写真や本も見せて頂く。面白く又有益であつた。

8月19日 くもり

釧路一帯広一中札内一上札内一
札内川二股(16・25)一コイ
カクシユ札内川テント地
(17・45)

上札内から二股まで自動車をチャーター。コイカクシユ札内川は大体のんびりした広い河原で、道標が赤色×印でついている。時々すね下ぐらいまでじやぶじやぶ進む。

8月20日 くもり時々雨

テント地(7・50)一コイカク
シユ札内岳への尾根取付点
(8・30)

登り口が見つからぬので3時頃までその偵察を兼ね右手の沢、左手の沢を空身で行く。7・8mの滝にはすぐぶつか。家外面白そうだが所詮無理というものだ。やまめ3尾の収穫。結局登路が分らず、あすは左手即ち短い方の尾根を登ることにする。今日見てきた所では岳樺等の喬木と草のまじつた尾根で、キスリングにビッケルでは歩きづらそうだがまあ行けるだろう。

傾斜は相当ある。

8月21日 雨とガス

テント地(7・00)→1000

mブツシュ尾根(7・40)→

途中のテント地(16・10)

1・2ピッチ目は木と草で案外登り易く、この調子なら割合早くピークに出られると思つたが、3ピッチ目からは登れども登れども熊笹のブツシュ。2m以上もある。雨の為足元が滑りやすく、ビッケルが木や笹にひつかり全く頭にくる。おまけに例のブトだ。これには全く閉口した。ちよつと静止するとワイワイ寄り集まつてくる。俺も下界でこんなにもてたいものだ。とこれは冗談で、全く憎らしいつたらありやあしないが何分防備なき人間は弱いもの、せいぜい数匹たたき落すのが関の山、しんどいがおちおち休んでも居られない。昨日かまれた俺の左手がまん丸くふくれ上つている。加藤じいさんの顔も。先が思いやられる。兎に角機械体操の連続で、ガスと雨で遠望もきかず、時間も遅くなつたので、あと250m程を余す所に設営。全く狭いが曲がりなりにもテントが張れる所がよくあつたものだ。水は7ℓ下から上げたのでまず大丈夫だろう。全身ずぶ濡れ。テント地からガスの時間に見える手前の稜線はきれいで、特にピ

ラトミ山はきれいな三角形ですばらしい。

8月22日 くもり

テント地(10・00)→コイカ

クシュ札内岳(14・00)

又もやすごい機械体操の連続、稜線まで全く同じ調子だ。稜線より50m下あたりからはい松が現れだした。豊坂の「出た」の声に全員ホツとする。上は全くきれいな稜線ではい松の中に踏跡がついている。自分達の選んだ尾根とはいいながら全くしんどい限りであつた。ピークの近くに設営。我々が登る予定をしていた尾根に、きれいな踏跡がついているのを見た時には少々気を悪くした。手前にヤオロマップ、1839m峰がガスの時間に望まれる。水はテント地から南側30分程下つた所からとつてくる。

8月23日 雨、風強し

沈。前線の通過。一食抜き。

8月24日 くもり、ガス

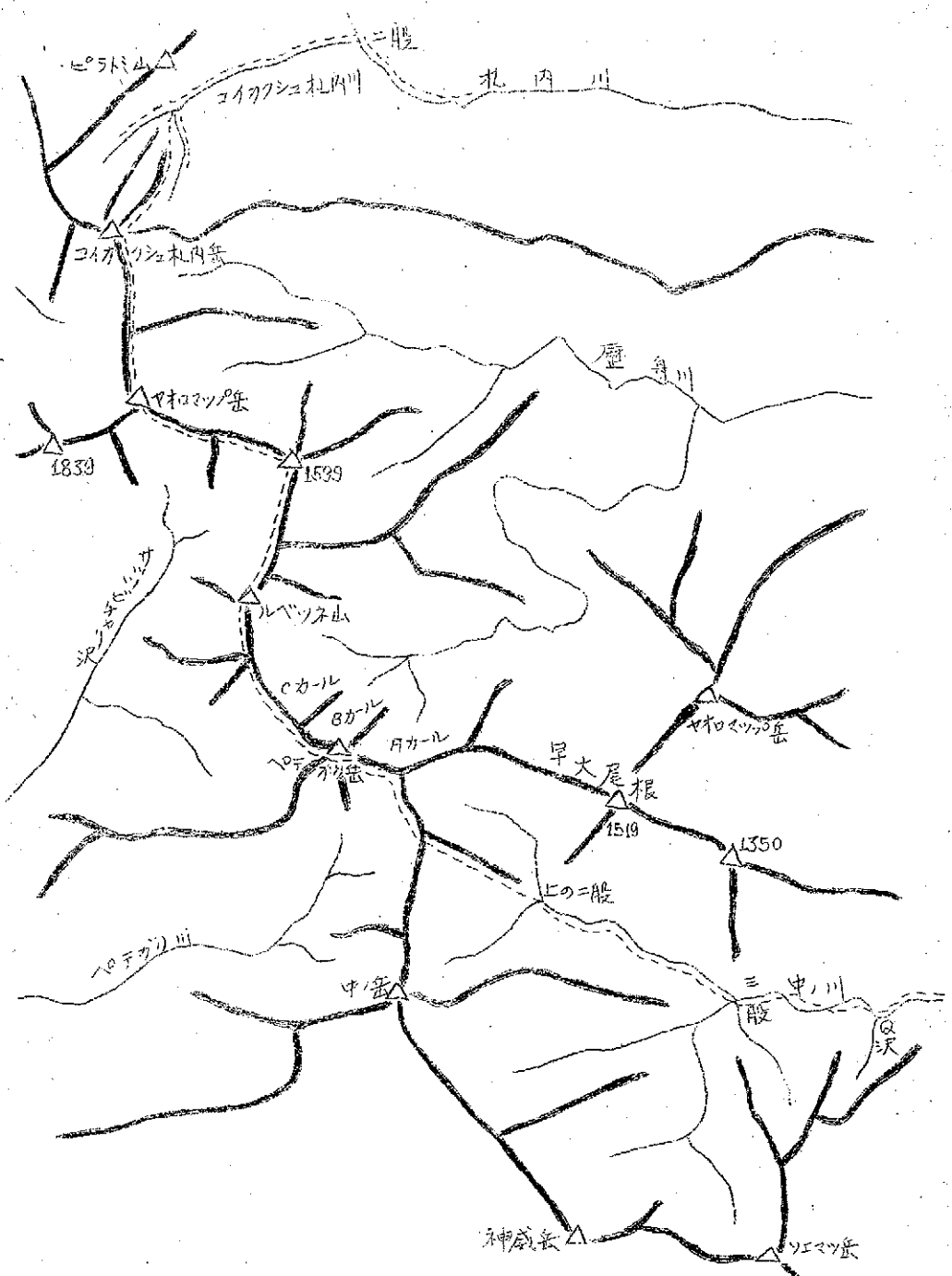
コイカクシュ札内岳(6・15)→

ヤオロマップ岳(9・15)

(10・00)→1599m峰

(14・30)ールベツネ山への最低鞍部(15・30)

リッジ通しに踏跡あり。1839の往復は断念して(実をいうとしんどかつた)ガスの切間に拝むこととする。



テント地から歴舟川の方へ20分程機
械体操をしながら下りると水がある。
地図の通りこの稜線は全くのナイフリ
ツジで特に東面はきつい。春冬の雪庇
はさぞすごかろう。途中ガスの隙間に
カムイエクウチカウシ、エサオマント
ツタベツ、札内、幌尻等の山々が望ま
れ、ルベツネ、ペテガリ岳も一瞬初め
てその姿を現わした。

8月25日 くもり後雨、ガス

最低鞍部(7・30)ールベツネ
山(9・35)(10・10)ー
ペテガリカール(11・20)

楽な行程。ルベツネにて、ペテガリ
川をつめペテガリ岳へ出たという大阪
市大のおつさん2人に出会う。中ノ川
を下る予定が、ペテガリ川の高巻きの
連続でいやになり、俺達の来たルート
を帰るという。一人は虫に顔をやられ
すごい。こちらも豊坂じいさんがや
はり虫にやられお岩みたいな顔だし、
栗原はズボンをブツシュにやられスネ
から下は布地が全くなくパッチの上に
スカートをはいている感じ。カール
はきれいだ。少し下ではきれいな水が
沢山湧き出している。これで虫さへお
らねば最高なのだ。

8月26日 くもり一時にわか雨後
晴

カール(7・00)ーペテガリ
岳(8・50)(9・20)ー
早大尾根との分岐点(10・50)
(11・15)ー下降尾根の頭
(12・00)ー中ノ川上二股
(17・20)

今日も相変わらずガスが濃い。ペテガ
リは通過して下から見るとやはり立派
な山だ。中ノ岳、ソエマツ岳が姿を現
わす。早大尾根、ペテガリ西尾根それ
にカールも大きく立派。

8月27日 くもり後晴、夕立

上二股(9・10)ー三股
(12・00)ーQ沢出合より1
ピッチ下流(16・00)

こんな川は下るに限る。函は高巻き
へつり、へそ辺りまでの渡渉、あげく
の果ては水泳とどんどん通過。全く楽
しいが意外に時間を食った。夕方Q沢
出合下の広い河原で大きなたき火をし
て濡れた衣服を乾かす。流木がごろご
ろしている。エッセン最中に一粒一粒
がはつきり身にこたえるすごく太い雨
が落ちてきて、ものの一分とたたぬう
ちに再び全身ずぶ濡れ。それでも火は
消えなかつた。

8月28日 くもり後霧雨

テント地(8・15)ー幸栄部落
(5・30)

エアーマットで又水泳。函は陽が照つて暖かければこれに限るのだが何分霧雨が降っているもので。F沢を2ピッチ下つた所で昼食をとりたき火をしていると魚取りの3人のおじさんに出会い、道を聞き幸榮に至る。大樹林業の飯場で寝食のお世話になる。俺達には後ビーフンを1袋残しているだけだった。先程のおじさんが大きなマス、ヤマメを沢山とつてくる。この魚に焼酎はすごくいける。

8月29日 くもり

幸榮—尾田村—帯広

なお、中ノ川は入山前函の巻き方等を相当調べて行つたが、最近は相当入つておるらしく大体踏跡があり、さして問題にすることもなさそうだ。最も水量がいつもより少なかつただろうとは思うが。しんどいが結構楽しい山行であつた。ブツユエがかくれ、虫もいなくなる春山位に、もう一度来てやろうと思いつつ下山した次第である。

大峯・舟の川地獄谷

3泊4日 1,000円の山行

夏休みも終末に近い9月初め、夏山シーズン終了にはまだ物足りないが、さりとして先立つものも例によつて乏しいという連中が集まつて相談した結果が、この舟の川地獄谷行となつた。かねてから大峯の谷の美しさについては、よく聞かされもし、一度は行きたいとも思つていたが、実際に行つてみて、予想以上の素晴らしさに十分な満足感が得られ、大峯を再認識した次第だ。

技術的にも、容易なものから、舟の川のように困難なものまで種々雑多、力に応じた目標を選ぶなら楽しみはつきないであろう。

因みに日数は3・4日、費用も1,000円くらいと至極簡便であり、ビバークをするつもりならサブザックひとつで軽快にでかけられるというように短時日の山行には打つてつけだ。

この私達の計画をきつかけに、沢山の諸君が大峯の谷を訪ずれ、その良さを知つてくれる事を期待するとともに、特に岩登り病患者の諸君には一服の清涼剤としてお推めしたい。

〔期 間〕 9月3日～6日

〔メンバー〕 (1)高田、桑原、大笹、畑

中

〔行動概要〕

<9月3日>曇のち雨

近鉄吉野線下市口よりバスにて天川和田へ。川瀬峠を越えて舟の川に入る。前半は暑さ、後半は雨とあつて少々湿つぽい気分の初日であつたが、湯の又では快適な飯場に泊めてもらえたので気嫌を直す。夜になつても雨は降り止まず。

<9月4日> 晴

いよいよ地獄谷に入る。水量こそ少ないが兩岸の迫つた悪い谷で、水苔のついた岩に難渋する。「アメ止まりの淵」「桶側」など廊下、滝が次々に現われ徒渉、へつり、高まき、滝登りとふんだんに楽しませてくれる。中でも「桶側」は一風変わったすばらしい奇観で、30mほどの滝が勢よく落ちてゐる右には、鉄道のトンネルほどもある巨大な洞穴が口を開けており、あたりの薄暗さと相まつて無気味な感じさえする。この日は距離にして大体半分くらいの所でビバーク。

<9月5日> 晴のち雨

ビバーク地よりすぐに廊下が始まつ

ているが、水量が少ないので渡渉を交えながら飛石伝いに突破。次の出合でカモシカのものと思われる白骨死体を発見。しかし、残念なるかな角はすでに無し。出合より向つて右が本流と思われるが、相当険悪そうで時間もあまりないので、左の谷にルートをとる事にする。

この谷は小さな滝が連続していて面倒だが、高度はぐんぐんと上り、本流が次第に低く細くなつてゆく。やがてガレ場になつてきたので右岸の尾根にとつづく。尾根上はブッシュ帯の苦闘を予想していたが、あにはからんや喬木ばかりで細かいブッシュはほとんど無かつた。縦横に走るけものみちに驚きながら2時間ほどで奥駆道にてたが、又、雨がやつてきた。かくしてその夜は、弥山と八経ヶ岳のコルで、形ばかりで用をなさないツェルトをかぶり無残なる一夜をすごした。

<9月6日> 雨のち曇

早朝はまだ雨模様であつたが、地獄谷とは打つて変つた和やかな様相の弥山川上流に沿つてのんびりと下る内に、空も明るさを取りもどし、狼平に着いた頃にはすっかり雨も上つていた。坪の内への下山道は小川と化し、相変わらず滑りやすいいやな道であつた。夕刻、大阪着。

(高田邦雄記)

163年度の活動

3月20日	夏山合宿地立山周辺記録説明 (横尾)
五月山行の行先とメンバー決定	
3月25日	6月13日
五月山行メンバーの最終的決定	気象について(秋濃)
4月28日～5月上旬	6月20日
五月山行	救急処置について(豊坂、笠松医 師)
5月9日	監督の交代(広瀬→笠松)
五月山行説明会	
5月16日	6月27日
P29に関する懇談会の件の報告 (横尾)	夏山の天気(秋濃)
夏山合宿の件(立山東面の地形説 明)	7月4日 夏山合宿計画 縦走パーティー決定
5月18・19日	7月11日
新人歓迎キャンプ 於百丈岩	夏山合宿打合せ
5月23日	7月15日
岩登りについて(高田)	立山周辺の説明(牧野)
1. 岩登りの歴史	7月18日
2. 技術	合宿の説明
3. 道具の説明	7月21日～8月上旬
5月26日	夏山合宿
関学連総会(2:00P.m)	夏休み中、自由山行
5月30日	1. 日高
地図のよみ方(吉川)	2. 舟の川
6月6日	3. 比良山
部員名簿配布(総勢30余名)	9月12日
	夏山合宿報告会

9月19日

夏休み自由山行報告

10月山行計画

10月試験休み 自由山行

10月17日

自由山行報告

10月28日

秋山合宿計画

ポツカ後の縦走計画決定

11月初め 秋山合宿

11月14日

秋山合宿報告、春山使用ルート予定。

11月21日

確保の仕方(高田)

11月28日

冬山気象解説Ⅱ(大笹)

ヒマラヤの報告(篠田部長)

12月5日

冬山合宿計画

P29偵察隊報告(木村隊長)

12月19日 雪質について

12月下旬～1月上旬

冬山合宿

1964年

1月16日

冬山合宿反省報告会

1月23日

リーダー交代(横尾→牧野)

春山合宿計画(針ノ木西綾)

各係決定

1月30日

春山合宿について

監督交代(広瀬貞雄)

2月6日

雪上露營について(中村)

2月27日

五月山行計画

3月2日

春山の気象セミナー(畑中、栗原)

3月5日

3月8日～4月初め春山合宿

4月16日

春山合宿報告、新人紹介

尚、毎日曜日に岩登り、競歩のト

レーニングあり

1963年度 会計報告

自1963年4月1日

至1964年3月31日

I 収入の部

前期繰越	12,814.-
部費・入部費	3,1500.-
体育会援助金	23,000.-
ダンスパーティー収益	55,269.-
雑収入	1,500.-
計	124,083.-

II 支出の部

装備・備品費	44,346.-
事務用品費	4,584.-
通信・交通費	7,654.-
諸会費	1,500.-
雑支出	11,210.-
次期繰越	54,789.-
計	124,083.-

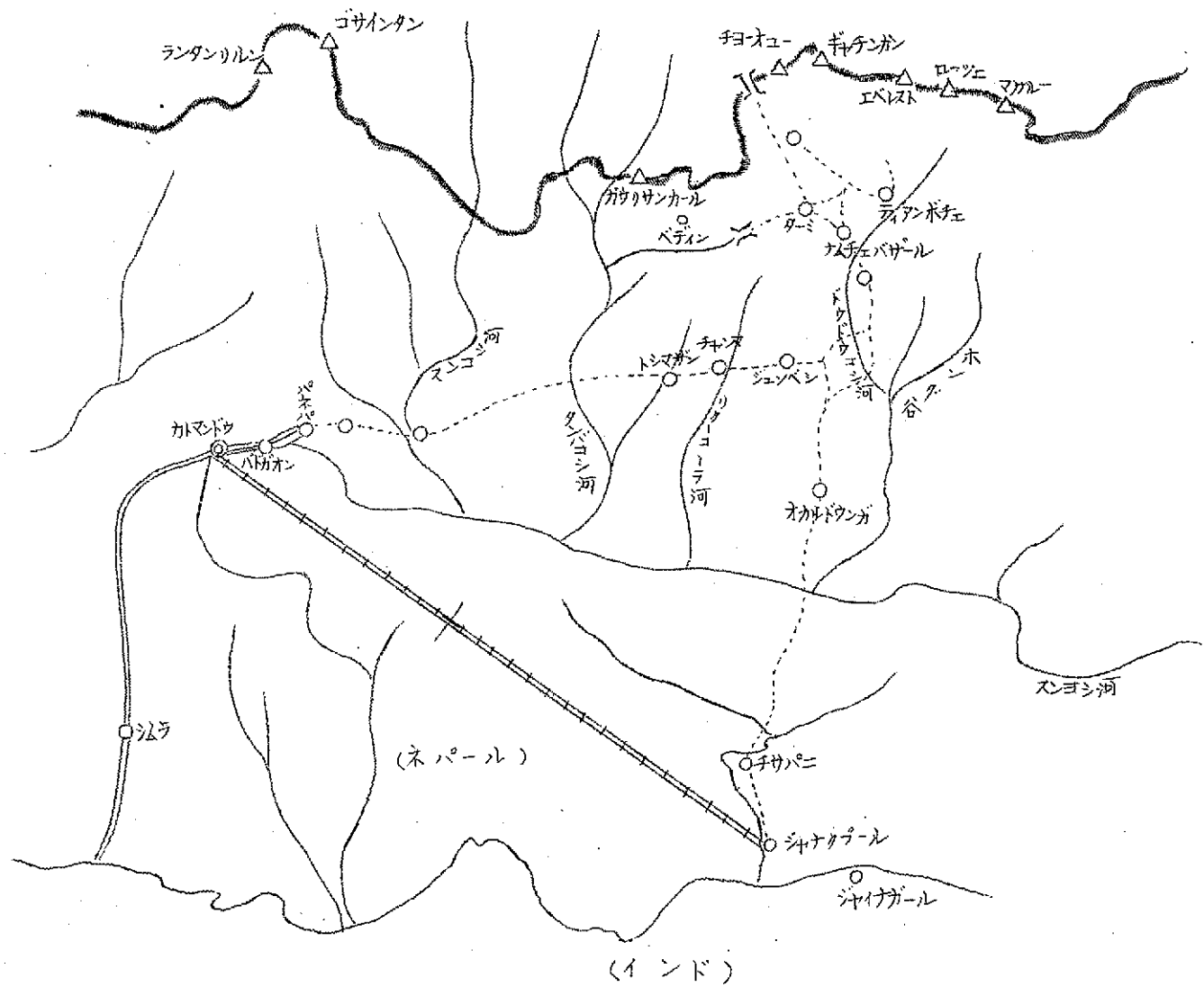
以上の通り御報告致します

1963年度責任者 高田 邦雄

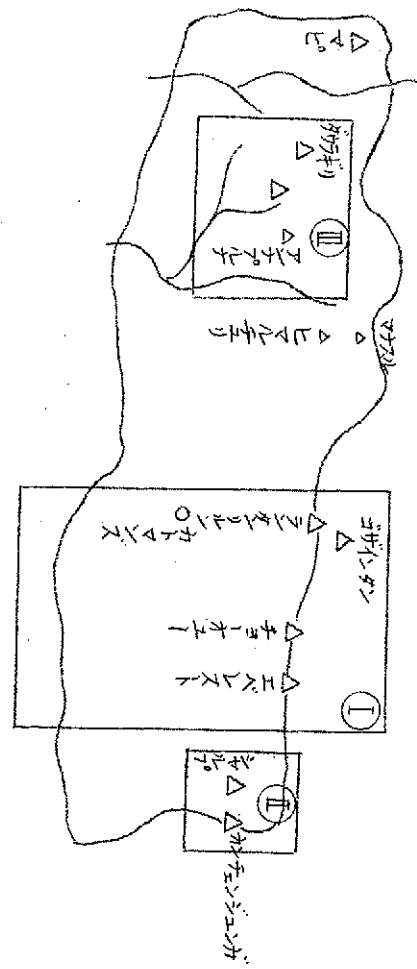
東ネパール 概念図 ①

(ソロクンブ地方)
(チベット)

(Y. Tatgumi氏の書か
れたものを模写)



ネパール 概念図



ソロクンブ紀行

1963年12月～1964年1月

田村俊秀

<12月4日> 出発前夜

やつと旅行許可証がおりた。王室の邦がうやうやしく有難いお墨付といった感じ。持物をまとめて神原氏に預ける。神原氏の激励で残つた前途の不安も消えた。シエルバホテルのランプのもとで、P-29のネパール外務省宛のレポートを練りタイプにうつ。カトマンズの仕事はこれで全部おしまいだ。

<12月5日>カトマンズーパネパー
バンスカン(標高500米)

インペリアルホテルの前に、乗合トラックのたまりがあり大声で客をひいている。客はドライバー同志がダンピングして安くなるまで待ち、ドライバーは、客が一杯乗るまで待ち、9時出発が、11時になつた。せつかくの広瀬、マーク、それにスシルラ氏の見送りが間のびしてしまつた。広瀬は今日の午後カル Катタへ立つ。私とミンマテンジンはオンボロ車にぎつしり詰み込まれ、カトマンズ盆地のはずれまで5ルピー。途中関所があつて乗客は全員強制的に種痘をうけさせられた。痘苗にはUSSRとある。凸凹道は大

ゆれにゆれ、ミンマは、グログロはいた。(彼は後に飛行機でもはでにやらかした。)パネパーで車をすてると、旅の終りまで歩き通さねばならぬ。ずつしりとリュックが重い。

翌朝は4時下弦の月に照らされて出発。村々は寝しずまつているが、すでに旅人は影法師の様に往来を始めた。徘徊する野犬の群、朝やけと共に水くみにゆく女達。

<旅の動機と旅行の方法>

立山のふもと「芦崎」(アングラ)が、名ガイドの故郷である如く、ソロクンブはテンジンやギャルツエンなどの名シエルバの出身地である。上高地が北アルプスの真髄ならば、ソロクンブばかり、穂高や槍にも相当すべき、エベレスト、チョーオユーなどの名峰が林立し、数多くの登山家や遠征隊が度々おとずれた。ソロクンブは芦崎と上高地とを、かねそをえている。通俗的なヒマラヤのエッセンスが、ここにある。P-29の帰途につく頃から秘かに抱いていたプランを、思切つて実行に移すことにした。もつと残つてヒマラヤ

を見ようというプランである。少し遠いが前述の様なわけで、ソロクンプに決めていた。死んだノイスが「天が落ちてもさしつかえないだろう。」と詠った愉快なソロクンプの道だ。冒険をする気は毛頭なく、単に「ヒマラヤ入門」の積りだつた。

私達は「偵察」の為ネパールへ来たのだし、今しがたその目的を果たしたに違いないのだが、私は自分が「偵察」に必要な観察眼を持合せているとは思えず、山を前にして途方に暮れることが多かつた。慣れた日本の山ならいざ知らず、スケールも高さも氷の状態も異なるからには、何をもつて可とし、否とするか正直に云つて自信がない。幸いP-29はヒマルチュリ、マナスルの間にあるので、見較べることで見当はついた。さてソロクンプには、かつて人々が苦闘の記録を残した実際の場面が数多くあり、或いは私の観察眼に多少の寄与をするかも知れない。しかし、クームアイスフォールや、エベレスト西稜、プモリの氷壁、アマダブラム、などをみて私はびつくりしてしまい、ヒマラヤで登れないと結論するのは登れると断定する以上に困難だ、と考え始めた。観察眼どころか、私は益々自信をなくした。

殆んど毎年ソロクンプには多数の遠征隊が訪れているとはいえ、カトマンズからキャラバンを組んで16日もかかるので、どこかみためにハイヒールが横行する様な通俗化には程遠い。ミンマと相談してソロクンプまで10日であるくプランを作つた。荷をうんと軽くする為、テントも炊事道具もすて、ビッケルもクランボンもおいた。スリーピングバッグ、ジャケット、懐中電燈、ローソク、フィルム、写真機、石ケン、ノート、それに途中で手に入らぬ砂糖、その他の食糧を買つて加える。プレゼント用に薬品は多めにもち、聴診器はトレードマークとして持つた。そして数冊の本、なかんずくノーマンハーデーの「ネパールの高地にて」はこの旅を私に示唆したばかりでなく、唯一のガイドブックとなつた。

食糧は徹底して現地食にして（これは実験の積り）日本を始め欧米の輸入品はつかわないことにした。しかしトウガラシと麦こがしばかり数日続いた時はさすがに参つた。

朝、5時頃暗いうちから歩き出し、9時頃朝食とり、昼はトウモロコシをかじるかしてごまかし、夜5時か時に8時頃泊る。途中の茶店で20パイ（10円）の茶をのんだり、チャン（ドブコク）やロキシ（清酒）をあ

ふつたりする。夕方になると適当な民家を物色し、泊めてもらう。多くはのき先に寝る。運がよければ中に入つて火のそばに寝れる。炊事はカマドの残り火をかりる。ナベや食器も借してもらう。南京虫やのみの襲撃にあうのは毎夜のこと。礼にタマゴや野菜を買つてやり時に薬をやつたり、ふき出物の出た赤ん坊にベニシリン軟膏を塗る。金を請求されると、ミンマは「旅をするからにはお互様じやないか」とけつた。私は同行者として、P29で働いた、ミンマテンジンを連れてゆくことにした。P29隊は6人のシエルバがいたが、彼が最も気に入ったからである。

宿を乞う為、民家に入る時は、必ず住人の種族を確めた。カーストにより排他性の強いもの、友好的なものがあるからだ。おおむね同種族は待遇が良い。私のミンマはシエルバ族だからシエルバの村に入ると歓待され、つかつたナベ、食器は洗わなくともよい。他のカーストの場合洗つて返さねばならぬ。「洗いが悪い。もう一度洗え」とつきかえされることもあつた。特に宗教的戒律のきびしいチエントリ一族は避けた。私は知らずノコノコと家の中に入り炊事中のカマドに近寄つたところ、火のついた薪でたたき出さ

れた。炊事中他人を入れない、というチエントリーのおきてを知らなかつたからだ。

旅なれているミンマでさえ、異種族の家人に対しては警戒し、わざと横柄威圧的な態度を装い、言葉もトゲトゲしい。しかし、シエルバの村では猫の様におとなしく、礼儀正しくふるまう。もつともシエルバの家で、我々は客人として丁重にあつかわれ、上座にすわらせられ、チャンや茶を何杯もすすめられ、寝具(1ミだらけ)を提供してくれた。もともとシエルバ族は大様で排他性がないせいもあるが。

ソロクンプはミンマの故郷である。ソロクンプに行くことは、ミンマにとつて帰郷である。日が経つにつれて、彼ははしやぎ始め、ソロクンプの山が見えだすと喜んだ。

私は努めてアムジー(医者)であることをさとらせぬ様にした。それどころか、日本人であることもかくした。黙つていれば帰郷する、シエルバやネパール人のあるものと区別がつかない。医師であることが知れると、必らずやつかない病人(メクラ、テンバ、死にかかつた子供)などが出て来て、休息出来ないからだ。しかしミンマは私の口どめにもかかわらずついもらしてしまふ。医師の従者であるということが

得意なのだ。私がたまに診察する時は、ウヤウヤしく聴診器をささげ持ち、私の病人への指図を威厳をこめて通訳したものだ。外国人であることがわかると、村人が見物に集まるし、卵や野菜の値がハネあがる。のみならず村人の自然なふるまいの中に入つてゆけなくなる。黙つていれば、お祭りや葬式などに知らん顔してわり込んで見物することが出来る。

道はおおむね良い。よく手入されて幅は時に一間程もある。まあ六甲のハイキングコースを想像すれば良い。しかし連日山から谷へ、谷から山へ芦屋から六甲を越えて有馬に出ることを毎日繰り返すに等しい。谷は標高500~1500m、峠は2500~3500、登り下りを繰り返して徐々に高度をあげ、遂に4000mのソロクンプに入るのだ。500mの谷は蒸し暑く、バナナ、パイナップルがなり、1000~1500ではミカンになる。3000を越すと、寒く霜柱がたち、時に雪が氷つてツルツルすべる。極端な対照の上り下りである。

段々島はすばらしい。等高線入りの地図をそのまま立体化したかと思う程、徹底的に耕され、その間に白壁の小綺麗な民家が立ち並ぶ。ネバ

ールは山国だが、日本の山国の概念と異なる。山のどんな所にも耕地があり、水田があり、人家がある。耕地のない山はシワリークの北に入らぬと出てこない。

行き交う人には、野良に行く村人、ほほえましい家族連れ、重い荷をかついだポーターの一群、巡礼、身なりの良い金持の商人、任地に赴く役人、都会の病院へ行く病人（ポーターにかつがれている）。一きわ異彩を放つチベット人の一団。つきまとつて離れぬ不気味な男、追いはぎでないかとこわつた。事実時に「おいはぎ」が出るそう。毎日天気は良く（冬の好天）、ジュガールからガウリサンカールまで遠望出来、私とミンマは快調のペースでどンドン歩いた。くたくたになるまで歩いた。荷はミンマが40K、私が25K位、途中でポーターを一人雇い、私が15K、ミンマを20Kにへらした。ミンマの荷が重すぎ、意地をはつて口に出さないが、あきらかにへばり出したからだ。私とて同様だつた。

ソロクンプへは日本人として雪男探険隊、加藤秀木氏の隊、チャムランの隊などがあげられるが、ここ2~3年は日本人がいつたということをかきぬ、そのせいか、街道ではまだまだ日本人は珍らしさを失つていなかつた。こと

に南へ下り出してからは日本人は全く始めてという地方が続いた。

今年は目下ギヤチユンカン隊が行っているし、立教や早稲田もソロクンプへ入る。近々日本エベレスト隊の大部隊が来る。私ははからずも来るべきソロクンプの日本人ブームのハンリになつたことに気がついた。

あまりおかしな真似をすれば、後から来る人皆に迷惑がかかる。だからとて気楽に振舞うことにはさしつかえなからうと考えて気を静めた。

ソロクンプから同じ道を帰るのは馬鹿馬鹿しい。南へまっすぐ下り、印度の国境近くのジャナクプールに出る計画にした。ジャナクプールからシムラに出、カトマンズに帰る積りであつた。幸い、ジャナクプールには、我々のリエゾンオフィサーのラナ君が居る。彼に再会するのも悪くはない。しかしこの道の後半はミンマも知らず、遠征隊も来たことがないときいていささか不安だつた。それにラナ君にうまくめぐりあえるかどうか心細かつた。まあ何とかなるさ。実際、案ずるより生むがやすかつた。

「どれ、ミンマゆくとするか」

「OK、サーブ」。

<12月6日> パンスカンドラガードーツアウビシランラ(2100)

北から3本の川が合してスンコンシになるところが、ドラガートの村。中共の技師団の一行がラサカトマンズ間のハイウエーを建設中であつた。青い工人服を着た中国人達が、芝生のテーブルで朝の茶を楽しんでいる所へ来合せた。しばらく互いにみつめあつた後、カメラをむけると、一人が「ノーノー」と叫んで手をふりながらとび出して来た。

ボテコシの左岸が切崩され、道路が丘陵ぞいにはるか北にのびる。工作機械らしいものは何もみえず、無数のネパール人達が蟻の様に群がって働いていた。やがては赤旗をなびかせたトラック隊がこの路をカトマンズへ繰込むのだろう。

<ミンマテンジンというシェルパについて>

6人のシェルパの中で特にミンマテンジンを選んだのは、今迄日本人の下で働らいた事がないせい(白人ばかり)が良く、その上背恰好、年令も私と殆んど同じ。元気で陽気だつたからだ。彼に「俺をお前の村へつれてゆかぬか。」という大喜びで承知した。英語もトンチンカンなが

らまずまずであつた。難をいえば元気すぎて無鉄砲なことだが、分別をよそおつた消極さより私の気に入つた。

二人共同い黄色い野球帽をかぶつて歩くとよく兄弟と間違がわれた。二人の衣服は共有物の様でしまいにはゴンチャになつた。主従というより友人でまるでヤジキタ道中だつた。毎日笑い、冗談を言い、通りがかりの村娘をからかい、はしやぎながらあふれる元気にまかせて快調のペースで歩いた。彼は村娘にきわどい冗談をなげつけ、びつくりして立ちすくむ娘に高笑をあげさせていつてしまう。時々道づれの旅人と、声高に何時間もしやべりながら歩く。「何の話だ。」というと、「つまらない話です。殺物の値段、家畜、商売の話ですよ。」

我々の話題はシュルバの噂、悪口、外国隊の裏話、前に働らいていたドイツ人の家庭の噂、そこの娘が親に黙つてあひびきしていたこと、特に面白いのは白人の女性旅行者がガイドのシュエルバとねんごろになる話だつた。

「ミンマ、お前いつ結婚するんだね」
「シュエルバにはどこにでも女はいます。急ぐ必要はない。ところでサーブはいつ結婚するかね。いいシュエルバ女を世話しますよ。少し洗えばつかえます。」

チャンやロキシーを飲みながら歩くとなますますよくしゃべつた。彼は普段はわけへだてがないが、村人の前では人が変わった様に神妙になり、私をサーブサーブとたてまつつた。このあたりのケジメは実に見事だつた。特に「自分の主人は日本人の医師なのだぞ。」ということを入りにいたくてたまらない様子だつた。

夕方私はタバコをくゆらせながらゆつくり日記をかき、ヒマラヤの壮大な夕焼を眺める。ミンマはせつせと水をくみ、火をおこし、夕食の仕度に忙がしい。そのあと寝床をのべてくれる。寝入るまでの間2人でチャンをのみながらおしゃべりをする。夜気が冷えびえとたちこめ、私達は満ち足りた思いでシユラフにもぐり込む。

時々ケンカもする。私の気嫌の悪い時、いつけ通りにしなかつた時、いかげんな情報を教えた時、私は邪険なほど叱りつけた。普通はみじめな位しよげるが、一度だけふてくさつてすわり込んでしまいついて来ない時があつた。私はこらしめるつもりでドンドン先に歩き、たつぷり引き離してから彼の来るのを待つたが一向にやつて来る気配がない「さては怒つて帰つたのかな。」と少々

心配になつた頃霧の中から顔色をかえ、目をつりあげ、滝の様な汗をながしながら、走ってくるミンマが現れた。私をみつけると思はずホッとした顔をしたが、意地を張つてそしらぬふりでブイと横を向き、ブツキラ棒にみかんを一つきだした。私達は以前にもまして心が通う様になつたことを感じた。

シエルパは一種の仏教徒だから殺生をきらう。クラク(ニワトリ)をさばく時は決して自分で手を下さず他のカーストに頼む。一度奮発してクラクを買つたが会僧と殺してくれる人がいなかった。じゃ私がしめてやろうというのと、サーブも仏教徒だからいけな。と云つて、しばらく考えていたが、観念したように目をつぶつていきなり首をしめた。ニワトリは死にきれず長い間もがいた。寒い夕方だつたがこの破戒者は汗をびつしよりかき、息を切らして「つらいです。」と一言もらした。このときはすまないという気で一杯になつた。

私が何かトラブルにまき込まれると、彼はサーブの一大事とばかりいきりたつ。ジャナクプールでボリスにつれてゆかれた時(中国人と間違えたのか)彼は猛然とボリスに喰つてかかり、あやうくなぐりつけるところだつた。

ミンマは世話女房の様に絶えずセカ

セカ何かしないと気がすまぬ性だ。

下男づとめより、旅暮らしの方がいいと云う。ジャナクプールで3日ほど飛行機待ちをした。無為の3日間彼はイライラと立つたり、すわつたり、むやみとタバコをふかしたり、そのうちバザールへ行つていろいろなものを買込んで来たかと思うと歌を歌いながらおそろしくこつた料理を作りはじめた。

一般にネパールやインドの農民はボカンとすわりこんで痴呆的な目を空に向けている光景をよくみかけるが、シエルパの村では誰もが絶えず何かゴソゴソ仕事をしている。糸をつむいだり、縫いものをしたり。ミンマに休暇を与えるとかえつて困つている。

ミンマは晩学である。ヒラリーの学校の先生のすすめで、はたちすぎで文字を憶えた。「シエルパも日本人も同じじゃないか。」と私がいうと、シエルパは強いが頭が悪いからサーブの様になれない、せつかく英語を習つても頭からすぐ出てゆくど深刻な顔をして首を振る。ミンマには自我意識に目めた高校生の様なところがある。

彼は以前アウフシユナイダー(オーストリア人)と一緒に旅をした。

「チベットの七年」を読んだ方はおわかりだろうが、ハーラーと共にラサで七年間くらしした人だ。可成り名をとげ

たアウフシュナイダーは老いてからもヒマラヤが忘れられず、一人でネパールへ来た。彼はチベット語が自由に話せ、ミンマとはチベット語で話をした。お伴のシエルバはミンマー人、亡命のカンパの兵士30人程ポーターにして6千米の無名の小ピークを2人で登り、老人は子供の様に喜んだという。彼は二言目にはアウフシュナイダーをなつかしむ。

アウフシュナイダーは入歯をしていたらしく、食後入歯をとり出して洗うのを見て、うぶなミンマは仰天したらしい。

テイス カミング アウト と目をむいてみせた。

<ミンマはどうして高所シエルバになったか。>

日本でも田舎の少年が東京にあこがれて家出する様、ミンマもダージリンにあこがれて、父の金を盗み、こっそりと家を抜け出した。父は自分で追うかたわら、村人に金をやり、探させた。ミンマは捕り、連れ戻された。この様な事を何度か繰り返しているうち遂にまんまと逃げおおせた。追跡をくります為夜歩き、昼間はひそんだ。彼はダージリンにつき、そこでポーターや人夫の様な仕事をするうち、ある遠征

隊のポーターになった。それがジャヌーのフランス隊である。その後、インドのエベレスト隊などにくつついて歩き、除々に頭角を現わしてきた。彼は幸運だった。ドイツ人の家庭に奉公人として働く機会を得、次にスイスミッションに頼まれ、正式にシエルバとしてドイツの測量隊についてデビューした。

この様に家出のケースは非常に多いらしい。我々も南に下る途中一人のシエルバの少年を道ずれにした。ダージリンのおばの所へ行くのだという。

ミンマにいわせるとこれは嘘だそうなの金も充分あるというが、我々が国境でインド貨幣に両替してやつた時、哀れな位少しだった。どうやら家出らしい。しかしシエルバの血は争えない。

頼みもしないのに私の荷の一部を持ち水をくんだり、まきをとつたりせつせと手伝う。私が茶やチヤンをおどつてやると、かならずおかえしをする。

他のカーストになると、貰うことを何とも思わぬ。この少年は純朴そのもので、自動車やラクダに腰を抜かす。礼儀正しくて、私は彼が好きだった。

国境近くで別れる時、彼は涙を見せた。ダージリンに出て彼があんな純朴さを失わぬ事を祈つた。しかし普通は、多くは同じ村の兄貴である先輩のシエルバ

に連れられて、遠征に行き、ポーター兼雑用に使われて(一種の見習い)経験を積むうちにランクが上るといいうケースをたどるらしい。

<12月7日> ツアウピシランラー
ランシゴンパーボクテ(2000)

<12月8日> ボクテーキランテイ
チャブーカブレ(2000)
ツアランギコーラ、とタンバコシ
を渡る。

<12月9日> カブレーチサバニ峠
(2400)ージレートシマザン
ジレのスイスミツシオンに立寄る。

シマザンは地図の上ではテーゼと書いてある。ネワール商人の町。鉄鉱石が出る。ミンマによると地名には、ネパール名とチベット名の二通りあることがあるらしい。サガルマータと、チヨモルンマの類いか。注意せねばならない。

<スイスの人々>

単調な食事に飽きた頃、道中のジレという村にスイスのミツシオンがあり、バター、チーズを作っているときいて、チーズが欲しくなり、立寄つてみることにした。

ミンマはそれ以前、スイスミツシオン(スイス使節団)で働いていたことがあつて、スイス人に親しみをもつて

いる様だ。スイス人に会うというと、近くの小川で体を洗い始め、髪にクリームをつけて、おしやれをした。日本人に会う時はどうするだろうと思う。

広い谷間に、スイスの山小屋風の美しい建物がみえ清潔な牧舎が並ぶ。あたりの丘陵は、規則正しく区切られた牧場になり、羊や乳牛が放牧されている。ネパールの中に忽然とスイスが出現している。小さな短冊型の飛行場があり折しも、トンボの様に小さな飛行機がとびたつていつた。

金髪のスィス人が牧舎を廻っている。私をツェルバだと思つたらしく、ネパール語で話しかけて来た。食堂で皿に山盛チーズを出してくれた。実にうまうま一気に平らげた。

ここには病院があり、スイス人の医師がいる。乳牛を飼ひ酪製品を作り、カトマンズに売つて利益を地元の人々に還元するのだという。任期は家族連れで2年。2年毎に交代する。

ここでは、三種類の人間を使用している。

- (1) 地元の土民：穀物や野菜の栽培材木の切り出し、荷の運搬
- (2) シェルバ：スイス人家族のホームメイド、病院の仕事
- (3) ネワール：彼等はインテリで英

語の読み書きが出来る。主に計理をとり扱っている。

この使い分けは、各民族の特徴を巧みに利用していて興味深いものがあつた。ネパール全体がこの様な構成になつているのかもしれない。ここはその典型である。

スイス人の大柄の女が、ピッタリしたジーパンをはいた上にチベット靴をつけ、大またにおしりをくりくりさせて歩いているのは見ものであつた。金髪の白人の子供が土民とワラの上でとつきみあつて遊んでいる。英語が出来ない。尋ねると、ネパール語で答えて来た。「この子は私達よりネパール語がうまい」と金髪の母親がいう。

ドウドコンの河岸では、毎年の様に流失する橋の代りに鉄のツリ橋をかけるべく、スイス人の技師が家族と共に掘立小屋に住んでいた。

スイス人のこの地道な援助には頭が下る思いがした。カトマンズの米人の平和部隊に較べてもスイスの人は評判が良い。

ダウラギリのスイス隊は氷河の上に小型飛行機(イエテイ号<雪男>)を発着させて荷をはこんだ。「この氷河に飛行機が使えることに着目した点も賞賛に値するが、その背景にはこの国に地道に援助を続けて来たスイス人の

積重つた経験があることを注意しなければならない。単なる思い付きでは出来ないことだ」といつたのは川喜多教授である。私はボカラでお会いした。

<放浪の民>

いろいろな旅人とゆきかう。中でも異彩をはなつのは、南へ下るセルバヤチベット人の一団、彼等は5・6人から10人以上の集団をなし、女、子供、老人、赤ん坊、そして犬までつれ、めいめいナベ、カマ、寝具などの大きな荷を背負い、ウンウンいながらもお経をととなえながら、あみものをしながら、歌いながら、ふざけながら、にぎやかに山をおりてくる。

セルバヤチベット人達は夏の間涼しい高地に住み、秋から冬にかけて南に下つて来るものが多い。農閑期である上、マラリアの恐れが少いからだという。私は彼等と丁度ゆきちがいになるわけだ。目的はあきないのほか、カトマンズなどの都市で日用品や布地を仕入れること、自分達の作った毛皮、ジュウタンを売ること、塩を売ることなど。たいていは巡礼をかねているらしい。カトマンズのバウンダナートやスワンプナートというラマ教のお寺に集まつてお経をととなえながら、バゴダのまわりを日に何度となくめぐる。

冬のカトマンズはこのチベット服、弁髪のお上りさんで一杯であり。彼等がインド商人の店に坐り込んではに値切つている光景をよくみかけた。

パーティーは老人、女、子供が大半で、めいめいしこたま荷をしょつていて、一日の行程はすこぶる短い。私の足で二週間位のところを彼等は20日も一月もかかつてゆつくり歩く。こうなると旅の目的は何であれ、旅自体をリクリエーションとして楽しんでいるとしか思えない。昔チベットの高原をヤクや羊を追つて放浪した習性が残つているのだろうか。事実ヤオーと呼ばれるチベット人は、絶えず村から村へとさまよひ、法界坊の様にお経をとなえては物乞をし、時には盗人に早変わりするそうだ。私も一度、「故郷の村にゴンバ(お寺)を建てますから、どうぞ寄進を。」と云寄せられたことがある。ジャガイモがこのネパールの高原に伝はつたのはハーデイによるとつい最近のことらしいが、そのおかげで元来半遊牧民のシェルパが定住する様になつた。しかし旅の衝動は消えないのだろうか。

夕方になると、この旅する一家族は適当な所で野天に車座になつてどつかりとあぐらをかき、中央にあかあかと焚火を作り、まず茶をわかす。(茶は

丁度日本の番茶のようなものでチベットから輸入される。)これに塩を加え、バターをとかし、攪拌してから何杯も何杯もゆつくりと飲む。それから、ツアンバ、乾したチーズ、トウモロコシの粉などの簡単な材料を、スープにしたり、ダンゴにしたり、煮たり、焼いたりしていろいろな料理をつくり、2~3時間もかかつて数コースの夕食をたいらげ、又寝るまで茶を飲みつづける。一度あぐらをかいて坐り込むと、食事がすむまで、雪がふろうが、風がふとうが泰然自若として動じない。その間賑やかな会話と笑いがつづく。ネパール人が中腰で簡単な食事をそそくさと終えるのと対照的である。

私はこの様な夕食中のシェルパやチベット人にゆき会つと、よく仲間にいられてもらつた。タバコを2・3本与えて茶にあずかり、ツアンバ汁をすゝる。私がソロクンプにゆく、又はソロクンプから来たということは彼等の印象を良くしたと思う。何の為に?という質問には、お寺にお参りするのだと答えることにしていた。山がどうのこうのといつても私一人では、げげんな顔をされるだけだから。私のうすぎたない様子と顔がモンゴロイドであることも有利だつた。私はこの雰囲気が気に入つて一緒に放浪したかつた。しかし急

がねばならぬ。

はるか南のインドの国境近くで、おもいかけずこの様な集団をみた時はすごく懐しかった。しかしこの亡命チベット人達は陰気で猜疑心にみちていた。すつかり弱乏し、うちのめされ、インドにいるダライラマをたよつてゆくのだという。ずつと後になつてニューデリーでチベット人の女乞食をみた。この時も激しい懐しさに抗しきれず、大金をやつてしまつた。「何処からきた？」彼女は私の知らぬ土地の名をいつた。

チベット人はセルパの様にどれもこれも気立がよく正直であるかというところでもない。西方の中部ネパールのサマ部落のボテア達は（ネパールではチベット人はボテアと呼ばれる。）度々日本のマナスル遠征隊を妨害して悪名高いし、アンナプルナの北側のマナンポット附近では、よくチベット系の強盗や盗族に遠征隊が悩まされている。ネパール人ことにカトマンズの都会人達はこれらボテアを賤民として忌み嫌ひ、彼等を常習的盗人としてみる。

私はあるネパールのインテリに、「ボテアもセルパも同じチベット人だから、使い様によつてはボテアも役に立つのではないか。」と聞いたと

ころ、もつてのほがといわんばかりに首をふつてhopeless（望みはない）といつていたのを思い出す。しかし私は、線の細い、都会化して口先きのうまいカトマンズのネパール人より、うすよごれているが高原の雰囲気を持たせられている、陽気でタフなチベット人達を好きになりはじめていた。

極地探険がエスキモーに学んだ様に、これからヒマラヤの奥深く長い期間逗留して研究したり登つたりすることが行はれる様になると、これらセルパ、チベット人の生活から何か学ぶところがありそうだ。南方のめぐまれた自然の中で暮しているネパール人より、北の苛酷な条件のもとにいる人々の方が生活の知恵が発達しているとみるのは別に私だけでない。我々のもち込む道具は短い期間有効だが故障・破損しやすく、石油や電池を補給せねばならぬ。私はチベット人の日常使う皮のフイゴを一つ貰つて帰つた。夏山の合宿で薪さたくとき、ことに雨の日など、このフイゴは威力を発揮するだろうと考えたからだ。彼等の毛織のテントは、なかで薪をたいても煙がうまく出てゆく様に設計されている。夏山のB.C.のキッチンテント用に一度チベット風テントを試作して、このフイゴをつかつてチャパティを石焼きしてみたい。

<12月10日>トシマザン—コスバ
ス—チャウマ峠(2700)

チャウマ村

チャウマは最初の低地シエルバの大きな村である。豊かで清潔な村。ウォンデイの家を訪問すると老父が留守を守っていた。女子供を交えた村人達がにぎやかに道普請をしている。

微笑と礼儀正しさ、親切、いよいよシエルバの村に入った。

<12月11日>チャウマーセター

ボンバ峠(3400)—

ズンベン。(2800)

ボンバ峠で始めて3千米を越えた。寒い。この峠は北のロールワリンヒマールに連る。

ズンベンは、スイスの山村に似て整然とした低地シエルバの村、教会の代りに三階のホワイトハウスの様な巨大なゴンバがあり、いがり頭の小坊主がぞろぞろ出て来た。ズンベンから北にナムチエバザールへのモンズルートがある。四千米を越える難路で凍死者が多いとのこと。

<シエルバ>

シエルバは日本人とまづたく同じ顔、同じ体格をしている。どうかすると性質さえ似ているとはよく云はれることである。おだてに乗って簡単に張切る

こと。嫉妬深く、競走意識が強く、体裁をかまうこと。正直でお人好しのこと。酒とバクチが好きなこと、ケンカ早いこと一。

シエルバはチベット族であり、チベット人、中国人、日本人は、みかけでは区別がつかない。シエルバの日常語はチベット語の方言である。しかしネパール領内に住んでいる為、ネパール語も自在に話す。ネパール語はヒンズー語の方言である。彼等の元の服装は、西遊記の孫悟空等のみなりを想起してもらへば、そのままあてはまる。古代中国の西域の装束とでもいうか。他のネバリーは裸足だが、彼等はウールの布で作った長靴をはく。金持は皮の長靴。ラマと呼ばれる僧侶は三蔵法師そっくりだ。本来は弁髪だが、最近は断髪が多いらしい。

シエルバは三千米以上の高所に住んでいるものと、それ以下の所に住んでいるものと2種類あるということ始めて知った。チャウマ村やズンベンが後者である。低地シエルバは、一部ネパール化し、ネパール服を着ているものもある。高地シエルバは低地シエルバをバカにし、彼等は高い所になると、高山病にかかつて働けなくなると云う。高地シエルバは時に四千米以上に住み、夏の間は5500米位の牧場にさえ住

む。登山に強いはずである。しかし性質は低も高も同じらしく、低シエルバ登山をしなくても都会の欧米人に奉公人として働くか、スイスミッシンにやとわれているらしい。勿論例外はある。

いわゆる高名なシエルバ（テンジン、ガルツェン）はナムチエバザール及び北（即ちもつと高い所）のクムジュン、ターミー、パンボチエという部落から、かたまつて出ている。（これらの部落は四千米前後）

シエルバ達は、自分達がチベット人と云われるのを嫌い、ことごとくに区別したがる。P29のシエルバ達はブリガンダキのチベット人（ネパールではボチアと呼ばれる）の部落を通過する時、軽蔑を露骨に示し、「彼等は汚ない、臭い、」と云つて差をつけた。

パリッとしたおしきせの登山服姿のシエルバばかり見なれては私は、シエルバの故郷に来てみて、彼等の父母、妻、子供がまさしく、キタナイ、クサイチベット人そのものであることを知つて驚いた。基本的な生活は同じでも仔細にみるとブリガンダキのチベット人とは生活様式にかなりの相違がある。前者はうすぎたない長屋の様な集村であるのに対しソロクンプではワシントン、ハイツの様に頑丈で美しい白壁の家が一世帯ずつ、適当に散在する。

又、前者は明りとりや窓がないか貧弱であるが、シエルバの家では、南か東にしつかりとした窓がある。そのほかいろいろの位置、家具の種類、置場所など東北と関西程のちがひがある様だ。シエルバは鼻ベチャで小柄なモンゴロイドだが、どうも印象としては亡命者やサマのチベット人の方が、鼻筋の通つた目の大きい体格の堂々とした立派なものが多かつた様を気がする。シエルバと一口にいつても、生れは遙るかなチベットで、育つたのがソロクンプといつた類もある様で、ソロクンプ生えぬきのシエルバは、こういつた後天的シエルバをかげでノーシエルバと呼んではつきりと区別していた。アンツェリン5号、ウオンデイなどがその例である。

ソロクンプのうち、クムジュンという部落は特にサーダーが多い。アンテンバにいはせると、最近は大した登山歴もないくせに、サーダーを名乗るものが増えて来て医者博士の如き様らしい。もつとも単なるガイド、小旅行専門のシエルバ及びそのサーダーとを格的登山をする。シエルバ及びそのサーターとに区別されるらしい。

<ことばの問題>

最初、チベット語、ネパール語、

ヒンズー語の区別がつかなくつた。そのうち特有の語尾の響きから区別出来る様になつた。ネパール語のカタコトは必要にせまられていつのまにか憶えていた。セルバの話すチベット語は殆んど憶えなかつた。しかし教え方はすぐ憶えた。何故なら 1、2、3、・・はチック、ニ、スン、シ、ソゴといつた具合に殆んど日本語と同じだから。彼等がチュウイチ(11)、チュニ(12)、チュスン(13)と数えるのをきくと、猿が突然日本語をしゃべりだした様な錯覚に陥入る。一方セルバも日本語の数をすぐ憶える。

何故だろう。私は日本語が古代中国語の音を漢字と共に取入れているところから、チベット語も古代中国語の影響を受けている、いや古代中国語が東と西の辺境にそのまま残り残されているというすこぶる大胆な仮説をたてた。ためしにいろいろたずねてみる。薪(シン)はシン、水(スイ)はチュ、食(シヨク)はシヤラ、人(ニン)はミン。これに勇気を得てもつときいてみると「サン」であるべき山はカングリ、「ニヨ」であるべき女はブンデンサで全然ちがう、私はあきらめてこの仮説を追求するのをやめた。

ミンマはおそろしくブロークンな英語をつかう。僅かばかりの英単語を四

方八方につかつて何とか表現しようとする。かなりこみ入つた会話もする。我々がシヤレタいいまわしを沢山習つてるくにしゃべれないのといひ対照だ。

ミンマにお前のことばはチベット語だろうという、いやちがうシエルバ語ですとがんばる。そのくせ国境をこえて来たチベット人や他の地方のチベツタンと自由に会話をする。

シエルバはネバリー、チベット語、ヒンディー、英語もつかり為重宝がられる。最近にはインド軍の国境警備にシエルバが大量にやとわれているそうだ。ネパールでラジオをきくと、デリーと中共からチベット語の放送が入つて来る。ネパール自身はチベット語の放送をしない。デリーからはダライラマニュースと称し、ダライラマをたゞえるにぎやかなテーマソングがつく。

<シエルバの二つの顔>

主人に忠実この上をいシエルバも、他の種族のポーターを扱う時は苛酷といつてもいい位、きたない手を使う。(もつとも優越するものが下賤とされるものを扱う時の社会慣習であろうが)私は途中でポーターを一人、数日雇つたことがある。ミンマは村の中「ポーターはおらんか。」と声高に叫んで歩

き、村人が集つて来ると、弁舌巧みに「少くとも20日はやとつてやる。(私は一週間位の積りだつた。)こない収入の機会はない。」と、普通8ルピーの日当を5ルピーに値切つた上、うんと背負わせて、容赦なく、「歩け、歩け。」とせきたて、2日行程を1日で歩かせ、夕方には水をくめ、薪を拾えとこきつかう。しかも、次の日、お前は歩き方が遅いと、予告なしにいきなり首にしてとりかえした。労働基準法など、薬にしたくともない。しかし、これがごく普通とされていることらしい。

カトマンズの木賃宿では、春の遠征隊の到着を待つシエルパが折山たむろしていた。別に主従関係はないのに色々と親切に世話をやいてくれるし、彼等の酒盛にも招いてくれ、すこぶる気前が良い。

旅を終えてカトマンズを去る前、持物を処分することにし、傘やカバン、衣料品などをシエルパ相手に売つたことがある。この時の彼等は、普段の柔和な顔つきとうつて変つたきびしい表情になり、「サブと私は今からビジネスだ。」と云切ると、あらゆる策を奔して、値切つて来た。一度同意した値を、現金支払の時、半分しか渡さなかつたり。まければ全部買う、まけなけ

れば一つもいらんと、all or nothing ポーカーの様に勝負をいどむ。逆に私が彼等から何か買う時は、3倍位にふつけて来る。インド商人そのけの有様。人の良いアメリカ人などは、これらシエルパの絶好の餌食であつた。しかし、取引が済むといつもの柔和な顔のシエルパにもどる。私からリネックを15ルピーで買い、その日のうちアメリカ人に30ルピーでうり、しかもケロリと得意気に私に話してきかせる。変り身のあざやかさに、私はシエルパは二つの顔があると認識を新たにした。

これはソロクンプで聞いた話。

ソロクンプは米が出来ない。温い低地に住むネパール人に米を注文し、わざと氷雨の降る寒い日によびよせる。寒さに弱い低地人が、こごえ切つてしまひ耐えかねて、南へ帰ろうとする時をみはからつて、よつてたかつて買いたたく。シエルパに関する正直、善良、の評判というもの、主従の関係から、我々が絶対に優越した立場から、みた上での話で、人たび、彼等の内部に立入ると、人間関係のあらゆる様相がある様だし、これは当然のことだ。P-29のシエルパ達のチームワークの見事さ、仲の良さには感心していた。

ものの、その後ミンマと二人きりで話をしてみると、我々には知られない葛藤が無数にあつた様で驚いた。

出身部落の間で対立することが一番多いらしい。あるシエルバが不正を働いても、サーダーは同じ部落なら目をつぶり他の部落ならとがめる。サーブの寵受や取立てに対する、競走、中傷、嫉妬、不満。全く我々と同じである。ミンマの仲間のシエルバに対する批評は、辛辣を極めた。シエルバに対する我々の評価と、シエルバ同志の評価が一致する時と喰いちがう時とがあるのは興味深い。丁度上役に気に入られている平社員が、同輩に対しては出世の為仲間を蹴落す、冷血漢であるケースとよく似ていると思つた。ところで英国人は植民地統治にこの使用人の対立を巧みに利用したときく。

<12月12日> ズンベシータシン
ドワードウッドコシ(1500)ー
カリコーラ(3000)

ミンマの一族が南へ下るのに出合う。ミンマの12才位の弟がいて兄弟は抱きあつて離れない。

ティアンボーチエの高僧が通りかゝり我々はひざまずいて祝福を受けた。ナムチエのチェックポストのキャプテンが、丁度交代でカトマンズへ引上げ

るのに出合う。

自動小銃で武装しているが、愛想よく「ナムチエは本当にいい所だ。君はラッキーだよ。今は一番見晴しが良い」と礼讃し私に自動小銃をいじらせてくれた。

<12月13日> カリコーラーチャ
ウリンカルカーロムゾー

今日からドウトコシの遡行。ブリガンダキの様に深いV字谷の左岸の3千米位を高まきする。行きかう人、皆ミンマの知人、「やあミンマお帰り。」野良の娘達が笑いさざめきながら、

「ジャガイモ沢山ゆでたげるから泊つてゆかない？」と誘惑する。帰郷するセルバはお土産があるのでよくもてる。

チャウリンカルカは太古のモレーンの押し出しの上であり、家の様な岩石と麦畑がモザイク状に混じっている。

アンダワ宅に泊る。

<アンダワの話>

アンダワ、彼は拾つた男だつた。カトマンズの街頭で登山服のお古をだらしなく着た男が私のあとをのそのそついでまわり、「サーブ、私は山にゆきたい。どうか連れていつて下さい。」と手をあわせて乞食の様におがむ。結局可哀想になつてポーターとして他のシエルバより安く雇つた。足は早い

が、酒好で、お人好し、あまり利巧にはみえず、P29のシエルバのうちでは軽輩としてあしらはれていた。

ソロクンプに入つて最初に厄介になつたのはなんとこのアンダワ宅であつた。彼は丁度外出先から帰つたところで、シヤレた小ぎれいなシヤツに背広、きちんとしたズボンに立派な靴をはき、堂々と私を迎えた。ソロソロと集つて来た近所の人に接する態度も立派な一家のあるじである。

家は決して豊かには見えぬが一通り家具は揃い、家蓄を数頭もち畠にはジャガイモをうえ、彼の妻が威厳をもつて、主の留守を管理していた様に見つけた。

遠征隊のポーターや下級のシエルバは、なりがみすぼらしくおとなしいので、カルカッタの街頭でボロをまとつてゴロ寝している宿なしのイメージとダブツてしまい、とかく一人前でない様な錯覚をもつていたのだが、故郷へ帰るとこの通り、一軒の家をかまえた一家の主人であり、息子なのだ。これは私にとつて発見だつた。

帰りにも彼の家に一泊したがその時、「サーブ突然なものだから、何も用意していません。」と情けない顔をしたが、ふとすみでスマスマ寝ているニワトリに目をとめると、

いきなりひつつかんで首をしめ、手早く料理して、うまいチキンカレーを作つてくれた。ミンマは、「この家に鶏は三羽もいないのです。」といつた。ソロクンプでは鶏は少なく貴重品であることを私もきいていた。

私は「鉢之木」の謡曲を想出し、感激した。彼の家は街道筋にある上、お人好なので、絶えずシエルバ達がたち寄り、その度にせい一杯の歓迎をするらしい。酒のみで見栄張りでいりもしない上等の靴を買つたりする様で、その為かいつも貧乏なのだそうだ。「しかしインサイド(心のこと)はきれいでグッドマンです、とミンマが説明した。

この日のアンダワは口びるを腫らし、血を流してベソをかいていた。きくと、ナムチエバザールのポリスになぐられたという。

何でも一人のインド人がティアンポーチエ寺院に一日10ルビーで案内を頼んで来たので、連れていつたところ、5ルビーしか払わなかつた。二人はいい争つた拳句ポリスに訴えて出た。ポリスはインド人だけの云分だけ聞いて、アンダワをなぐつた、とのこと。アンダワは説明したあとボロボロ涙を流し、「ポリスは悪い男です、サーブどうか彼を訴えて下さい。こんな事をされたのでは、私の名に傷がつきます」

と両手をあわせた。私はカッと腹が立つた。この男に嘘はないことは確信がもてた。すぐでもナムチエにとつてかえし、ポリスにねじり込んでやるかと思つた。しかし勝目のないことは明らかだつた。証人がいないのである。しかしこのポリスはいずれ復讐をうけるだろう。悪評の高いポリスは、帰任する時、待ち伏せた村人によつてタタキのめされることがあるらしい。ポリスも自分の名誉の為表沙汰にしたがらぬ。私は首都に帰るといふポリスに道であつたことがあるが、ピストルをバンドにブチ込み、従卒に自動小銃をかまえさせてものものしいかざりであつた。ミンマは「ポリスは帰る時が一番こわいのです」と笑つた。

私はその後P29で共に過したシエルバの家を一軒一軒訪ねて廻つた。彼等が自分の故郷ではどんな暮らしをしているのかみたかつたからだ。いずれも貧富の差こそあれ、立派な一軒の家をかまえ、地所をもち、家畜を飼い、両親、妻、子供、と平和に楽しく暮していた。私のシエルバを見る目は今後、「単に使いよい、正直な使用人」から、

「一個の独立した人格」に変化するだろう。

もてなしも各シエルバの個性がよく出ていた。アンダワはのべた通りだが、

ミンマは、自分のうまいものは、サーブもうまからうという独断の善意を終始おし通し、ヤクのくさい生肉を無理にすすめるのには閉口した。サーブの好みをよく知つていて、気のきくアンテンバはとつておきのインスタントローヒヤチキンラーメンをとり出して、妙な食事に参つている私を驚喜させた。アンフリーーは、私が急いでいる時に、念を入れて、手の込んだギョウザを作つてくれたのはいいが、3時間も待たされてはなはだ有難迷惑であつた。

ベンバノルブは非常に器用で小生の散髪をしてくれたし、彼の貧しい家での夕食は、カブラと肉の素朴なものだつたが、きめのこまかい味付けがしてあつた。

アンニマは家族が皆出嫁ぎに出て一人ぼつちで留守をしていた。私がオーイアンニマと呼ぶと、大喜びでとび出して来たものの、どうしてもてなしたものがわからず、すつかりうるたえてしまい、気毒な位右往左往した。そして以前私に厳しくとつちめられたクックのアンダワは姿をかくしたまま遂に現れなかつた。

<ナムチエバザール>

カトマンズを出て十日目、険しいド
ウドコンのV字谷をさかのぼりナムチ
エバザールについた。富士山に匹敵す
る高さの中腹に、ひな段の様に白壁の
家がる0軒ほど並ぶ。その頭上にカン
テが峰がぬつとそびえる。チベットと
の交易でさかえた、このバザールも中
共の侵入以来さびれたが、近年、遠
征隊の基地として知らぬものはない。

大部分は商人化したシェルバだが、
他にネパリーの商人、細工師、仕立屋、
郵便局、インドの無線技師、ネパール
人の警官、ヒマラヤン・ソサイテイの
ナムチエ支部等がある。

数人のシェルバが集まつて来て、て
んでんに自己紹介をした。私はアメリ
カ隊のセカンドサードーですとか、私
はXX隊に参加した〇〇です、といつ
た具合、あまり多くてよくおぼえてい
ない。皆はでな遠征隊のキルティング
や靴をつけ、得意気であり、同時に所
在なげである。

向うからまるで日本の大学山岳部員
とそつくりのがやつて来る。合宿がす
んで将に山をおりて来たと云わんばかり
の甲斐甲斐しいでたちをしている。

「ユー ジャパニーズ？」と問いか
けて来た。

「誰だ」

「私はサードーのソンナギルミです。
カンジロバに行きました。」とぐつと
胸をそらす。

「ああ、お前がソンナギルミか。名前
はかねてからきいている。会えてうれ
しい。」

彼はシェルバ特有のあのはにかんだ様
な笑みで顔をくしやくしやにして、握
手してくる。

「川喜多サーブは今どうしておられ
るか。日本に帰つたらよろしくいつ
て下さい。」

「承知した。」

「どうかソロクンプでは、私の家に
立ち寄つて下さい。汚いですが、チ
ヤンは沢山あります。」

その他、名の知れたシェルバに沢山会
つた。

会話は上の様な経過をたどるのが普通。
時にはその場でティーやチヤンをおど
られたり、今飲んでる茶代を皆払つ
てくれたりする。

向こうから汚ないチベット服の男が
来てふいに英語であいさつする、これ
がキルケンと云うロックだつたりして
面白い。

チョタレイというのは、ガラツ八の
様にしやべりまくる陽気な小男で、日
本隊にもらつたカメラのお古を下げて

いる。フィルムは入っていないからダテにすぎぬ。

その他、アンダワ（スイス隊のサーダー）、アンナムギヤル。アン・テンジン、ペンバノルブ、ウエルキン等。カルカッタではバサンブタールに会つた。

チェックポストではどす黒いインド人技師がたき火のそばにうずくまり、寒くてたまらぬとばかり、縮まつて陰気な目を光らせている。数日前着任したばかりのグルンのキャプテンは、私の通行証を貧乏ゆすりしながら横柄にみたあと部下に、「この男はソロクンプに来たそうだが、ソロクンプとはいつたどこから、どこまでだ？」ときいているとミンマが私に耳うちした。私は過去の遠征隊の話を持ち出し、ヒラリーとか、エベレストとか云つたが新米のキャプテンには何の話か、わからぬ様子だつた。インド人が横から、「ここには何も無い。ひどいところだ。あまりウロウロするな。」という。私はシヤクにさわつて、そのうち千人ほど日本人が来てウロウロするだろうといつて席を立つた。たつた一人で疲れ切り、薄よごれていたのでみくびられたらしい。

子供がワイワイガヤガヤついて来て、

ありつたけの英語を並べたててとりまく。生気のないジェルバの男が、スーベニールはいらぬかという。遠征隊に毒された町。

ナルチエバザールより上の四千メートルの部落では姿も出来ず、ジャガイモとカブラ、少々の野菜、牧場にヤクと羊を飼い、バター、ミルク、チーズ、羊毛と羊皮をとる。

ジェルバは牧畜のかたわらチベット高原の塩と南方の穀物との交換貿易の仲介ブローカーでくらし来たという。ジェルバが同時に、天性の商人であることは、ここからくるのか。塩の値があがると、米の値が下り、米の値が上がると、塩の値が下る。逆比例。この2つの物質が交換の規準にされているところから面白い現象である。ジェルバ達はダージリンヤ、その他の地方に、どんどん出稼ぎに出て働いた。これが英国人にみとめられるきつかけになつた。私は冬のソロクンプをたずねたことになるが、12月は雪が降らず、乾燥し、毎日晴天が続いて、山の眺めには絶好だつた。石垣で囲まれたイモ畠には青い色のものは何も無い、一面の冬枯の景色だつた。（春には牧草が丈なし、高山の花が美しく咲くと聞く。）

ジェルバの家は、石を積んだ長方形二階のすこぶる頑丈な作り。下に家畜

がすみ、2階に家族がすむ。2階はぶちぬき一間、30畳はあろう。

イロリがあつてヤクの糞や薪をたく。煙突が無いので煤だらけ。壁には棚があり、銅、真鍮のさまざまな容器、食器がピカピカに磨きたてられて、キッチンと配列されている。この数と手入れにより、貧富、主婦の性格がわかるという。遠征隊のポリエチの容器、ナイフ、フォーク、マホーピンなども並べてある。事実、豊かなサーダー(収入が多い)の家は家具の数が多く、貧しい、アンニマの家は少く手入れが悪かつた。奥の方に長持があり、祭の衣服、贈着や、貴重品が入っている。ふだんはくさくてきたないシエルバが写真をとつてくれと顔を洗い、贈着をつけた時のかわり様をみて、驚いた。実に素晴らしい民族衣装だ。赤紫のオーパー白い絹のチヨツキ、しまの前かけ、ひすいの首かざり、色とりどりの長靴。男はオーパーの肩はだを小粋にぬぎ、女はしなを作り、重厚なエキソチズムを発散させて息をのむほど美しい。アマダブラムや、カンテガを背景に、夢中になつてジャッターを切つた。このとつておきの贈着は、年に数度、おめでたい時にしかつけないとのこと。

<12月14日> ロムゾーナムチエ
バザール(3700)ーブルテ
(3800)

ミンマの兄の一人パサンドルジエ宅に泊る。ブルテはかつて日本の雪男調査隊がベースをおいた所である。ミンマの留守の間に、兄に息子が出来ミンマはおじさんになつていた。丸々と肥えた赤坊はおじさんに抱かれて愛嬌をふりまく。

<12月15日> ブルテターミー
(4000)ターミはサマに似た
U字谷の村でテンジンの出身地と
云う。

<ミンマの父>

ミンマの父と妹はターミーと云う部落でやつと見つかつた。見つかつたというのはミンマの父は5軒家を持ち、どれに住んでいるかわからない。父も妹もまさしくチベット人だつた。羊の毛皮のゴワゴワした上着とズボンをはき、白髪を長髪を弁髪にし、八字ヒゲと、あごヒゲを貯え、たえず黙々しく咳をし、たんをはき散らす。

息子の半年振りの帰郷にも嬉しそうな顔ひとつしない。私にも無愛想で先が心配になつた。「一緒に暮せるかな？」爺さんは長い間ヤモメ暮し。家事は妹がしている。しかしこの人は

親切を行動で示す人らしく、黙つて小生の為肉を切り、メリケン粉（貴重品に属する）をこねて、ギョウザを作つてくれた。私の破れたズボンをいつのまにかつくろい、落ちたボタンをヤクの毛で縫いつけてくれたりする。そのうち、はにかんだようなかすかな笑みを見せる様になる。速出をする時はリュックに寝袋を詰めてくれ、トウモロコシをいつて弁当を作つてくれる。みんな爺さんの黙々たる仕業だ。

若い時に一度カトマンズへ行つたとき、ソロクンブから遠くへ出たことはない。家をいろいろな所に軒持ち、土地やカルカ（牧場）もかなりあり富裕とみた。子供のうち二人はシエルバとして有望な前途を持ち、兄のニンマはエベレストで大活躍をして、アメリカまで招待され、ケネディと握手をしてきた。弟のミンマも有望なスタートを切つたところにも拘はらず、このオヤジ、なりふりをかまわず漂々としてすつとぼけたところのある好々爺。人望があるらしく近所の人達が絶えず出入して、父親と長い間話込んで行く。ソロクンブ一帯に「義兄弟」を作つているらしく、ミンマは道で知人に会うたび「私の父と同じ人です。」という紹介の仕方をするので、私は混乱した。

この父に千円札を見せたことがある。

聖徳太子をラマ（僧）、夢殿をゴンバ（寺）と説明すると深く敬虔にうなずいた。

老人は夕食後、ひとしきりお経をムニヤムニヤとなえる習慣がある。そんな老人をミンマはある日何か声高に叱りつけた。父は当惑した様な顔をして、お経を止めてしまつた。それ以後、私の前ではふつつりとお経をとなくなつた。

ミンマは恥かしそうに「私の父や妹は汚ないチベット人と同じ恰好です。何しろ、ソロクンブから出ないので、何も知らない。バカなんです。」と云う。きつとあの時「みつともないお経を止めてくれ、サーブに笑われるじゃないか。」といつたのであろう。ここにも都会を知つた若い世代のコンプレックスがある。

この父は12月末、何十年振りか、カトマンズへ出かけた。我々は再会した。父はカトマンズの大変な変化に驚いていた。近代的なカトマンズの街路で、父のチベット姿は異様だつた。私は世話になつた札に、カトマンズのある一流ホテルの食堂の夕食に招いた。白人ばかりの客の中でチベットの老人と娘は、好奇的になつた。老人と娘は真白なテーブルクロスを前に、カチカチになり、居心地が悪そうであつた。

スープのトリの骨を、磨き上げた床に捨られず、そつとタモトに入れた。給仕達は面白がつて我々のテーブルに、これみよがしに給仕する。老人が食後、合掌して礼をすると、白人達がニコニコと立上り、テーブルに寄つてきた。私は「大変お世話になつた方で、とつても良い人です。」とだけ説明した。可愛想に、老人はすつかりおびえてしまい、この夕食会は老人ととつて、甚だ気毒なものになつてしまつた。

数日後、老人は又テクテク歩いて、ソロクンプの村に帰つていつた。

＜食事ともてなし＞

カトマンズを出てから、徹底して現地の食物、水をとつた。その為か、よく下痢をした。ミンマでも南方の低地に下つた時は下痢をしていた。ネパールは水田が多いが、意外に地方では米が手に入らぬ。殊に今年は氷雨がふつて穂が枯れ、凶作で値が上つてゐるという。シエルバの村に入ると、ツアンバ(麦こがし)が主、それも麦から作つた麦こがしは上等すぎて手に入らず、ヒエとトウモロコシを炒つて粉にした「麦こがし」(代用麦こがし)がもつばら。シエルバの常食はこの麦こがし、それに自分の村でとれる唯一の作物ジャガイモとカブラをもりもりたべる。

私は数日代用麦こがしばかりですごしたことがあるが、この時は自分の顔がやせてキツネの様にとんがつた。米は御馳走で、年に四回しかたかぬ。私がゆくとこの貴重な米をたいてくれて恐縮した。スープの味つけは塩とトウガラシでヒリヒリするばかり、しかしなによりはました。コンブとカツオブシのない国で、トウガラシの役割は重大である。

ソロクンプに入るとミンマの知り合いが多く、村人達がてんでに声をかけて招く。「ミンマよく帰つたね。ちよつと寄つて行きなさいよ」といつてゐるのだろう。ミンマの心情を察して家に入ると、まず銀の美しいほり物をしたコップになみなみとチャン(白く濁つたドロク、米からとつたものが最上等、ヒエ、トウモロコシがこれに次ぐ。主婦達は接客用に必ずどの家も作つて貯えている。)をつぐ。礼儀としての杯のみほさねばならぬ。その前に、大げさに「有難う。結構です。」と遠慮してみせる。しかる後最低杯はのみほすのが作法。そのあと大ナベに一杯、ジャガイモをゆで、トウガラシをつけてもりもりたべながらよもやま話が始まる。時にはLPレコードの様な巨大なチャパティが出る。話題は人の名、アンダワ、バサン、ミンマなどが

出、時に遠征隊の名が出るところをみると、出稼にいつたシエルバ達の噂話を中心にらしい。私は一軒だけでも充分だつたが、次々と誘いがかかり、久し振りに帰つたミンマのつきあいの為にも断るわけにゆかず、4、5軒も入つたらうか。皆同じ様なもてなしで、夕方ミンマの家に2人とも真赤になり、腹ははち切れそうになつて、足どりも危くたどりついた。

その後もミンマとちよつと隣村に行くだけでいつも同じ様な憂き目にあう。しまいには、私はミンマに厳命した。

「いいか、俺はもう飲まぬ、くわぬ。お前は、サーブは具合が悪いといつて断れ。」しかし家人が私にしつこくすすめ出すと、ミンマはことわり切れず、一方私の厳しい目くばせの間にたつてオロオロしはじめ、とうとう「サーブ、どうか飲んで下さい。そんなに強い酒ではありません。ブリーズ、ブリーズ」と家人と一緒になつてすすめだし、私は又もや沈没してしまつた。ある日私は遂にカンシヤクを破綻させた。「のまんといつたらのまん。」私はミンマのすすめるチャンの器をたたきおとした。私はハツとした。皆、私の方をとがめる様な目つきでじつとみつめている。ミンマはペソをかいで落した器をひろつた。私は過失ということにして、

つきなおしてもらい、そんな訳で、私は村にいる限り、いつもホロヨイ気分、いつも満腹だつた。

シエルバは更によくたべる。仕事がないと朝から晩まで喰つている。一方腹わぬとなると、一日中たべずにあるく。喰いだめがきくらしい。

<12月16日>

ミンマに休みを与え、私一人でテシラチャブ峠えガウリサンカールを見に出かけたが、氷とクレバスにふるえあがり、あつさりひきかえす。いささか無理であつた。

<12月17日> ターミー

チューレ(4500)ナンバ峠へ向う。

<12月18日> チューレ

ルナク(5000)

<12月19日> ルナク ナンバ峠(5700) ルナク

<12月20日> ルナク ターミ

<ナンバ峠>

ナムチエから25Km北の国境の峠、峠自体が大きな雪田で、これから南と北に氷河が流れ下る。従つて峠に行くにはガレキの様なモレーンの中、クレバスのふち、林立するセラックスの横を抜けねばならぬ。露出した青氷の上

にヤクの糞を滑り止めにかき、糞の黄色い一筋がうねりながら峠に続く。将にクソ道だ。

氷河の両側には無数の小無名峰がそびえる。一人前に雪と氷をかぶり、 H_2 のミニチュアの様なものもある。ここにテントしてこれらを毎日の探ればさぞかし楽しいことだろう。

峠は5700、本来ならばピッケルアイゼンを持つべきだろう。しかしチベタン達は一枚皮のつるりとした底の長靴をはいてスタスタと氷の上を歩いてゆく。図体の大きなヤクが重い荷をつけて、一見無器用にのろくさく、しかし、着実に凸凹の激しい氷河の上を歩く。ヤクの通れない道などは滅多にない様な気がする。このヤクを輸入すれば北アルプスのどんな山小屋にも荷を運ぶことが出来る。あにく北アルプスはヤクの生活には高さが足らぬ。私はいつかこれを輸入してヤクの背にのつて後立を従走しようと思う。

ある日、ヤクの一群が国境めざして次々とたつていった。背にずつしりと穀物の入った袋を負い、耳には色とりどりの毛糸のふさを下げ(ヤクの持主を示す)、鈴をカランコロンと鳴しながら、静々と去つてゆく。ヤク追いの男は、毛皮の帽子に羊の毛皮の上着、長靴をはいて赤銅色に陽焼けした野性

的な若者。冬枯のU字谷を、ヒュウヒュウと口笛をふいて、ヤクを追う姿には胸せまるものがある。

かつてソロクンプの人々は、この峠を越えて、チベットとの商いをした。最近中共がラサとカトマンズを結ぶ道路を建設中で、このヤクの風物詩も重大な脅威にさらされている。

中共が侵入した時、亡命者の大群が、財産のヤクを何百頭とつれて、この峠を越えた。峠は大混乱で、沢山のヤクがクレバスに落ち、或は飢えて死んだ。今でも至るところに白骨が散乱しているのはそのせいだ。

<ナンバ峠 続>

私は何としてもチベットを垣間見たくかった。ことに「国境の峠にたつてチベットをのぞむ」という想像は私のロマンティズムを刺戟した。ミンマは幼時父につれられて何回となくこの峠をこえて遠くチベットのテイングリまでも行つた。今テイングリには中共兵が多数駐屯しトラックが沢山あるという。のみならず国境から3時間下つたところにすでに兵がいるらしい。氷河の悪路では3時間は目と鼻の先だ。

峠の往復には2日を予定して4日かかつてしまつた。無理もない、ナンバ氷河はゴジュンバカン氷河と並んでネ

パールヒヤールでも屈指の長大な氷河なのだ。一晩はモレーンの中で月光を仰いで寝た。ヤクの糞をもやし、ヤクの生肉をかじり、チャンをのみ、ハモニカをブブウふいた。ミンマの歌うシエルパの歌にあわせてデタラメの大声をはり上げた。月光の氷河は髪の毛がさか立つようなすさまじい美しさにかがやき、周囲の針峯は月世界の様だつた。こんな晩イエティが出るのかしら。

氷河湖やクレバスをぬいながら広々とした雪原を、ゆるゆるとのぼりつめるとヤがてゆくての空の色が濃紺から灰色に薄らぐ下、紫色のチベットの高原が広がる。ヒマラヤと対照的にチベットには雪のついた山は殆んどみえず茶褐色の丘陵がカスミの中に平和に沈んでいる。

私は峠に立つ。かつて標識が立っていたというのが氷河が飲みこんだのか、今はない。国境のない日本で育つた私は自分の足で国境を踏んで、いい気持だつた。このままチベットの方へおりに行きたい衝動にかられた。紫色の山なみの彼方にタクラマカンの大砂漠があり天山山脈があるんだなあ、えらく大きなことを考えていた。折しも4人の男がチベット側から荷をしょつて上つて来た。下りはこの4人と一緒にな

つた。ミンマと私は食糧と燃料がなくなつていたので、この4人からわけてもらい、イグルーの様に石を積んだ狭い石小屋で一緒にとまる。彼等は火ウチ石と簡単なフイゴをつかつて、しめつたヤクの糞をあつという間に大きなタキ火にしてしまう。塩の入つた茶を何杯ものむと全身から汗がふき出るほどあたたまる。

火うち石をためしてみるがうまく火が出ない。チベット人は私の不器用さに手をうつて面白がり、こうするんだよと教えてくれる。

彼等は裸になつて2人ずつだきあつて寝る。我々もその間にもぐり込む。暖いがノミの攻撃でねむれない。

テイッチー等のオーストリア隊は、このナンパ峠からチョーオニューに登っている。欧米人はチョクチョクくるらしい。日本人で以前に来た人を知らない。

ナンパ峠への地図(インド測量部、戦前の古いもの)は全く出たらぬ。実際は複雑におれまがり、地図の峠より東にある。

「山岳」に報告された雪男隊のナンパ峠の写真はナンパ峠ではない。ずつと下の無名のコルにすぎず通行は出来ないとのこと。

<12月21日> ターミーにて休養

< 亡命者 >

ソロクンプのシェルパの家に居候している別の一家族がいる。これが亡命者だつた。中共のチベット進駐以来、

氷河の国境を越えて逃げて来たチベット人達が、ソロクンプのあちこちに間借りしたり屋外にテントを張つたりして暮している。

夜になると、容貌魁偉な大男が私の泊つているミンマの家に現れて、ミンマの父と話し込んでゆく。家人は彼を上座に近く坐らせて丁寧に扱う。亡命者の頭だという。

亡命者と先住者の間に表立つた対立はない様にみえた。サマ部落では両者に反感があつたのと良い対照である。亡命者は、先住者、即ちソロクンプのシェルパの野良仕事の手伝いや、針仕事、機織などを請負つて僅かな手間賃を貰つて暮している。もつて来た財産の宝石、衣服、家畜などを少しづつ売つている様だ。日本の戦時中の疎民者、戦後のタケノコ生活を思い出す。

彼等は何百頭というヤクや羊をつれて、国境のナンパ峠を越えて来た。氷河のクレバスに落ちて死んだ家畜も沢山あるという。狭いソロクンプは時ならぬ家畜のラッシュにたちまち牧草

が不足し、或いは餓死し、あるいは棄て値でたたき売られた(羊一頭1ルピー=50円)。今でもナンパ峠への途中には至る所にヤクの骨が散乱している。「彼は昔金持でした。今は貧乏です。」という類の説明を亡命者に会う度に何度きかされたろう。

シェルパと亡命チベットとは区別がつかない。同じ人種だからだ。そのうちおぼろげながらつく様になる。亡命者はネパール語があまり話せない(殊に女、子供)。シェルパは子供でもネパール語が話せる。それから彼等の何となく所在なげな様子。子供達の衣服のボロボロな事。タバコをせびること(シェルパは物をねだらない)。しかしみじめたらしいところはない。陽気で気位が高い。シェルパは内気ではにかみ屋だが、この亡命者達は「ぼぼり、これが日本人か。支那人と同じだ。」とズカズカ傍に近寄り、正面から眺め入る。私のもち物を些細に手にとつて調べる。卑屈な所は微塵もない。カメラを向けると、女達はふざけてナベをかぶつたり、隔りの身振りをしたりする。一度面識になつて道で出会うと、手を挙げ大声で私に挨拶するのもこの亡命チベット人である。シェルパでこういう慣習しい態度をとるものは例外で普通は丁寧に頭を下げる。

シェルパは中共領のチベットに旅行する場合、パスポートが必要である。しかし奇妙な事に、これら亡命チベタンは自由に国境を往来するという。別にとがめられもしないらしい。このあたりの中共の柔軟な政策は単純な我々には理解出来ぬ。

亡命チベット人は、おおむね窮乏しているが、遠く南の方へ出稼にゆき、或いはチベットから中共製品をかついできて、小金を貯めているものもかなりあると聞いた。そのせいか、ナムチエパールには、made in Shanghai（上海）と記された時計、マモーピン、靴、マッチ、タバコなどがあつた。

しかし、すっかり没落して、村から村へ乞食をしてあるクヤオー（定住していないチベタン）の群に身を投じているものもあるという。

ブルテの部落にファッションモデルの様に、一さわ目立つ美人の娘がいた。（チベタンには時々、モンゴロイドとは思われない刻の深い色の白い背の高いのがいる。中央アジアか、西域の血が入っているのか？）。この娘はあるシェルパの家に入出して家人同様に振まうので、ここの嫁か、ときくと、ミンマはニヤリと笑つて、「みんなの嫁同然です。結婚はしていません。

まだ15才です」という。没落した家の娘の悲劇と合点したが、この様な運命は考えられぬことではない。ずつと南のジャンサという村に、スイス人が居て、窮乏した亡命者を援助している。この村には亡命者の粗末なかけ小屋が沢山あり、私が泊つたのもその一つだつた。スイス人は彼等に、食糧や医薬等を与え、彼等の技術を利用して、チベット絨タンを織らせ、それをカトマンズの観光客に売つて利益を分配してやつているときいた。

ある若者は、馬に乗っている所を中共兵に撃たれ、指を失つたといつて手を見せた。この様に中共兵を悪くいうものもあるが、その反対のものもある。道路が出来て、自動車が出山来ていること、病院や学校が出来たこと等。この辺の事情は複雑なものがあつて、亡命の動機も一律ではない様だ。

ある日、この容貌魁偉なチベット人の頭がダミアンという三絃の楽器をとりだし、つまびきながら高い声でチベットの歌を歌つてくれた。うたいながら目を細めて、はるか遠くを眺め、故郷をしのんでいる様に見えた。ソロクンプの人でこの楽器を弾くものは少いそう。

<アンテンバとカカア天下>

P 29のサーダーがアンテンバだつた。別れる時「ソロクンプへ来ることがあつたら、私の家に泊つて下さい」といつた。私がミンマの家を根城にして、あちこち歩き廻り、ソロクンプに来て5日後によりやく彼の家を訪ねた時は何故真先にこないと少々おかんむりだつた。

アンテンバはウイットに富んだ男。テヨタレイもヒヨウキンな男だが、アンテンバは世話物の様になにか人情の気徴にふれるところがあつた。ソロクンプに無数にそびえる針峰の名を尋ねると「サーブ達が来ると山に名がつかます。サーブが帰ると山の名はなくなります。」といつた様になかなか味なことをいうくせがある。つまりこのあたりの人は山にはトント無関心で、こまかいピークはただ遠征隊が来た時だけ名をつけて呼ばれる、ということだろう。文明人が時々一人よがりの名をみつけて悦に入る原因はこんなところにありそうだ。

彼が妻を紹介した時、「これは私のヤクです。年毎に肥えて、ミルクと子供を作るからね。」とやらかした。アンテンバ夫人は小柄な亭主に似わぬ大柄な女、たくましい胸をし、大きな目と大きな口をして、よくとおるアル

トでたて板に水としゃべりまくる。

しゃべりながら、いたづらをしている子供をひつばたき、茶をつぎ、食事の仕度になせつせとたち働く。

私は清川虹子という女優さんを思い浮べた。清川さんにおさげをゆわせて、チベット服を着せれば、まさしくアンテンバ夫人のイメージにびつたりである。

夫人がアンテンクに声高に何かいいつけるとアンテンバは「ヘツ」とばかりにすつとんできて、小生に茶をついでくれる。「アンタノきがきかないのね、お客さんに茶をついであげなさいノ」といつたのだろう。

うらかな快晴の日、アンテンバ一家は、南向きの庭に出て、針仕事や糸つむぎをする。縫い物は男の仕事である。子供がその間を走りまわる。アンテンバが袋を縫っていると、夫人がやおら亭主をおしのけて、何やらものしりながら、自分で縫つて見せ、アンテンバの膝をピンヤリとたたいていつてしまう。アンテンバはニヤニヤしながらへいへいといわれる通りにして、私に片目をつぶつてみせる。「あんたつて人はどうしてこり無器用なんだろう。こりするんですよ。」私はこんな会話を想像して、一人面白がっている。

次の日、アンテンバは私を案内して、

氷河につれていつてくれた。「カカアがね、サーブ一人氷河にやるのは危いから、ついていつてあげなさいついてうんです」と彼はカカアのせいにして恩を売らない。彼らしい気のくばり方だ。

アンテンバには、二人の息子があり、なかなか腕白である（8つと5つ）。私がゴムマリで遊んでやると歓声をあげて、イモ窟を走りまわる。近所のハナタレ共もゾロゾロ集つてくる。

さすがサーダーの息子だけあつて、餓鬼大将のカンロクをみせる。アンテンバ夫人は、私と一緒に走り廻る子供を目を細めてみているが、やがてタバコに火をつけてわざわざくわえさせに来たり、コーヒーを一杯もつてきてくれたりする。私はいやでも遊んでやらなければならぬ隙になり、日が暮れる頃はクタクタになる。子供は味を占めて朝早くから、シャープ、シャープ（サーブ）とおこしに来る。何事か私にしきりにあどけなく話かける。私は「うんうん」とあいづちをうつ。

2人共、学校にかよつている。ヒラリーがたてた学校で、教科書、月謝がただ。ヒラリーはソククンプに学校を3つ寄贈した。平家の一棟で、広い運動場があり、サッカーのゴールがたつている。もう一つ政府の学校があるが

これは月謝をとる。ヒラリーはこのほか、ゴム管でクムジュンの部落に水道をひいた。

子供がABCを私に書いてみせるのを、アンテンバは嬉しそうに、この子はクレーバー（利口）だという。果して大きくなつたら自分の様に山にゆかせたいと思つているのだろうか。危険な仕事だが。ちなみにアンテンバは文盲である。

<12月22日> ターミ

クムジュン(3900)

クムジュンにアンテンバを訪ねる。

途中シヨンプラ峠で霧が一瞬晴れ上りエベレストが浮び上つた。初見参である。体がふるえた。

<12月23日> クムジュン——

チャンナ(4500)

ユジュンバカン氷河に向う

<12月24日> チャンナ ——

ゴギヨの小丘(5600)

—— ポルツエ

<12月25日> ポルツエ——

ロブジエ(クーム氷河5000)

<12月26日> ロブジエ——

BC附近(5500) —パンボー

チエ

<12月27日> パンボーチエ——

テイアンボーチエ寺院——クムジュン

<ゴジュンバカン氷河とクーム氷河>

アンテンバが氷河を案内してやるといつた時正直にいつて私は困惑した。すでに私のミンマが案内をかつて出ている。二人共一緒にづれてゆくのは具合が悪い。この二人は部落が異り、異なる部落の間では暗黙の闘争があることをすでに見ていた。二人が小生の案内に妙なライバル意識をおこされては有難迷惑だ。(これは決しておろそかに出来ない問題である。シエルバを多数やとう時は部落間の対立を念頭におかねばならぬときく。シエルバのチームワークに影響するからだ。)しかしこれは杞憂に終つた。若いミンマは目上のアンテンバに「アジョ・アジョ」(兄貴)と低姿勢、アンテンバもこれはビジネスでないとサダー風を吹かさずに、二人共むつまじい。アンテンバはこれから先4日分の食糧を皆自分の家のたくわえから調達してくれ、私の荷までしよつてくれる。「すまないなアンテンバ」「いや家にいてもどうせひまでね」私は二人のシエルバの好意で冬の人気の全くないクーム氷河やゴジュンバカン氷河の奥まで入ることが出来た。夏はかなり奥まで放牧の為人が住んでいるらしく、カチカチのヤクの糞がある。ゴジュンバカン氷河は実に長大でシエルバの飛ぶような速足

にも拘わらず二日目になつてもギヤチユンカン、チョーオユーははるか彼方にみえるにすぎなかつた。この氷河はネパールヒマラヤで一番長いのだ。燃料のヤクの糞がなくなつたので先に進むのをあきらめ、ゴギョという大きな氷河湖の近くにある5600mの小丘に登つて大観した。チョーオユーの女性的な曲線と対照的にギヤチユンカンは将棋の駒の様な角張つた赤茶色の岩肌をそびえさせている。もうすぐ日本隊が来るが一体どこを登るのだろう。と心配になる。東方にはエベレスト、ローツエ、南はタウチョー、チョラツエー、西はガウリサンカール、ヌンブール、私はまさにヒマラヤの大饗宴の中にいた。

二日後私と二人のシエルバはクームアイスフォールと相対していた。私の足もとにエベレスト隊のベースキャンプのあとがあり、空かんやさびついたガラクタが半ば埋もれて散乱している。ラベルにはイタリア語、仏語、独語が記されており、どうもスイス隊のものらしい。頭の上にはエベレストが黒々と威圧的にあたりの山を圧倒している。まるで活火山の様に頂上からもうもりと雲を吹き上げている。ジェットストリームがこの山にだけつきあたつていなのだ。もの皆静まりかえつている中

でエベレストだけがすさまじく活動しているという感じ。

クームアイスフォールは各エベレスト隊が突破に最も苦心するだけあつてまるで製氷会社のトラックが転覆した様な狼籍振りである。これを見ると、のぼれない氷河などない様な気さえしてくる。背後には雪坊主の様なブモリ(7100)がそびえる。四人の独人が登つたルートは氷壁そのもので私は感嘆してみあげていた。

この荒れた氷河もアメリカのエベレスト隊が750人のポーターをつれて来た時野宿するポーターのたき火で賑つた。750といえばこのせまいソロクンプでは大変な数で女、子供もかり出され部落がカラツポになつてしまつたそうだ。

アンテンバは日課のお経をとこなえながら、モレーンの互隣の山の中を飛ぶ様に歩く。彼に遅れまいとして走るとゼイゼイ息が切れる。5500mの標高はまだ彼等の生活圏である、しかしヨーロッパアルプスの最高峰モンブランでも5000はない。

次の日の朝我々はティアンポーチエ僧院の庭に立つていた。僧達の朝の勤行の声をエベレストとアマダブラムがなかよく並んでききいつていた。

<イエテイ(雪男)>

「雪男はいるかね。どう思う？」

アンテンバはアイドンノウとするりと逃げた。利巧な男だ。私自身は理由もなくいないと決めていた。

ある日の夕方、一人で近くの氷河を散索していると、背後で妙な物音がした。私はギョツとして氷りついた様に立ちすくんだ。全身の毛という毛がバリバリと音を立ててさか立つのがよくわかつた。

おそるおそるふりむくと一頭のアヤクが鼻をならして立つていた。私にも原始的な恐怖の本能が潜在しているのだ。

以来、雪男については、実在するかどうかは別として素直な態度をとることにきめた。

氷河の新雪の上によく動物の足跡がある。なかにはずい分大きいものが一直線に延々とつづいていることがあり、大ていは古くなつて形がくずれている。

「これは何だね？」「アイドンノウ」

「イエテイかね？」「アイドンノウ」

ナンバ峠のモレーンの石の間や、クーム氷河の石小舎に泊つた時、イエテイの話をした。

「イエテイを見たら知らせてくれ。イエテイの写真はすごい値段でうれる

よ。つかまえてもしたら一生遊んでく
らせる。勿論お前にもお金は分けてや
る。」

「OK サーブ、何ルビー位もうか
りますか？」

「千ルビーかな、いや1万ルビーか
な。」

「OK サーブ ベリー グッド」
ミンマは張切つた。

パンポーチエ寺院はイエテイの頭皮
を保存していることで世界的に有名で
ある。アンテンバは慣れたガイドの様
に私が当然見るものと思つて寺にたち
よつた。きくと、この宝物の拝観料に
5ルビー(250円)いるという。

私はあつさりと断つた。アンテンバは
ここに来る外人は皆見るといつていた
が、私が断つたのをみて「ノー シー
ベター」(みてもつまらない)と我意
を得たりという顔をする。私はとにかく
儉約しなければならぬ。

イエテイを見たものはない。しか
し鳴声をきいたものは沢山いるという。

「でもサーブがいるとイエテイは出
てきません」「何故だ？」

イエテイは遠征隊の石油ストーブの臭
が嫌なのだそう。それから薬品の臭
にも敏感で避けて通るといふ。

「サーブはアムジー(医師)だから
薬の臭がついています。イエテイは出

て来ませんね。」

うまく理くつをつけたものだ。

雪男はつかまえるつもりで来るとみ
つからぬものらしい。むしろ雪男に無
関心な人が雪男以外のことに没頭して
いる時突然姿を現わす傾向がある様だ。
巧まざる心の前に現われるところは菩
薩の出現に似ている。神秘化される所
以であろう。

<12月28日> クムジュン

ナムチエ ターミ

ナムチエには人だかりがしていた。
遠征に行つていたシエルバが帰つて来
たのだ。

皆シヤレタ都会の服を着、山の様なお
土産をポーターにかつがせての凱旋で
ある。中にミンマの兄ニンマテンジン
がいた。彼は米エベレスト隊での活躍
の為米国に招待されケネディと握手し
て来たのだ。その夜のターミーは久し
振りに家族が皆揃い、老父は集つた村
人と上気嫌にしゃべり飲んだ。

私はニンマテンジンに米隊のことを根
ほり尋ね、装備をみせて貰い写真にと
りスケッチをした。米隊はスキーをウ
エタンクームまでかつぎあげたこと。
クームアイスフォールさえ突破すれば
あとは易しいなどの話がはずむ。

さすがにミンマよりも話題が豊富で

観察も意見も鋭い。しかし全く奢つた所はなく、自分の主人の様に私の世話をやいてくれるのには感心した。

<ソロクンプを去る>

いよいよソロクンプを去るという時、人々は私の首にカタをまいて平安を祈つてくれた。カタというのはさらした麻であんだ粗いスカーフでハワイの人がレイをかけてくれる様にチベットの人は別れの時これをかけてくれる。いろいろの人が次々とカタをかけてくれ、亡命者の親分といういかつい大男もかけてくれた。おかげで私の首は白いスカーフの中に深々とうまつてしまつた。このスカーフは途中峠を一つ越すたびに大声で「ヤヤ、ソソ、ヤヤ、ソソ」と呪文をとなえて道祖神のほこらに結びつけていく。そうすると旅が無事であるというのだ。

アンテンバ夫妻は下の村にいつでもあるからとヤクに私の荷物を積み、ペンパノルプと共におくつてくれた。途中ヤクがとんでもない方向に暴走してアンテンバは袍を喰つておつかへ廻り、私達は腹をかかえて笑いころげた。ヤクが立木に体をぶつけた拍子に私のリュックに大穴があいてしまつた。

うららかな快晴の日、はるか南の方え山が低く低く沈んでつらなり、私は

日本のことを思い出して早く帰らねばと心をせきたてた。4・5日のつもりが2週間の滞在になつてしまつた。

しかしまだ、みたいものは沢山残つて

いる。
シヨンプラ時に立つてふりかえると、エベレストとアマダブラムが青空に高々とそびえていた。再びまみえることはもうあるまい。

<ツエルバの葬式>

カリコーラのツエルバに宿を乞うと、昨夜9才の娘が死んで今夜とり込むが、構わぬなら泊めてやるという。夜が更けるにつれて村人が続々と集つて来た。ツエルバの葬式なのにライ族の人もいる。弓削の道鏡の様な精悍な大坊主がカネやデデン大鼓をドラマーの様に賑やかにうちならし、経を読む。時々人間の大腿骨で作つた笛を吹くがこれがまるでオナラそつくりの情けない音を出す。ひとしきり経を読むと、チャンを飲み、チーンと鼻をかみ、村人とおしゃべりをし、また始める。集つた村人は一向に神妙にせず、しゃべつたり笑つたり騒々しい。

一方娘をなくした母親の涙をいつばいかべながら客にチャンヤツアンバをくばり忙しく、氣丈に立ち動く姿は哀れをさそふ。これも悲しみをまぎら

す為には良いことなのかもしれない。明日のこともあるので私達は早々に納屋に寝に入つたが、ふと気がついて母親を呼び香奠に5ルピー与えると、気丈にみえた母親が涙をボロボロこぼして、しばらく私の両手をにぎりしめた。

一向に葬式らしくない村人のおしゃべりが夜半を過ぎる頃から、お経のさゝやきに変つた。まず坊主が御詠歌の様なものをうたうと村人がオンマニベメフン(ナムアマダフン)のリフレインを長くひつばつたふしまわして繰返す。

やがて全員のオムマニベメフンの大合唱が始まつた。寄せ来る怒濤の様にオムマニの合唱は高まり、低くなり、時々きらめく波頭の様に、ひととき高いテノールが合唱をリードする。まことに素晴らしい鎮魂歌である。私はすっかり魅せられてしまい、ドンコサックの合唱に似たものがあつた様だなどと思つているうちに、いつしか寝入つてしまつた。

私達はこのあと、まつすぐ南に下り印度との国境に向つた。毎日山から谷谷からの旅が続いた。オカルドウンガを経て山スンコンを丸木船で渡り、ある日小さな峠を越えると、もはや行手に山はなかつた。みわたす限りの地平線は私達がヒンドスタン平野の端にいる

ことを示していた。タライのジャングルを抜け、単調な平野を小馬と牛車で進み遂にラナ君と再会した。彼の宏大な邸に数日滞在した後、1月12日、ジャナクプールから空路カトマンズへ帰つた。このルートの後半は、遠征隊はおろか外国人もあまり通らぬらしく、私にとつては最もスリルに満ち、かつ新発見だと自負しているものだが、割愛する。

拝啓 お元気ですか

夕日が大きくひずんで平野の彼方に沈んでゆきます。暮残る地平線の上にヒンズー教の寺院のドームや、高いシユロの木立ちがシルエットになつてうかび上り、二頭のロブ牛のひく牛車が薄い砂ほこりをまきあげてゆるやかに夕日を追う。泥とワラの粗末な部落では、けわしい目をした真黒な村人が妖しくうずくまり、村はずれの池ではマンゴーの大樹が静かな影を落し、その下で水牛が水浴をしている。バザールの灯が細々と、ともる頃、どこからともなく、ドラムと笛の音が、冷えびえとした夜の大気をやぶつてきこえてきます。

私の今いるところは、ジャナクプール、インドの国境に近い町。私は一方の国境からもう一方の国境まで旅をし

ました。……………。

以上は当時私が友人に送つた手紙の一節、旅の終りの安堵感からすこぶる感傷的になつていたことがよくわかる。

私は今でも時々夢を見る。誰とも知らぬ2人の若者が高い声でシエルバの歌をうたいながらヒマラヤの丘陵を遠く、去つて行く夢を。2人共帰つて来るとは、永久にあるまい。

<カトマンズ木賃宿の生活>

○カトマンズには2週間いた。大阪から次の遠征の下工作の指令が来ていたから。

○シエルバホテルという中国人の経営する安宿、この中国人は青海省出身。釜ヶ崎のドヤより少しきたない。一部屋にチベット人シエルバ、ネパールクーリー、それにワンダーフォーゲルの米人、フランス人、独人がザコ寝して異様な光景。米人はシカゴの医師、仏人はアルジエーのコロン出身でアラビア語が出来る。米人は日本からホンダのオートバイ、仏人はヒッチハイク、独人は自転車。夜は近くのカフェーにたむろして猛烈な議論を始める。仏人のアンドレイは米人のウォルターを bloody American とよんでことごとくに

罵倒するが仲が良い。米平和部隊になんくせをつけ、ケネディの葬式が大ゲサすぎるといふ。アルジェリアの仏軍隊の残虐で逆襲されると、アンドレイは我々はアルジェリア人を皆殺しに出来た。しかししなかつた。これはヒューマニズムであるといふ珍妙な理くつをムキになつて云う。皆、ヒヤッ、ヒヤッと冷笑する。ウォルターと一緒にロシアの病院や、その他の病院を訪問した。ロシアの病院は女医が多く美人揃い、女医の一人が日本語の片言が出来て、私をつかまえてはなさない。強烈なポリウムと脂肪の臭にくらくらする。

○ウォルターのオートバイや、自転車でカトマンズの名所をたずね廻つた。漂々としたウォルターと、シャンソンをガナリ、絶えずふざけているアンドレイの姿は今だにカトマンズの想出の中に立つている。

○持ちものを売り払う。傘、ズボン、セーター、シャツ、カバン、フィルム、余つたレターペーパー、何でもどんどん売れて面白い、ウォルターが私の繁昌振りをみて、自分のレインコートを売りに出したが、さつぱり買手が見つかぬ。

○ソクンプであつたキルケン、アンダワ、アンナムギヤルが同宿。キル

ケンハ酒をのんでは私に「始めてお目にかかります」をくりかえす。忘れジョウゴだ。その他名もきかぬシエルバが続々と現れて何やかやと近寄り、いいかげんうるさい。

○アンドレイと一緒に日本まで無銭旅行をしようとさそう。一晚寝ずに考えた。「これがチャンスというものだ。」しかし断つた。広瀬の手紙で日本では次の遠征の準備をしているというからには、のんびりも出来ぬ。アンドレイは「後悔するなよ。」といつて去つた。果して私は日本に帰つてから後悔し始めた。日本では次の遠征などは、どこかに消えていた。

この木賃宿にとまつているシエルバの家族の中に5つ位の可愛い小娘がいた。いつのころから私にすつきりなつき私の姿をみると「ジャパニー サープ」といつてとびついてくる。腕にぶら下り、キーキー声を張り上げる。なつかれると悪い気はしないので空箱をやつたりハンカチをやつたりする。そのうち私が書きものなどしているそばに坐り込んでおとなしく何時間も過す様になつた。毎夕、この小娘と手をつないで公園を散歩した。ミカンを買ひ、公園の芝生で一緒に食べる。知つた顔が現れて冷かす。私は「俺の

フィアンセを紹介しよう。」と真面目な顔をしてどなり返えした。私はこの子に「モン ブチ」(私の可愛い人)という名をつけた。

この木賃宿には小さなきたない食堂があり、そこにたむろしていると実にさまざまな人間に出会う。ネパール人はもとより、シエルバ、チベット人、米人、独人、仏人、白人の女性、素性のわからぬインド人、支那人。ここのめしが安くてうまいからである。しばらくいるうちに少し顔がうれて来て、カメラ売却のあつせんをしたり、ワンダラーの道案内をかつて出たりした。ネパール人の大学生と議論もする。彼は東南アジアのインテリ特有のほこりとコンプレックスの奇妙な産物であつた。又、いろいろな情報を得ることも出来た。シエルバ達はここにたむろして何かうまい話はないかと待つている。私は観光客のガイドとしてシエルバを紹介したこともあつた。インド人のクリスチヤンと称する男が閉店後もねばつて、私に神の教えをといた。帰り道が暗いので懐中電燈を借せという。彼はとうとう返えさなかつた。

ネパール政府の外交政策は中共とインドとの対立の間で巧みにバランスシートをとりながらその間を泳ぎ両方の

国と友好関係を結び、両方の国から援助をとりつけている。インドにとつても中共にとつてもネパールは味方につけておかねばならない。

このことは東西両世界の援助合戦となつて現れている。カトマンズには米、英、ソ、中共の大使館があり、特にインドは広大な大使館と組織を持ちネパールからの外国向け電報はインドの電報局が一手に握る。

カトマンズは対立する国々の双方の人々がいるため、情報集めには恰好の場所かもしれない。私の友人はカトマンズは魔都になる可能性があると言つた。「カトマンズの黒い霧」そんな言葉が浮んだ。それほどでなくとも将来国力が充実し、政治的にまとまつて来ると、ネパールのスイスに似た立地条件から、カトマンズがジュネーブの様に、東洋に於る国際政治の舞台となることもあるかもしれない。

或いは緩衝国として積極的な役割を果すことも想像される。

以上は潜越ながら私の全く個人的なスペキュレーションだが、日本も時機を逸さないうちに早めに、布石をおく必要がある様な気がしてならない。すでに多数の日本人が民間人としてこの国に入り、業績を挙げつつあることは、改めて述べるまでもなからう。

私のこの様な旅を可能にして下さつた方々に厚く御礼申上ます。

乱雑な原稿を整理して下さつた後輩諸君有難と。

この記録は現役の誰かが再現してくれるということをおいて書いた積りです。いつか一緒にネパールへ行きましょう。

(田 村)



ヒマラヤの旅 —— 山と人と ——

はじまり

笠松卓爾記

昨年の事である。8月に入つて間もないある昼さがり、阪大山岳会第二次ヒマラヤ遠征隊の準備室で、彼の前に1綴じのパンフレットがひろげられた。「東京都立大学・大阪府立大学合同東ネパール学術調査隊」の計画書である。うわさは年にしていたが、我OUMCに比べて、何んと手際の早い事よ、と思いつつ、彼はベラベラと夏をくつた。「オイ、これは何つて事だ。え。医者の目処はついているのかい？」活字を追つていた彼の目にとび込んで来たのは、隊の構成の最後にかかれていた「医師一名、目下交渉中」という短い文である。改めて読みかえしてみると、何んとまあ、隊長は六八才の御老体。それだけではない、この計画はよくばつてゐる。「謎の山、シャルブ」に登頂後、約3ヶ月をかけて首都カトマンズ迄「東ネパールを横断旅行する」気らしい。おまけに、このドクターは学術調査の一翼をになわされている。

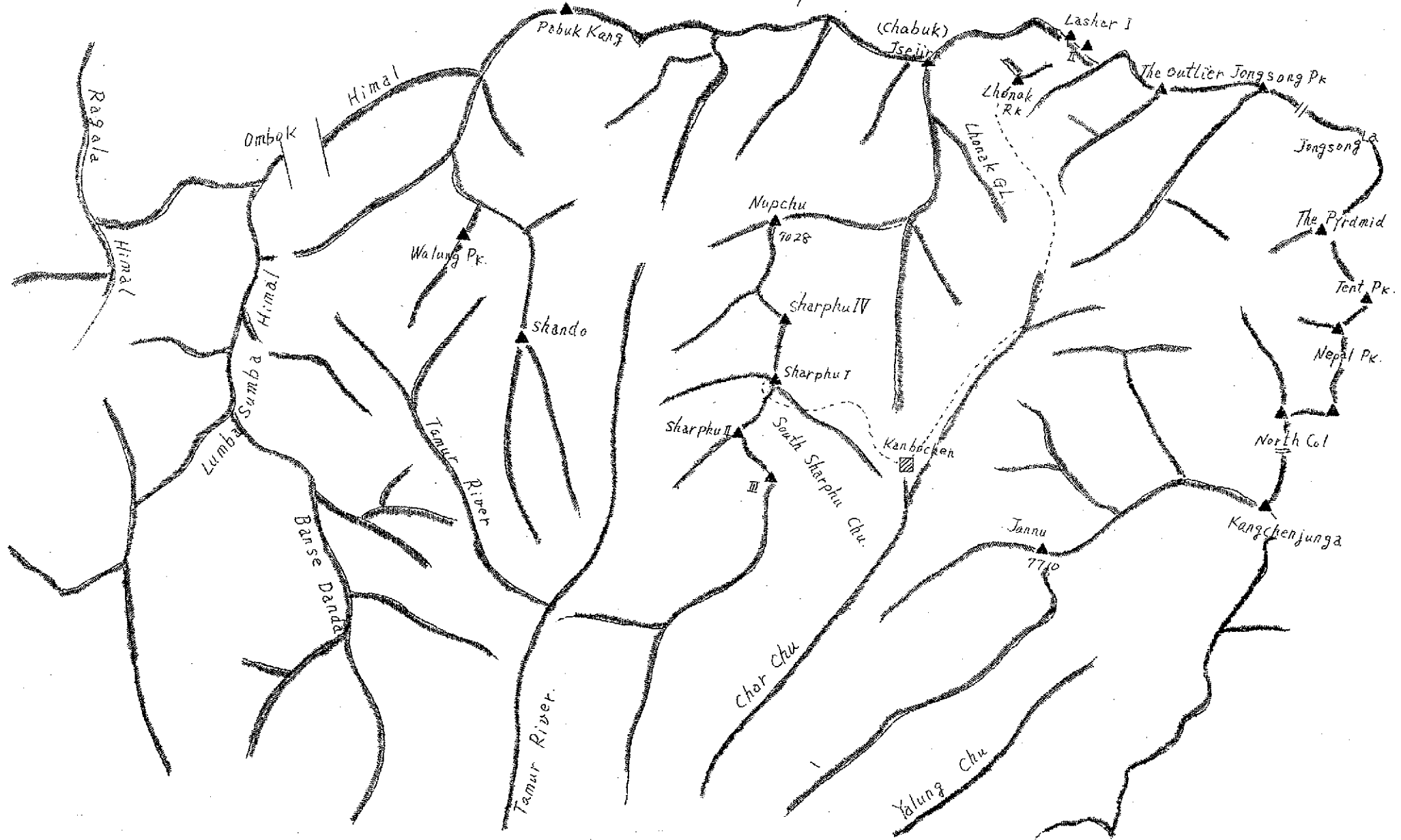
「なあーオイ、こいつあ出る所に出たら、『医者はいかんのか』つてきつときかれるぜ。まだあてはないんだろ

う？俺が行くつてのはどうだい。山でも使える医者若いのつては、やたらとほかにはいないぜ。」こうして、彼の第一回目のもぐり込みが始まつた。東京まで数度往復して1ヶ月程たつてみたら、彼はもう9月9日羽田空港発のAFの機上の人になつていた。インドに於ける熱帯医学の現状をみる為に、インド経由で台湾に向つて旅券を持つてゐる。そのくせ、合同隊の面々の隣りの座席におさまつてゐるではないか。

誰が自分を見送りに来てくれる訳でもなし、と思いつつ、あてもなく空港の送迎台の上に人の塊を目が追つた。この1ヶ月の間の事が点滅して、映像とからみ合いしماをつくる。……待つ者には偶然がとび込んでくるつてのはほんとだ。皆がチャンスをつくり出すのに努力している時、ウインクしてくれた女神にほれない、のはウソだ。思慮深さをよそおつて迷うのは、自分がほんとに彼女にほれてなかつたからだよ、きつと。彼とて故国に残してゆく人がいないでもない。しかしたつたの6ヶ月間じやないか。次は金の

② Sharphu 周辺概念図 (North-Eastern Nepal)

(Tatsumi 氏の書かれたものを転載す)



事だ。今度の持参金は、ちと高すぎた
かもしれぬ。といつたつてどうなるも
のでもない。もともと、この時の為に
アルバイトをしてたんじやないか。こ
ろんだと思えばいい、あとは石ころで
もよいから、どん欲につかんで来るだ
けだ。……。

この1ヶ月のあわただしさにすつかり
頬がこけてしまつたとはいえ、彼は
自分の健康に自信があつた。自己を過
去につなぎとめている綱を一思いにた
ち切つたとたん、少くともこれからの
半年間が将来にこれから飛び立とうとす
る大空の様に彼には思えて来た。
そこは広い。好天の日々だけではない。
しかし、自分の翼に全てを托して、自
己の命ずるままにやるのだ。又、そう
しなければ、落つこちてしまうぞ。
よしくたびれて傷つく事があつたとて、
その尻のもつて行き所は自分にしかな
い。こんな半年間の事が、彼の脳裡を
ひたして行つた。やすらぎを伴つた軽
い昂奮が、彼の身内に生れていた。
次年に人々のざわめきが高まつてゆく。
どう音がしたかと思うと、あつけなく
隔離されて大空にひろい上げられてし
まつた。

シャルプ主峰

今、7200mの頂上につつ立つて
いる。この雪壁にとりついたかぎり、
もう登る必要がなくなつたのだ。山の
頂に立つた者は、誰でも皆同じ事をす
る。同僚と肩をたたくき合う。ポケット
からとり出された日章旗とネパール国
旗とが、ピンケルの先で、北西風に流
されていた。一昔まえなら、頂上に立
つた者は感激にむせんだという。彼ら
はそうはしなかつた。しかし、純白の
頂を色染めたのは、彼らの緊張が解け
たからであらう。煙草に火をつけ、パ
ノラマを眺める。数々の巨峰が、全天
をおおう黒雲の下にじつと声をひそめ
ている。東にカンチエンジュンガ山塊
が不気味に肩をはつている。そこから
北東、北へと、固境稜線上に名峰が連
なる。トウインズ、ネパール・ピーク
テント・ピーク、ピラミッド、ジョン
ソン・ピーク、アウト・ライアー、ラ
シャル、ロナツク氷河の詰に座すチ
ャブツクも頭を出している。眼を足下
に転じると、主峰から1度大きく落ち
込んで連れるシャルア四峰の隣りに、
ヌブチユーが、その特長ある壁を4枚
横たえている。ヌブチユー氷河を渡つ
て、対岸の無名氷河の末端に、潮を發

見した。もし好天にめぐまれていたなら、この氷河湖はそのすばらしいコバルト色で、彼等を魅了したにちがいない。はるか西方の雲の下に、ルンバ・スンバ・ヒマールの山群の更にむこうに、エベレスト、マカルー、チャムランの巨峰がひときわぬき出ている。山が高く美しいというのは、こういう事なのだ。何にもまして人の心をとらえるのは、チベット高原への褐色の渾たる広がりであつた。そこでは、高さは広がりの中にもれてしまう。

彼らが1縮につれて登つた2人のシエルバは、若いサーブ連に握手を求めてから、静かに感慨につつまれている。エベレストやジャヌーの高所キャンプで活躍したシエルバ達、それよりもずっと低い7200mの雪を踏んでいるだけなのに。頂上、山に登る者にとつてそれだけで意味のあるものなのだ。

シャルブ主峰に全員登頂！

10月12日に、全員でカンパチエン村のベースハウスに入つて以来、第1登までわづか9日間の速攻であつた（3隊員、晴天の下）。翌23日には、3隊員と2人のシエルバによる第2登。1日の吹雪の後、25日にくづれようとす天候の中にもぐり込んで、残り全員が第3登を完行した。

弁当箱1杯のゆでたジャガイモで、

第1キャンプへの荷上げをした。荷はいつも25kg前後あつた。日本ではきなれた山靴を使つた。

6500mの第3キャンプでも、すかしたら向いの明るくみえる寝袋にねた。おまけにチャツクはじきにボロボロと歯がとんでしまつてるし、キルティング・コートを着たままで中は入れないという肩身の狭さ。きつとシーズン前になると特売場にならば夏山用寝袋を寄贈してもらつたにちがいない。

これ迄に日本から出たヒマラヤ遠征隊の内、この合同隊程オンボロ装備でしかも腹をすかした隊はなかつたかもしれぬ。それにもかかわらず、他の隊に勝るとも劣らぬ物が1つだけあつた。それは彼らの若さであり、登高への意欲であつた。これが全てである。絶望的な様相を現わしている東面をすて、南シャルブ氷河に入る幸運のゴルをみつけた事が成功の鍵であつた。

しかし、それを支え、冬將軍の先遣である風と競つて速攻を可能としたのは、10名の若い力であつた。又、サーブ連に競争心をいだいて、ついて来た若いシエルバ達のがんばりでもあつた。

高所順応に特別の注意をくばる余裕もなく、偵察が直ちに前進キャンプ設営につながり、登頂へとつっ走つた。ヒマラヤの1歩は重たい。三名の隊員

が高所影響に悩まされた。しかし、これは高山病と呼べる程のものではない、順応に要する団体差である。入山10日目、4160ベース・ハウスに再集結した時には、全隊員とも顔面の腫れが目立ち、ひどい者では眼があけられぬ程であつた。この腫れは、1両日の多尿の後にひいていつた。やはり彼らの肉体的限界に近づいていたのであろう。

ベース・ハウスの炉辺を囲んで、彼らは話し合つた。……識者は彼らの行動を無謀といい、たつた1度きりの経験からとやかく言うのは生意気だと考えるだろう。しかし無謀と呼ぶなら、こんな遠征隊が日本を出た事、それ自体がそうなのである。又、再現される事のない舞台での経験は、1つの試みとして、歴史の上の1出来事として扱われるべきものである。

1つの試行から、彼らはこんな答えを出した。「7000m級の山なら、戦術として速攻を考える事は可能である。登行用の酸素装備などいらぬ。ポスト・モンスーン期だつて相当ネバレルぞ。日本の雪山と同んなじ気持でとりくんでみようや。でも、元気のよい若い奴をたくさん集めたいなあー」……

ベース・ハウスのあるカンバチエン

村で休息をとつた後、彼らは4隊に分れて思い思いに10日間の小旅行をした。休息の期間約1週間は丁度天候がくづれていた。

ヤルン氷河に入つた連中は、たつた2人でタルン・ピークの頂上直下まで達つした。吹上げてくる強風は、疲れはてた2人の判断を迷わせ犠牲を強いようとした。カンチ氷河に入つた1隊は、カンチ北面をはじめとして、多くの美しい写真をとつた。1日で渡り切れない氷河は、ヒマラヤの大きさを彼らに教えた。もう1隊は、シャルブ主峰の北につながる4峰に近づいた。

11月のカンバチエン河を渡渉して、対岸から南シャルブ氷河を観察した。最後の1隊はロナツク氷河に向つた。2日間の有効日数では、チャブツク・ラを越え、チベット領に百歩足を踏み込もうというものはたされぬ夢であつた。しかし、彼ら3名の内の1人は、シエルバと共に6500m前後の峰に2度立つた。

マガール族の村・シツカ

シツカ村の裏山には、大きな池が1つある。この村の長老達のひい祖父さまでさえ、まだ生れてなかつた昔の事である、この池に女神の亡姉妹がにぎ

やかに暮していた。彼女らはアンナブルナやダウラギリの山塊にかかる雲をながめて、自然の様相が変転してゆくのを知った。シツカ谷の全空を支配する男神は我儘で、毎年冬も半端をすぎると不機嫌となり生贄を求めた。この不機嫌がこうじると、春の訪れが遅れるだけではすまなくなり、早魃になる。早魃がおそいかわり、森の樹々や野獣達がうえる時、女神達はきまつてブジャを催し天の神に祈をささげた。

女神達の捧げる祈に招きよせられて、はるか北のかなたムスタンからムスタン大王は黒雲に乗つてやつてくる。

東のかなたカンチエンジュンガの峰々に住む神々も、この女神達の声を聞きつけてはせ参じる。遠来の神々は大声でどなる。「お前はこの地の支配神であるのに、どうして犠牲ばかりを求めなのか。土地がやせてしまつてもよいと云うのか。女神達や森や獣達をいとおしくは思わないのか」戦いは続き、その刃の音は雷鳴となつて大地をゆるがす。いやましに高まる女神達の祈に力づけられたムスタン大王の軍陣に凱歌の上る時、勝利の雷鳴は一段ととどろき、福妻は栄光の使者として大地に送られる。いじわるな支配神が頭を垂れる。その指の間から押しこめられていた水がもれ、視界をおおつて雨が降

りそそぐのである。

ある年の事、早魃はきつかつた。ヒマラヤ中から名だたる神々が呼びよせられて、この気まぐれなシツカ谷の支配者と戦つたが彼をやつつける事はできなかつた。祈りに疲れ切つた7人の女神達がふと気がつく、彼女らの生の糧である池の水はもうほとんど消えうせ、底をのぞかせんばかりになつていないか。女神達は車座になり話合つた。彼女達はこのシツカ谷を去り新しい天地を求める事に心をきめた。この相談の間中ひつそりと、姉達が口々にわめくのを聞いていたピッコの末娘が悲しげにつぶやいた、「私は歩けないから、姉さん達とは一緒に行けないわ!!」わづかばかりになつてしまつた池の水を末娘に残して、女神達は旅立つて行つた。

末娘が一人、かいがいしく又物淋しげにこの池を守る日々が流れた。太陽が昇り沈んだ。それはもう何度みられた事が知れない。一人ぼつちのピッコの女神をあわれんで、天の大神が庇護したのでさすがにいじわるな男神も手出しができなかつたのであろう、ひどいひでりは2度とやつて来なかつた。シツカの地は緑をとりもどし肥えていつた。

そこへ、マガールの民が侵り住む様

になつたのである。彼らは地を耕し、
麦やとうもろこしを蒔いた。酒をつく
る為にヒエも忘れなかつた。水牛や鶏
を育てた。土とニガラ竹とで壁をつく
り円い家をいくつも建てた、カヤをふ
いて屋根とした。

マガール族の活気がシツカの地をつ
つみ、春になれば紅のシャクナゲが女
達の髪を飾つた。人々は、あのピツコ
の女神をシツカ村の守神としてあがめ
た。ほんとうはもうシワだらけのお婆
さんになつていたにもかかわらず、人
々はこの女神を「ピツコの末娘」と呼
んで親しんでいる。身体中に刻まれた
数えきれない程のしわの為か、この守
神様も時々ふさぎ込む事があつた。そ
んな時には、村人たちがより集まつて
プジャを催し祈りを捧げる様になつた
……………。

ポカラからムスタン地方に旅する人
には、二つのキャラバン・ルートがあ
る。一つはマルシヤレデイをさか上り、
アンナブルナ連嶺の北面をまわり込ん
で、聖地ムクチナートに出る街道であ
る。もう一つは、マチャブチャリの異
様にひかれつつ、その南面を西にぬけ
て、タトパニでカリ・ガンダキにぶつ
かる道である。ここから先は、カリの
流れが旅する者をチベット高原へと導
いてくれる。シツカ村はポカラから後

者のルートをとつて、3日の行程にあ
る。ビレタンテイでモデイ・コーラを
渡りシャクナゲの原生林をくくりぬけ
るとゴレパニ・パンジャン(峠)に立
つ。木間から雪煙のなびく銀の肌をみ
せてダウラギリの雄姿が望まれる。シ
ツカ谷に導く道は段々畑の斜面を切り
ゆるゆると伸びてゆく。

村の入口の台地にある小学校をぬける
と、2000m弱の高度にシツカの家
なみがある。

1月も上旬のある午さがり、K氏が
連絡係のH.B.とサーダーのD.T.と
一緒にシツカ村へもどつてみると、一
面識もない日本の青年が訪ねて来てい
た。彼は川を一つへだてた対岸の斜面
にひつかかっているバンクタル村に
昨日から泊りがけて出かけていたのだ。
それにしてもこつけないのは、はじめ
て会つた時のこの青年の身なりであつ
た。眼鏡をかけたり髪やヒゲが伸び放
題なのはわかるとしても、その靴のぶ
かつこうを事といつたらない。外に手
に入らなかつたから、カトマンズでシ
エルバ・ホテルの住人から買つたとい
うキャンパス地にゴム底の編上げ靴。
素足にオーバー・シューズをはいてい
る様にぶかぶかだ。首に真赤なスカー
フを捲き、ククリ(ネパール風のナタ)
を一丁しぱりつけたルック・ザックを

背負つて一人で歩いている伊達姿を思い浮べておかしなつた。彼は誰に對する時にもそうである様に、にこやかにこの青年をみた。K氏は青年に手をさし出しながら「やあ、よく来て下さつた。実際、皆で笑つてるんですよ。ガンサ村、ここから1日ばかりカリガンダキをさか上つた所ですがね、そこにがんばつてるカンパの連中(ダライ・ラマの兵士)のまねでもあるまいに、まるで我々この街道筋に網をはつてるジャパニーズ・チエック・ポストみたいですよ。これ迄にも、アメリカの平和部隊の連中がこの辺に遊びに来たついでに一晩議論をふつかけていつたり、ヨーロッパから放浪して来た建築屋の青年2人づれとか、そういう彼らはこれから日本まで足をのばすと云つてましたね、それに君の友人のH君も来てる。北大のラルカンカール隊のメンバーも帰り道に立寄るつもりらしいんだよ」

彼「私の方はまつたくのとび入りでして、……。」

K氏「いや、遠慮などせずに、時間のあるかぎり、ここにいて下さいよ」

「所で、来た早々なんて頼みにくいんだが、命にかかわる事なんでネエー」

彼「何ですか、一体？」

K氏「ここからよく見えるでしょ、あの密集家屋の村、あそこもマガールの連中なんだが、そこにひどい火傷をした女の子がいてね、もう9日間もたつてるのにほつたらかしなんですよ。我々全くの素人で、何んとかしてやりたくても手が出なくて……。」

彼「イヤ、Hの奴しやべつてしまつてるのか。ほんとを云えば、東ネパールでやつてきたニセ医者稼業にもうコロゴリなんで、その事はだまつてるつもりだつたんですがネー。もつとも、ちよつとした器具と薬の少女は、ザックにかくして持つて来てますけど」

K氏「君も疲れてるだろう、明日でも1度みてやつてくれないか、ここから2時間足らずでパンクタール村までは行けるよ」

彼「いや、そんな状態なら今からすぐに行つてみましょう」

K氏「そうしてくれるか。ありがたいネー。それじゃ早々だけど、1泊2日の出張を命ずつて事にしようか。こうして彼のシツカ村での第一日は始まつた。これは又、彼の第2回目のもぐり込み作戦の開幕でもあつた。彼は2月末、華やかな村中をあげての見送りをうけて、バラ・サーブがさつ

そうと馬上の人となるまで約2ヶ月たらず、このシツカの谷にくだした。その間、彼の日々は多忙であつた。シツカより1つ下にあるチエトリ一族の村、ガラとバンクタール村、それにシツカ、この3村の間を彼は1週間毎に巡回した。2百件以上もの診療に応じたらうか。2度ばかり小旅行も試みた。1つは、バラ・サーブ1行に加わり、カリ・ガンダキを下り、モデイ・コーラを上る10日間の調査旅行である。もう一つは、許可書なしの呑気な1人旅。カンパ族の私設チェック・ポストをくぐりぬけ、タコーラ地帯に入る。トクチエの町をすぎ、半砂漠の褐色に展開するパンチ・ガオン地帯を下流風に吹かれつつ、ジヨムソン(チエンサンパ)まで足がのびた。

東ネパールでの3ヶ月に満されぬまま彼の心の中にとぐるを巻いていたものが、今ははつきりとわかつた。不本意ながら合同隊の残留組からはづされてしまつた事に対する憤懣も消え失せていた。もし、K氏とシツカ谷にすごした2ヶ月がなかつたら、彼の描くヒマラヤは白銀一色にぬりつぶされていた事だらう、しかも冬期こそは「ヒマラヤン・エクスペディション」の季節であるとも知らずに。(農閑期にくりひろげられる結婚合戦)ヒマラヤの民

がもつ生活力は、彼に強い印象を与えた。金持ちがおれば、貧乏人もいる。長男が生れたといつてはふるまい酒を出し、不作の年であればなお一層熱をこめて村祭を行う。娘達の明るいY談もあれば、淡い恋心もある。どうしたら急増する人口を養つてゆけるかと議論をたたかわすパンチャット(村会)の集りが開かれるかと思えば、隣村のワンマン村長はひそかにタライの開墾地に逃げ出す事もよみ忘れぬ。病気の子供を持つ親はドクターから薬をもらうだけでは満足しない、ブジャを催しヒマラヤの神々の効しを願う。彼らは全智を傾けて自からの欲望を追うのだ。日々のきびしい労働がある。若者と嫁達が炉辺を囲む夜がある。酒がまわる程に手太鼓の音はさえ、澄んだ歌声は石積み壁をつきぬけてひびいてくる。愛が唱われ、タバコからミカンまで歌になる。人が生きるために必要なものは、全てここにある。2月も半端をこすと、ダウラギリの頂にかかると雪煙は姿を消し、代りに絶える事なく浮雲がその前面を通りすぎてゆく。

< 後 記 >

昨年9月中旬から今年の3月中旬まで約半年間、私はネパールに滞在しました。最初は都大・府大合同隊の一員として東ネパールに約3ヶ月足らずすごしました。1月8日から2月28日末日までシッカ村に暮しました。カトマンズには年の暮14日に出て来ましたが、その夜神原達氏宅でのパーティーに招かれました。そこで、佐々木高明氏(立命大・地理講師)に会い、川喜田二郎教授(東工大・文化人類学)が来春3月までボカラの近くのシッカ村に腰をすえていられるという事を知りました。佐々木氏が冗談に「川喜田さんも一人で、シエルバや連絡官の青年相手では少々淋しかろう」といつたのを真にうけて、その場で勝手に居候をする事に決めてしまいました。川喜田氏の組織された今回の遠征隊は「稲作文化の研究」(Japan Anthropological Expedition on Rice Cultivation, JAERC / 63) と銘うつて昨年の6月以来、カリ・ガンダキ河流域を調査しています。私がシッカ村を訪れた時には既に、他の隊員の方々は帰国されたり、あるいは又、今回の遠征隊の分遣隊としてインド・ビハール州の学術調査に移ろうとしていました。一刻も早くダウラ

ギリのみえる地にとんで行きたかつたのですが、私のビザの不備からネパール国内旅行の許可をとるのに手間どり、3週間をカトマンズのシエルバ・ホテル(宿代1日1ネパール・ルピー也)にたむろする事になつてしまいました。シッカ村には1月8日から2月28日まで暮しました。一人でカリガンダキにそい、タコーラ地方をボロボロと歩いている時、すれちがう旅人に片言のネパール語でいつたものでした。

" Ahile mero Sathi Sikkhama dherai chai ,

(今、俺の友達にシッカにたくさんいるよ)

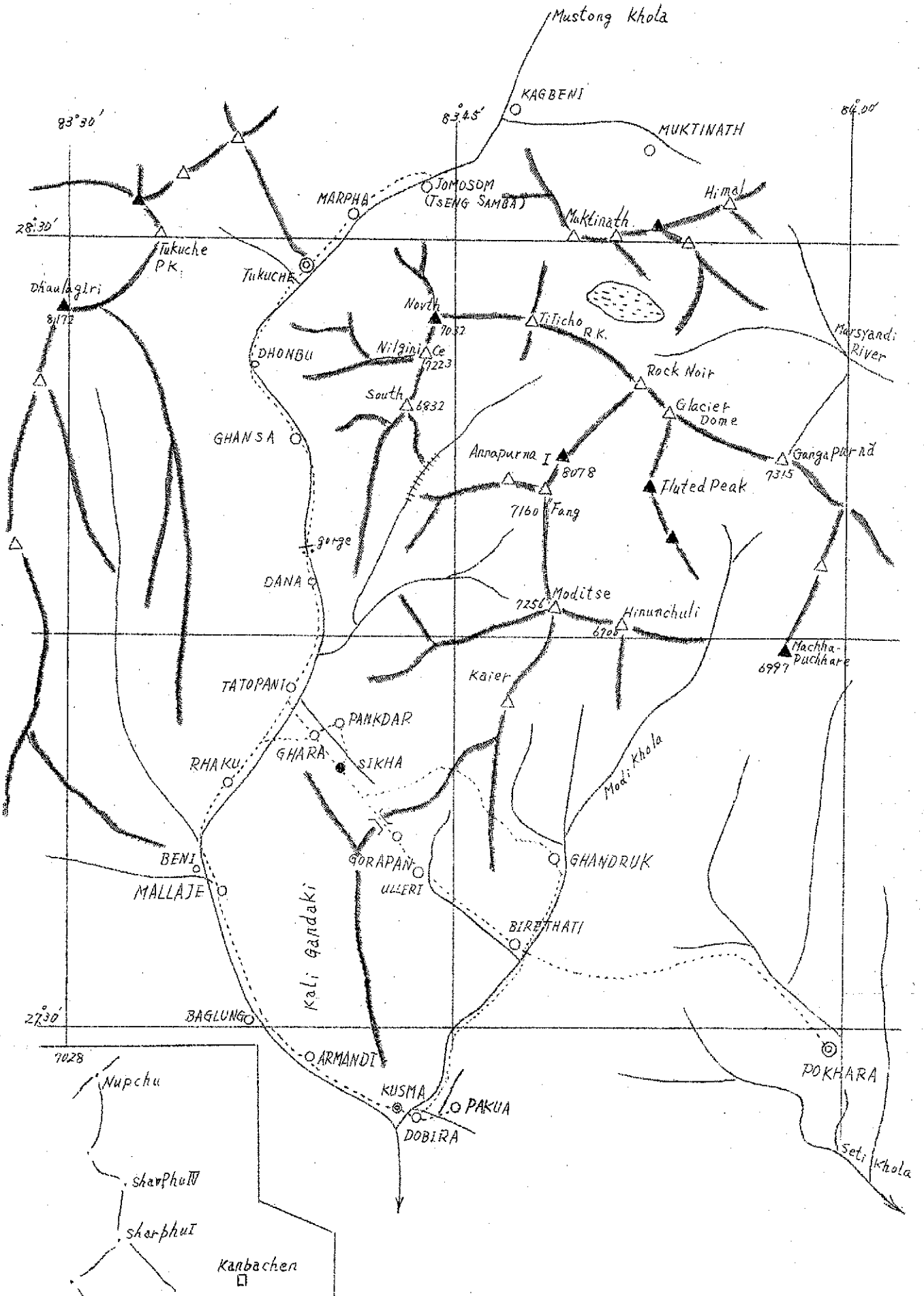
私の今回のネパール行は、全く私を個人的に支えて下さつた山岳会諸兄のおかげだと云つても過言ではありません。その御好意に対するささやかなお礼と、又これからヒマラヤ行を計画されている若いO.B や現役諸君のはげみにもなればと思ひ、この一文をかきました。今後機会がありましたら、この六ヶ月間のメモをひつぱり出して、おもしろそうな話を二、三気らくに書いてみたいと考えます。

(笠 松)

Dhaulagiri and Annapurna

(薬師さんの書かれたものを転載)

①



日 誌

日 付	天 候	泊 場	
9月9日	①→●	Russel Hotel Cal	東京国際空港発, AF, Calcutta 着.
10	① 37.8℃	同 上	
11	●→◎	同 上	三井物産招待の昼食会(阪大隊と一 緒に)
12	●→①	列 車	Hawrah St - via Manimari Ghat - Togb- ani 荷物と一緒に汽車の旅
13		Biratnagar Himalayan Hotel	夜、Jogbani 着。荷物を駅にあ づけ、Nepal 入国
14	○	同 上	Biratnagar Cnstdoms 出頭 入国手続のため Togbani Cnstdoms 出頭, 出 国手続のため
15	●	同 上	ンエルバが勢ぞろいした。
16	○	Dnaran Bazz- ar British Camp	Dharan の British Camp (通称 Malaya Camp) にあ いさつにゆく。すすめられるままに、 全員 officer 待遇でやつかひに なる。こいつが高かついた。
17	◎	同 上	終日 山際のガス切れず 同キャンプ附属の病院を見学する。

9月18	○	同 上	} 通関のためBirat.~ Dharan 間を往復す(バスで2時間, Malaya Campのジープで40分間) 或いはDharanにて食糧その他購入
19	①②③	同 上	
20		同 上	
21		同 上	
22		同 上	
23			
24		Himalayan Hotel British Camp	Biratの病院見学 通関及び買物完了する。
25		"	隊長 帰国の途につく。
26		"	全隊員の健康診断(一般、予防注射血液型)
27	●	Dharapani村	キャラバン第一日 ポーター75名 Sangri Bhanja峠経由
28	●	Dhankuta町 小学校	キャラバン2日目 小雨にぬれた美しい町、人口5千人 小学校(生徒250, 先生15)、 高校、病院、各一つ在高度Ca1200m、Dharanからの電話線の終点役所もある。
29	●→①	Sindua村 村端の一軒屋	キャラバン3日目 ガスにまかれた屋根筋の道 一瞬、西方にマカルー、チャムランの巨峰をみる。 「現地診療」開店記念日
30	◎	Panch Pokhariの草原にテント張る	ポーターだだをこねる。 キャラバンの列は伸び、トランシーバー活躍す。

10月 1日	☉→☺ 雷雨	Chan Pokhari 尾根上の草原	昨夜から今朝にかけて雨にたたかれる。ナイケ(ポーター頭)は急用にてDharanにひきかえす。隊員の健康も不調。高度 約3000m
2	☉	Gorje Gaon の民家 (シエルバ タマン、グルン の村)	終日雨 強風にたたかれる。荷をなげ出すポーター出現。 農かな村。
3	☉→☺	Doban 村	Tamur Khola をこえて対岸にTaplejungを望む。 Dobanへの下り斜面に隅なく広がる段々畑、ポーターの半分をいれかえる。
4	①	Kokuli 村の端 (Sawaden)	釣橋流失のためTaplejungに立寄れず。Tamur Khola 左岸通しに進む。Mewa Khola との出合も橋が流されていて、半日損をする。Tamur Khola をこえて向うに、目よりも高くTaplejungが望める。チョータラの続くネパール二級国道。
5	○	Mutra 村の台地に テント	Jannu見ゆ(南面)、美人も学術調査もほつほり出して望遠レンズをかまえる。村人はKumakaharna Himalとよぶ。
6	①	Shaphchung 村 の軒先	農かな水田をもつMamke村をこえて。おぼろ月夜。頭に来た隊員の一人が、じやれるリエゾンをなぐりつけた。

7	○	Lepchung村 の民家 (Bhote村)	石壁作り二階家、傾斜のゆるい割板 の屋根の上には「ロキシー、チヤン あり」とばかりにタルチョーがなび く。 チョータラも消える
8	○→	Dabre Bhan- san の二軒家、 軒先	Lelepで亜熱帯との別れ。Wal- ungchnng Golaにゆく道との 分岐点で竹橋を渡ると、後は Kombachen河左岸の高捲が始る 頭に来てるDr. 薬袋をみる毎にイ ヤーナ気分。(V字谷)
9	①	Yangzo 村 (Bhoteの村)	本日患者なし(初めての事である) キャラバン先頭と尾端との差は3時 間。このすぐ上流に滝が一つあり、 そこから先はU字谷となる。
10	①	Ghunsa村 (Bhote)	キャラバン14日目、最終日。 Yangzo から半日行程。 Dharan ポーターは5名になつて いた。Indian Check Post あり。村人は20余名を残して、収 獲に出はらつている。 物価は昨年 of 倍。高度3380m
11	①	Ghunsa村	偵察隊三名 Kambachen のB.H 入り、Ghunsa 村では休息と荷物 の整理
12	◎	Kambachen 村 のB.H (4060m)	全員BH入り、数名の隊員に高所の 影響がでる。第一次偵察隊はSha- rphu対岸の約5000mまで達す KambachenはGhunsa の夏村

10月13日	①	同 上	4200m前後から雪が付き出して いる。 三隊に分れて第二次偵察及順化行。 内一隊はSharphu 主峰東面直下 (5000m)に仮C Iをつくる。
14	○	B.H. am.7, -4℃ 西風	第三次偵察を隊出す。仮C Iの隊員 は尾根を越えて西面に入る、南シャ ルプー氷河の発見。 コックとリエゾンは食糧買出しに Walungchung に向う。 隊全体としてはSharphu 登頂へ の見通が明るくなる。と同時に「誰 が頂に立つのか」??
15	①	B.H.	南シャルプー氷河と主峰との関係が はつきりする。偵察及び順化期間終 る。夕食后、B.Hにて作戦会議。短 期決戦で南シャルプー氷河にルート をとる事に決定。全員登頂を目標に ポツカする事。全隊員シエルバを三 隊に分ける。
16	◎	B.H.	仮C IをC Iとし、ポツカはじまる 弁当箱一杯のゆでジャガイモと紅茶 の昼食。荷は20~25Kg。
17		C I (5,000m)	C II設営, C Iへの荷上げ (5,500m) C IIは雪のプラトーの端
18	① ◎	B.H. 日毎にガスがふえる	C IIへの荷上げ (15~20Kg) Mail runner 第一便が出発 (キッチン ボーイの二人組)

10月19日	○	C I Nuponu 氷河をふ き上げる風はきつく なる、ガスが切れる と青空	C I への荷上げ C III への偵察, C II, C I への荷上 げ、C I 附近の雪積量は減りつつあ る。第二期高所影響が数名の隊員を 悩ます。
20	○→⊗	C II	C III へのルート工作, C II への荷上 げ。
21	①	C II	C III (6000m) を設営。主峰か ら西に下りる尾根上のコル。
22	①	C III Tannn にシラスか かる。南西の風	第一次登頂 (三隊員)
23	②	C II 高ぐもり	第二登 (三隊員, = シエルバ)
24	⊕	C II	各テント停滞
25		C II	第三登 (四隊員, = シエルバ)
26	○	B.H.	撤収作戦 C III, C II 撤収完了 全員 B.H. に再集結
27	○	B.H.	撤収作戦 C I 撤収完了 Yak 肉のたべすぎ
28			休息、気抜けとちよつぱり充足感 ヤク事件突発して、食糧買いと電報 打ちに Ghunsa に下りていた二隊 員とシエルバ一人がまき込まれる。
29	○	Ghunsa 村	Indian Check Post に同居 している。 Commander of Royal Nepalese Army と交渉に入る

10月30日	⊗	同 上	交渉難行 リエゾンのバカさかげんは頂点にくる。
31	⊗	同 上	Mail runner 帰着。バナナと手紙
11月 1日	⊗		Walung chung Golaから Police commander くる。
2			ヤク事件のおかげで、村人と隊員の間以前より近づく。
3			
4		Kambachenの B.C Pm	ヤク事件の最終解決はKtd にもちこして全員Kambachenにもどる
		{ テントの外-12℃ " 内+ 8℃	
7	①	Lhonak	mail runner 第二便出発。 四小隊に分れて、周辺の氷河調べに入る。Lhonak 氷河隊三隊員と一シエルパ、ポーター(チベット女三人)
8	① ⊗		
9	①	夕方はきまつてガス	ポーター二人帰えす。
10	①		Teishima PR の北側で Lhonak 氷河に合する 無名氷河のサイド・モレーンにテントを張る。
11	○		} Chabuk La を求めてゆきつけず
12	①		
13	①	Lhonak	
14	⊗	"	

11月15日	㊟	B.C.	食糧につきはてて腹ペコ、Lhonak ~Kambachen 間4時間。 Yalung 氷河隊を除いて、残りは B.C 再集結、NHKの海外放送を つかまえる(筑豊落磐、東横線の事 故)
16		B.C.	南米向日本語放送キャッチ、「読売」 がシャルプを大きく報じた事を知る 残留隊メンバーについての話合まと まらず。
18	○	Ghunsa	全隊がGhunsa 村にひき上げる。 村端の草地にテントはる。
19		"	会計と残留隊メンバー選考で大いに もめる。英雄の如き歓迎をうけて二 人組のmail runner がもどつ てくる。
20		"	村人に酒をふるまい一緒に踊る。 府大二名、都大二名の残留隊が決定 Drはそのメンバーからおろされた 複雑且単純。
21	㊟	Yangz0村 (Ghunsaの冬村)	午前中テントの周りに交換市場が開 店。Drは診療に多忙で商売できず 先帰り組のキャラバン第一日目。
22	㊟	Amjilessaの 一軒屋	第二日目。ポーターはGhunsa 村人、乳飲子を背負つた女までまじ る女と娘の大部隊、男はほんの数人
23	①	Lelep 村小学校	往きには、道をかくしていた麦畑も 今は刈あと。桜に似た花の咲く亜熱 帯に帰えつて来た春山下山の時の様

11月24日	○	Tiwa村の 手前 刈痕	Taplejungに立寄るべく Sango 村で竹橋を渡つて Tamnur 左岸に 出る。途中診療のために遅れて、月 夜の一人歩きとなる。ケネデー暗 殺事件を知る。ここまでくると山の 事はすっかり忘れてしまつた。
25	①	Midrung 村の 刈あと	Walungchung Golaにゆくと いう英国青年に会う。 ネパール語を自由にあやつり、ポー ター5人連れている。 Tamurの河べりに畑が続く、豊か な村々、夕食後残火を囲んで、チベ ット娘と歌う。単調であるが心にく い込んでくる歌事。
26	○	Taplejung の 小学校庭	キヤラバン六日目。のんびりとした 山旅、チベット人の家族旅行に我々 がつきあつてる格構。もぎたてのミ カン4ケで1アンナ(1/4ルビー)也 Taplejungこの地方の中心都市 交易の基地、軍隊、警察、裁判所、 Panchyat Developing Centre, Health centre, etc. 小僧が英語で話しかけてく る町。Newar商人の町。ここから 手紙が投函できる。
27		同 上	売物市を開くがほとんど売れず、
28	◎	"	Health centreのNewar 族医者となべる。がめつい根性をす てて、薬を少々贈る。

11月29日	◎	Dohan村の端れ、 Tamur 右岸の河原	Ghunsa の半数を Taple のそれ に入れかえて出発。モンスーン明に 作られた竹の釣橋も激流にふれんば かりに垂れさがつているものがある なまけた一日。
30	①	Niguredin 村 の小学校庭	Tamur 右岸の河原を進んでいる内 に道は中腹をはいり様になる。どの小 学校でも校長は若い。
12月 1日		Kolkali 村の 刈あと	峠に開けた町 Sakvant Bazaar を通過、近頃一日行程が短かすぎる ので Dr は頭に来てる。Kolkali 村は水が乏しい。松が現われた。 植林がある。チョータラ造りに道な おしはこのあたりの Panchyat の事業。
2		地名は不祥 Tamur 左岸の砂原	昨日の泊場から一時間下つて Tamur 河畔に出る。くり抜き舟で 左岸に出て30分も下ると、何んと りつばな鉄の釣橋が。何んたる事が 二度とくる事もない所を歩きながら ポーター運をせきたてるというのは 矛盾。
3	○	Tamur 左岸の 河原	砂糖がきれて morning tea なし、手持食糧は米とジャガイモの み。Sikkim との国境稜線上にカ ンチ・カブルーが望めた。 Dhavan Bazaar 帰着後の事が そろそろ夕食後の話題にのぼる。 茶店が目につく様になつた。

<p>12月 4日</p>	<p>○</p>	<p>Murghat 村 手前の路上にテント はる</p>	<p>マラヤ帰りのグルカ兵に出会う。 妻子を連れ、トランジスター、ラジオをもつて。雇われたポーターがたくさんトランクをかついでゆく。グルカ兵になる事はりつばな就職だ。空腹をかかえて、Murghat 村まで食糧買いに行かせた者の帰りを待つ。羊一頭35ルピー也をおごる。</p>
<p>5</p>	<p>①</p>	<p>Dhavan Bazaar 帰着 Malaya Camp の柵の外にテントを はる。</p>	<p>キヤラバン第15日目。つまり最後の日。明日はDhavan に市の立つ日だ、果実や野菜が村人の肩で運ばれてゆく。9時間行程だったが途中さぼっていたのでSangri Bhanjanを下りはじめる時既にとっぷり暮れていた。螢のとび交うタライに帰えつた。その個性のゆえにDrをイラだたせた若いサーブ連、その陽気さでDrを悩ましたチベット、がめついのもいれば純情なのもいる。ヤパール農民、哀しげな面をふとのぞかせる雲助稼業のポーター達みんなお別れだ。山の旅は終つたのだ。</p>
<p>6</p>		<p>Biratnagar Himalayan Holel</p>	<p>British Camp の大型トラックで一挙にBiratへ。なつかしい手紙をうけとる。Biratの町も変りつつある。ここにも建築ブームか。町の明りがふえた様。</p>

12月 8日		Himalayan Hotel	荷物はBivatnagar Customs 通過。ネパール入国時に非消費物品の保証の為にdeposit した金の扱ひだけが問題とされた。 遠征隊装備の残りを買ったたこうとする有学・有産の徒が、私達のまわりによつてくる。たしかにイヤ味な奴がふえた。
9		Himalayan Hotel	二隊員、(広谷、平井) Bivat 空港(という名の草原)からKtd へとぶ。
10		"	Jogbani Customs Office とJogbani Station 間をうろろした揚句、ようやく本日の最終便にて装備類をCalcutta 向け送出す。 Jogbani Customs Officer にふりまわされた。
11		Himalayan Hotel	更に二隊員 Ktd. にむけてとぶ個人にもどつて、同宿者と話し込んだり、夜の町に散歩に出たり。
14		Kathmandu Liaison Officer の家に居候	「立つ鳥あとを濁さず」ホテルのボーイや人力車の運チャンにもボクンス(チップ)を出す。 同乗しているというだけのスチエワードとアメ玉一ケと、とびまわるハエでは、雲塊のためにおがめないヒマラヤの蜂々の憤りにはならない。 (日置、笠松) Ktd. 美しい街、

			<p>人の波。ヒマラヤン・ソサイエテイのParajuli に出会う。久々にのむビール。田村がNamehe Bazzar に行つてゐる事を知る。</p> <p>神原達氏宅の夕食会に招かれる、高橋と2人出席。JAERC/ 63の佐々木高明氏に会い、Pokhava Bazzar のMr. Amrit Prasad Sherchan への紹介状をもらうと同時に、その場でSikha 村にいる川喜田二郎氏を訪ねる事にきめる。</p>
12月15日	居 候		二名(高橋、森)空路Cal に立つ。
16	居 候		Imperial Hotel にサイパル隊の面々を訪ねる。
17	"		ネパール国内旅行ビザ申請のために午前中に外務省にゆく。「今日はもうおそいから又明日来てくれ」元裁判長が死逝したので、午後は休日だ。
18	"		外務省に出むく。雑多な国籍の歐米人が思い思いの格構して姿をみせる。私の旅券には訪問先国の項にNepal が記されていない事が露見した。既に3ヶ月もネパールに滞在しているというのに!! 暇な役人には勝てない、私も法科を専攻すべきだった。夜、パスポートの件で、神原氏宅にゆく、根本製陶(多治見)にゆく5

12月19日	Pavas Hotel	<p>人の留学生の一件を知る。 IACの託送便でデリー日本大使館 あてにパスポートを送る。 「いたづらに居候はすまじ」物欲と 義理とにもまれて頭への来方もいい 所、やせ細つた財布をはたいて Paras Hotel (三流)に身を ひく。</p>
20	Sherpa Hotel	<p>単身ポカラに向う日置を見送る。 Globe Restaurant の主人 (中国人)と筆談をしてSherpa Hotelに泊りたい由を伝える。 Sherpa Hotel 素泊1日 1Rp(N.C) シェルパ達と大部屋 に同室。私は又自由の身になつた!! 夜 Biratnagar の Himal- ayan Hotel で一緒になつた学 生の一人と、「ネパール論」を交え る。</p>
21	"	<p>Parajuli の一味とDakhin Kali へ遠出する。 元 Liaison Officer であつ たバカな学生(合同隊の面々から 「砂利つ子」という名をいただいで いる)の家にカメラとラジオ代をと りたてにゆくのも日課の一つになつ ている。未だに支払わせる事ができ ぬ!!「ねぐら」にもどるとシェルパ 連一杯やつている。ここの所彼らに</p>

12月22日		"	<p>おどつてもらいっぱなし。</p> <p>人目ひく「可愛い子ちゃん」の后を追つてバスにのつたら、Patan じゃなくてPaspathi Nath に来る。金ピカのヒンドウー寺めぐり、更に奥のくづれかかつた寺の境内に遊ぶ。信仰と生活と。たくましい人間の交りの浮影をながめ、半眼の仏像をみる。午さがりの光線の中にヒンドウー教徒幾千年の歴史がくりひろげられる。</p> <p>日課はかわらず。手紙待ち、代金とりたて、日記。</p>
23		"	<p>午前中 Imperial Hotel に東大植物隊の津山氏を訪ねる。</p> <p>ギャチユンカン隊に参加するシエルバがシエルバ・ホテルに現われる。</p> <p>Porajuli と一緒に Coronation Hotel にゆき、根本製陶にゆく5人の学生の1人と会う。</p>
24		"	<p>デリー大使館からの手紙はまだこない。砂利つ子とそのオヤジにさそわれて Panga 村の祭をみにゆく。</p> <p>夜 20RP をはりこんで同宿のシエルバ達におどる。</p>
25		Sherpa Hotel	<p>朝は10時をすぎる迄モヤがさらない毎日である。ことわり切れずに Glode Rest の主人の家族を診察する。昼間は Himalayan So-</p>

12月26日		#	<p>cietyの事務所です。大阪市大塚からSherpaの推センを求め手紙がとどいていた。夜Societyの書記連とダべる。インド・ネパールの対比と娘達の事と。シエルパ・ホテルは人の出入がはげしい。観光客が彼らの持物を買いくる。</p>
27		#	<p>私のfrustrationも頂点にきた。まだパスポートはとどかない。シエルパ・ホテルの夜「JapaniとSherpaはSame,same」といつて飲む。</p>
28		#	<p>Prkhara行のヒコーキ、今日で三度目のキャンセル、折から開催中の「Exhibition」をみにゆくBiratnagar以来の知合いの青年に昼食に招かれる。彼のアルバムの中におもしろい写真をみつける。ラナ政権がたおれた時、自由の身になつた政治犯達を歓迎するKathmandu市民の行進の図。Patanの寺々をみる。</p> <p>夜、砂利つ子の家で北大塚の三氏（安藤、鈴木）に会う。Sherpa Hotelにもどつて彼らと飲む、その内にシエルパも仲間に加わる。日に一回はParajuliと会う、この男もヒマ人だ。</p>

<p>12月29日</p>		<p>"</p>	<p>とつておきのカラー・フィルムをつめたカメラを上げて、1日2.5Rp也の貸自転車走らせる。寺々の写真をとる。Hanuman DhokaとSwayambhu Nathにゆく。ラマ僧の読経の声が、見下ろすKtd盆地の空に吸い込まれてゆく。昨日シェルパの一人が取引した直後に3000Rpばかりすられた。で心配になつたシェルパの一人が私に預かつてくれと1000Rpばかりもつてくる。私も信用されたもんだ!! Hamcheから来たシェルパの一人が田村の消息をおぼろげながらもつて来た。</p>
<p>30</p>		<p>Sherpa Hotel</p>	<p>とうとうパスポートがとどいた。デリー日本大使館を悪く云つたのは私の誤りであつた。手間どつたのは「書留」にせずIACの託送便にした為である。元氣百倍の私は敵陣にのり込み代金の催促をする。物欲も色もよし、しかしその為下手なウソをつくのは醜い。ウソは賢聖にゆるされた特権だ。なつてくれたシェルパの少女に、外に何も無いから色鉛筆を一本やつた。親にみせにとんでいつた。オーミソカ、北大隊の両氏と飲んで</p>

84年
1月 1日

2

ダべる。

こののほか朝モヤが深かつた以外に何の変哲もなく、人々の一日がはじまる。自転車屋はおもてに車をならべ、肩をすぼめながら野菜を一株ぶらさげて通る男もいる。女達の水ガメを腰にのせてゆく様は昨日迄のそれと寸分ちがわない。コブ手は同じ歩み続け、有閑人は朝の散歩とシヤレている。私は向いのレストランに行つて茶とチャパティーを食べ、代金のとり立てにゆく。

約更の存在を疑われる国で、

「Sherpa 信用銀行」の頭取におさまつた私は得意である。

午前中に外務省に出むき、ビザの申請をする。午後、Baudh寺をみてゆく、国籍不明(欧米人)の旅行者と一緒にいる。彼らマスコミにのらないVagabond 達。

りつばな Permission を受けとつた。Civil Aviation Dept で RNAC の Gvt seat をとれた。明日の Pokhara 行の切符も買つた。

一時間と 40Rp を投じて日本への手紙を投函する。Parajuli を介して日本からの手紙の束をうけとる。それはいつも待たれているもの

			である。
1月 3日		Pokhava Annapurna Hotel	Himalayan Societyの若手 連に招かれて「純ネパール風」の夕 食をネパール風にたのしむ。 3週間近く待つた日が来た。
4	河原のバツテイに素 泊り		やさしい目をしたスイス赤十字の青 年と同室で、気持のよいAnnapu- rna Hotelに泊る。
5	Bire Thanti の手前、畑の刈あと に野宿		Pokhava Bazaar K Mr. Amrit Prasad Sherchan を訪ねて昼食を御馳走になる。 Sikha村への一人旅
6	Uleri村 トウモロコシの刈あ とに野宿		Botiaのたき火にもぐり込んで昼 食、タバコとチベット茶との交換。
7	Ghore Pani峠 の手前、Takhali のバツテイ		地図も金もない一人旅、あるのは好 奇心だけ
8	Pankdar村		本と薬のつまつたザックも今ではや せ身にこたえる。とうとうSikha 村まで4日かかった。 昼まえに、ようやくSikha村に着 く。バラサーブは昨日から谷間いの Pankdar村に出かけて留守、 日置と久々によもやま話 午後になつてバラサーブがかえつて くる。心よく私を迎えてくれた。 さつそく一泊二日の出張費を受く。 Liaison Officerの青年を

1月 9日		Sikha 村(上村) Base House (Ca. 2080m)	つれて「火傷の少女」を診療にゆく。 藪医者稼業はゴメンだ、と誓つたばかりというのに?? 午前中Pankdar 村で店開きしてからSikha 村にもどる。バラサーブの文明論。
10		"	Sikha 本村に火傷患者の応診 夕食后、隣家にPuja (Jhankri) による祠り)をみにゆく。 Junkiri との出合い。一人のMagar 娘の物語り。
11		"	北大隊の二名(小野寺、渡辺)川喜田氏を訪ねてくる。 昨日と同じ家でPujaに参加する。
12		"	Junkiri に関する資料あつめ
13		"	Sikha 木村に応診。炉辺を囲んで遠征談義
14	○	Kali Gandaki の掛小屋	Ghar Khola の祭り見物 夜を徹する歌と踊りと。これは又村人の意思を統一する場であり、若い男女の交際のきつかけでもある。
15		Sikha 村 B.H	朝日の下に祭りは終りをつけ、人々はKali Gandaki の流れて身を清めた。午後Ghava 村にかえる 出産に立会う。Dr サーブの名声はあがつた。夕食后一人夜道をSikha 村に帰る。
16		Pankdar 村	Pankdar 村へ巡回診療にゆく日軍隊帰りのMagar 青年と知合ひ

1月17日		"	<p>(以後この村に於ける Dr の通訳となる)</p> <p>半日診療について</p> <p>Kali Gandaki 河畔での祭りの名残りか、若者と娘が朝から手太鼓をたたいて歌っている。</p> <p>夕食后、隣家の炉辺にすわり込む。顔見知りの娘や青年と飲む。目称 Doctorni の攻勢にたじろぐ。日置, Pokhara にむけて去る。</p>
18		Ghara 村	<p>Ghara 村々長の招きで、夕食を御馳走になる。シュラフにもぐつてからパラサープの構想をきく。</p>
19		Sikha 村	<p>Ghara 村での Dr. の人気は上昇中 反面 dabai, dabai (薬) とおしかける人の群をみる度に、ゾツとする。</p>
20		Sikha	<p>診療とメモ整理</p>
21	①	Sikha	<p>最低気温は 0 度を少し割る。</p>
22	②	Sikha	<p>北大隊の一名(渡辺) 去る。小学校で「軽架線導入」の関する説明会が開かれる。これに対する Sikha 村人の関心は具体化する。Sikha 村 Dispensary の薬品棚調べをはじめる。</p>
23	①	Pankdar 村	<p>Sikha 村 Dispensary の Compounder から期限の泊つてる種痘の手伝を申込まれる。承諾</p>

1月25日	○	Ghara 村	夕刻、Pankdar を去る。 Pankdar 村下の斜面ではゴート（家畜小舎）が出現し、春蒔のための準備進む夜になるとこの村（Ghara）の村人達が私達の所にダベリに来る様になつた。 Ghara 村小学校庭にて種痘を行う バラサーブ一行は周遊旅行の準備のため、Sikhan にかえる。 夜、Ghara 村での診療にくれる。
26	①	Churibas 村 のバツテイ	周遊旅行第一日（川喜田、小野寺、笠松、リエゾンの青年、シエルバ二名の外に案内兼ポーターのSikha 村人一名、計7名）。バラサーブとチベット高原の話。
27	①	Raku村の main Settlement (Ca. 1640m)	名月。小学校々長を通訳に診療開店
28	①	Mallaje 村 (1320m)	Mallaje 村は開けた斜面をもつ豊かそうな村。Dhauragi南面が望める。おしかける患者のため、本日の出発は午すぎ。
29	○	Armadi 村内の 小集落 (800m)	久々に夜間診療なし。満月とネパール美人を肴に、一行大いに飲む。大阪のバーに連れて来ても、りつばにマダムの勤まりそうな女主人。
30	①	Pakua 村 (970m, 170戸)	Kusma 町通過、ここには Health Centre, Malavia Irradiation Project の office

			あり。
			Kusmaから先はMoudi Khola 沿となる。
			Annapurna II, 圓峰, Mach- haphuchhave をおがむ。
			Shuri Toran Bam Malla (ネパール農商工次官Shuri Krishna Bam Malla) の実弟の家に泊る。
1月31日		Pakua 村	地方自治精神にもえる主人の村落発 展論を二日にわたつて聞く。
			小野寺, Pokhara にもけて去る。
2月 1日	①	Bive Thanti 村	Himalは終日春ガスミの中につ まれている。
			Bive Thanti で Ghurung 族の氏族祭にぶつかる。Sikha村 の娘つ子も出張して来てる。
2	①	Ghandruk領内 Kod 村 (2140m)	タルチョーのはためくGhurung 族の村、いかめしく、どつしりした 石造の家々。夕映の一時に輝く Machhaphuchhare の尖峰。
3	①	Kod 村	バラサーブは狸オヤジの村長相手に 資料あつめのため一戦交える。
4	①→② →③	Sikha 村, B.H	昨夜の一戦は日本人の勝ち。 Ghurung 達の慎重な心の戸は開 かれた。Kaier峰につながらる峠を 二つ越えて、Sikha村に帰着。 周遊旅行は終つた。
			本屋論、学会論、文化論

2月 5日		Sikha	休息とメモ整理、周遊旅行中の最低気温(Sikha村B.H)は-16℃
6		Sikha	診療再開、7日后にTibetの新年がくるらしい、街道筋はTibetanのCaravanがゆきかう。
7		Pankdar 村	Sikha村Dispensaryの医薬品棚調べ完了、午後一同うちつれてPankdar村へ。 Pankdar村元村長の一人が死んでから丁度13日目のため、村人集って法事(酒と煙草。歌)あり。
8	①	Ghara 村	バラサーブはPankdar村Panchyatの面々を集めて「輕架線」論議。Drは診療、本日はまるで婦人相談日。 夕刻Ghara村着。村人が訪ねて来て、大いにダべる。
9	②	Ghara 村	Dr.は患者さばき(宅診に応診)。Ghara小学校庭で、祠りと祭り。Pankdar, Sikha, Kiban等、近隣から村人集まる。
10	② → ③	Kagjibaniのチベット人のバツテイ	Ghara村からの脱出、ザックを背に心も軽く一人旅に立つ。Kali GandakiをさかのぼつてMuk-tinathまで。Dana村Check Post 無事通過。一泊二食(チャン二杯付)で10Rp(N.C), 甘すぎた。Kagjibaniの手前でKali Gandakiはゴルジュとなり、

2月11日	○	Raljung (Norjung) Takhali の旅人 宿	これから上流はThakola 地帯に入る。 Ghansa 村通過、カンバ(ドライ ラマ親衛隊)の私設check post で茶をおごられる。 一泊二食(茶四杯付)で7 Rp也
12	①	Jomsong Takhali 商人の家	往来の絶えたTuckche の街をぬ け、砂塵をまい上げる下流風にま かせて北上する。Tuckche から先 はPanch Gaon 地帯。半砂漠と 秃山とヒマールと。夕刻、Joms- ong のCheck Post でとうと う止められた。一泊二食でRp 千也。 主婦を診療した。
13	①	Tuckche Boteghrung の家	Bahra Gaon 地帯を目の前にし て、Jomsong から引返す。 「一人の日本人がPermission も持たずにこのこやつて来た云々」 とCheck Post の日誌に書込ま れるだけで満足すべきなのだ、今は Marpha 村探望失敗。 二食一泊で 7.5 Rp也
14	◎	Ghansa 村 軒先備用	カンバ連中に食事と寝所の世話をた のんで、診療する。往きに顔見知り になつているから気楽なもの。 一食一泊 4 Rp也
15	◎	Sikha 村 B.H	北帰行の終りの日、全くバテ気味で たどりつく。旅の終りとはおかしな もの、走馬燈が身体中をめぐる。

2月16日	○	Sikha	<p>田村から手紙がとどいていた。</p> <p>日当りに出る時は夏姿。紅の石楠花が食卓を飾る。ヒマラヤの冬は Expedition の季節という、若者は追っかけ、娘つ子は逃げる。</p>
17	○	"	<p>診療 一日の最高気温は 20℃ をこえる。</p>
18	○ → ●	"	<p>Pani Poryo!! (雨が降る)、Jhankli の祈りが、天にとどいたのか恵みの雨がふる。これではまだ春の蒔付けはできないが。</p>
19	○	"	<p>ネパール放送はマヘンドラ王のメッセージを伝える。14年前の今日、ラナ将軍政治は倒され「Democratic Nepal」が出発した。</p> <p>村の小学校で式典の後、生徒達が村中をねりあるく。日く「民主主義、万才、我らの王よ永遠に、パンチャット民主主義を伸そう」</p>
20	○	"	<p>朝帰り第一日、残月の下の Dhauragili,</p> <p>若者達からバレーボール試合の申込をうけ全員練習にはげむ。「缶入ビール」も残るは一ヶ、引揚の日も近い。</p>
21	◎ → ○	"	<p>診療は続く、Dr. の現物収入もうなぎ昇り。</p> <p>バラサーブは連日レポート作成のためにタイプ打ち。</p>

2月22日	◎→●		<p>食後にバラサーブとダベルのはいつものこと。文化人類学はどこにでも顔をつつ込む。</p> <p>受診に来た Damai (仕立屋) の若夫婦の夫婦愛にすつかり Dr の心も清められる。</p>
23	○	Sikha	<p>Sikha の裏山に薄ヴェールがついた。隣家で旅の女が淋しく死んだ。薄命の女の物語り、Dispensary の Compounder から薬の注文がくる、Dr も近頃じやまくさくなると Dispensary に行つて dabai (薬) もらえ、と処方策を切る。</p> <p>近隣三ヶ村 (Sikha, Pankdar Ghara) 共催の「お別れパーティ」への招待状がとどく。</p>
24	○	"	<p>結婚式と饗宴。ヒマラヤの夜の恋心 結婚式の宴は今日も続く。水牛が一頭棒げられた。夕食后、本 Sikha に「踊りの練習」をみにゆく。</p> <p>私達の去る日が近づいてくる。親しい村人は云う「日本人が行つてしまふとこの村も淋しくなる」と。</p>
25	○ 無風	"	<p>B・H の庭に村人を集めて福引きのプレゼントをする。ダンコちゃんをひきあてる者、化粧セット、日丸の旗、色んなものがとび出す。</p> <p>バレーボールの試合、但グルカ兵帰</p>

2月26日	○	<p>りの若者は上手で、私達は下手くそ。混合チームをつくる。すんでから賭けた金でロキシーを飲む。</p> <p>今夜もあるという「踊りの練習」をみにいつて、ミイラ取りになる。</p> <p>三度目の朝帰り。</p> <p>シエルパの一人にうれしい手紙がとどいた。彼はこれで3人の子供の父となる「家畜の子が生まれてもうれしいのに、まして自分の子が・・・」</p> <p>受診者数の記録更新。物品の整理に忙しい。ひょうひょうとしたタカリ一青年の手太鼓に合して、今夜も娘達と夜を徹す。</p> <p>夕食後の雑談、バラサーブはもとより連絡官のH・B 君もサーダーのD・T もこの隊が大成功であつた事を話合う。人の和と仕事ぶり、村人との交り。</p>
27	○	<p>早朝から患者はくる。</p> <p>近隣三ヶ村共催「送別会」於Sikha村小学校庭。昨秋ネパール国会議員来訪の際よりも盛大という。</p> <p>昼まえに始まる。クライマックスは月光の下、Dhauragiliの白い塊を背景に、Junkiri 嬢のくりひろげる熱演。</p> <p>それは、失恋の痛手と重苦しい病、更に又Jhankiri(巫女)に運命</p>

2月28日	①	Uleri 村	<p>づけられようとしていた彼女がこれらを振切つて、一世の踊手として現役復起しようとする情熱である。</p> <p>Sikha との別れ。Dr の最期の朝帰えり。ダマイのラツパと太鼓に導かれて小学校の前までくる。別れをおしむ村人のかけてくれる花輪と、ティカ（額につける幸運の印）</p> <p>口々に村人は云う「いつもどつて来るのか」と。Dhauragili の前面を、今日も白い雲の塊がよぎつてゆく。村端れ迄行列は続く。</p> <p>ヒマラヤの山地民の村に、この遠征隊（JAERC-63）のこした足痕は大きい。</p>
29	①	Lumule 村	<p>Sahbet 村に立寄る。谷の向うに頭をのぞかせている Ganesh (Annapurna South) が美しい。</p>
3月 1日	○	Rokhara Indra Man Serchan 宅に泊る。	<p>一歩一歩、亜熱帯にもどりつつある。</p>
2		Pokhara Annapurna Hotel	<p>パラサーブとサーダー Ktd にとぶ。Shining Hospital 見学。手紙をたくさん受とる。</p>

3月 3日	Ktd	Annapurnaをおがみに来ていた「合同隊」の四名と再会する。西ネパール派遣の米軍平和部隊の会議開催中。
8	Ktd	合同隊の面々 空路 Cal へ
10	Ktd	川喜田氏 空路 Cal へ
13	○	帰国の途。バスにて Raxaul に出る。Rp10 と 12 時間。

文 献 邦 訳

高度の人体に及ぼす影響(その2)

L.G.Cピユウ, M.Pウオード著

徳 永 篤 司

松 久 博 共 訳

坪 井 圭之助

討 論

酸 素 欠 乏

ヒマラヤ遠征に於いて経験された高度の影響は急性よりむしろ慢性の酸素欠乏症である。2、3の例外を除き殆んどの人がその急性症状にかかったが急性高山病の頭痛、不安、嘔気、チアノゼ、発熱、頻脈、呼吸困難といった症状が次々と現れ、これが数日も続くというような事は稀であつた。5500m以上に達したヒマラヤ登山隊が経験する重要な影響は、倦怠感、遅滞、食欲不振、過度呼吸、シエインストークス呼吸、行動時の四肢の倦怠、衰弱、息切れ、耐久力の低下である。この症状はいつでも3650m迄は起つていない。之は主にゆつくりと登るためであつて、健康な人では海面位より約3000m迄1日で登り、そこで不快

を感じずにとどまることが出来るがもし3650mで12時間以上も過ぐすと、2人の内1人に症状が起るのである。

又4000mから5500mの間では、3650mから始めて登るパーティに急性症状が特に起りやすい。酸素の圧力はこの高さでは可成り低下し(5800mで $\frac{1}{2}$ 気圧)この高所ではパーティは1日にキャンプを600mから900mも上げ、パーティを急に低い気圧に曝すからである。しかし急性症状は2、3日で消失し、登攀者は十分に順応される様になる。5500mの高度に完全に順応するには、非常に長い期間を必要としなければならない。1953年のエベレストでは、550

0 mに1ヶ月滞在した後でさえも、僅かに低い5000 mに降りたとき、著しく楽になつた事を感じている。翌年「雪男の探険」に参加したストバートは、この隊が4800 mから5500 mの間に滞在していた数ヶ月以上もの間、ずつと体の調子がよくなつてゆく一方であつたと述べている。これは1935年の国際生理学探険隊の、5200 mで6週間過した後でも、彼らの高所順応は原住民に比べて良くなかつたという経験を裏書きしている(注)

高度による症状が現われるには数時間を要するから、あまり順化していない人でも、若し低地へ帰つて睡眠をとるとすると、楽に3650 mから5500 mへ登れるかもしれない。之に反して、始めから5500 mにずつと滞在しようとする、激しい高度の影響に悩まされ、順化するまでにはかなり衰弱してしまふ。順化するまでは余り高处で泊らない方が良いという事は、アンデスへ行つた登山家には認められていたが、ヒマラヤでは充分認識されてはなかつた。

5500 mから6700 m迄は、酸素欠乏に基く急性症状は大して多くないかも知れないが、これはパーティがこの地域にキャンプを建設する前に、中間の高度で常にある程度の時間を費

すからであると考えられる。作業能力の低下によりキャンプ間の距離は4500 mから6000 m以上離す訳にはゆかない。その上、気圧と高度との関係曲線は平坦になり始め、従つて高度に対する気圧の変化は3650 mから5500 mの地域においてよりも少いのである。

6700 m以上では、登攀者が彼の能力の限界に達しよとする時、急性症状は再び現れる。7950 mでは登攀者は死ぬのではないのかと考える程悪く感ずるのである。そしてそれを助長するのが過度の労働、脱水や食物の欠乏からの消耗である。

1953年のサウスコルでは、高度の影響は全く激しかつたが、大部分の隊員の状態は、同じ高度に以前に行つたパーティに比べると、余程良好であつた様に思われる。これは充分な食糧と液体(注)と酸素吸入器の使用とによるものである。疲労の回復と衰弱の防止に酸素が有効である事は、登攀中の酸素と同様であると登山家達は考へている。又、睡眠に酸素を使用すれば8550 m迄のピークであれば、登攀に酸素を使用しないで登る事が出来ると考えられている。

その他の要素

5.500 mから6.700 m位の無風快晴時の永河上で遭遇する強烈な暑さと光線は、酸素欠乏と同様に頭痛、疲労の原因として重要視されている。

1953年の遠征で行った皮膚温度の測定では、太陽光線に強い熱効果のあることが確認されている。日蔭に入っている胸部では摂氏34.4℃の正常値を示したのに対し、直射日光に曝されている肩では、服の下で摂氏45.5℃の皮膚温度が記録された。しかし反面太陽が照つていなければ、寒気は又強烈であり、防寒具が必要である。疲労回復への砂糖の効果と、非常に高い所では砂糖に対して食欲が増加する事は動物実験に於いて、軽度の低血糖は酸素欠乏の有害な影響に対して大脳皮質を鋭敏にする事実からして興味あることである(注)。

個人差

過去に於けるすべてのヒマラヤ遠征は人々が高度に対する耐久力や順応の速さ、程度などの点で、1人1人違った結果を示すということを教えている。又高処順化の能力はヒマラヤを訪れる毎に良くなり、経験者は未経験者より常に高処に対して強いという事実が認

められている。それにもかかわらず高処順化は平地に降ると長くは持続せず実際にはヒマラヤから帰つて、1.2ヶ月後にアルプスで高山病にかかった者も居るのである。

年令

年令は前に述べたヒマラヤ経験程高処順化と密接な関係をもつものではないと思われる。ヒマラヤ登山家の内でも、最も経験に富んだ1人であるシプトンは45才であつたが、チヨ、オエウでは6100 m迄高度によつて全く影響をうけていない。20才台初期の若い人々でもしばしば6100 mで相当苦しみ、初めての場合には特に苦しい。1952年のスイス遠征隊では、サウス、コルに達した最も若いシエルバは17才であり、最年長は47才であつた。この場合年令と高処での行動との間には関係は認められない様である。30才台の初期が非常に高い処では最適の年令の様であり、又それ以上の人も良いが、ある高さを超えると恐らく不利であろう。1935年の国際生理学遠征隊は、年令と高度に対する耐久力との間に、逆の関係のある事を見付けている(注)、これは一般のヒマラヤ遠征に見られる様な高処に何

度も登った登山家には関係がない。

身体の訓練

登山家たちは、適当な高所馴化を得るためには常に健康でなければならないこと強調するが、しかし彼らは一般に遠征に出発する前に、身体を絶好のコンディションに置く様な何如なる特別のトレーニングも行っていないのである。戦后英国の登山家達は、アルプスの案内人が云う様なスタミナ（耐久力）を作る機会を殆んど持たなかつた。あるヨーロッパの職業的登山家の様に5500m以上の高さで、1日18時間も行動する登山家がイギリスで見当らないのは多分この理由によるものである。

「オーストリアのガイド、ヘルマン、プールの経験はその適切な例である。彼は1953年、6950mのキャンプから8125mのナンガバルバットの頂上往復に40時間近く費している。この登行中彼は保護物なしに頂上直下の岩棚に一夜を過し、軽い凍傷にかかっただけでも、今も尚アルプスで困難な登攀を行つている。（プールは1955年チヨゴリザに於いて死亡—訳者注）

高処順化の限界点

人間が永住できる限界高度は、約5300mであるとされている。アンデス山脈のアコンキルカにあるこれと同じ高度の探鉱所を、1935年、国際生理学遠征隊が訪れているが、その鉱山会社では鉱夫達をもつと高い処で住ませよつと考え、5800mの作業上近くに宿舎を建てたが、鉱夫達は23週間で不眠、食欲不振に陥り、そこに住みつく事を拒否している。（注）この事実から生理学者は、充分な順化が可能である限界は5500mであるとの見解をとつている。

6100m以上の高処を訪れる唯一の人は登山家であるが、多くの登山隊は6100mで4週間過しており、常に倦怠感や作業能率の低下はあるが、体重減少以外に悪い影響はみられていない。1931年のパウアーのカンチエンジュンガ遠征隊は6100m、或いはそれ以上に6週間過したが、可成りの体重減少にもかかわらずその終り頃には気分が良かったと報告している。（注）

6100m以上に於ける滞在期間は高度が増す程急激に短くなり（表参照1）、且つ生理学的な限界と同程度に、登山の装備、天候、更に供給と支援の問題によつても変わるのである。

(表)

エベレスト遠征に於いて6,700m以上の各高度で過した最長日数

八三五〇	七八三〇	六七五〇〇	七〇〇〇	高度(m)
三晩	五晩	十一日	十一日	期間
スマイス	バクアー	ロッ	オーデル	隊員
一九三三	一九三三	一九五三	一九二四	年

戦前のエベレスト遠征隊員は6,100mから7,000mの間で、ある程度の高処順化が可能であると述べている。ソマーベル(1923年)は1922年の遠征で、仲間と共に6,700mから7,000m(約3日の間隔で3回登っているが、登攀が後になる程楽になつたと述べている。

「第1回は、遂に我々がノース、コル(7,000m)の上に疲れ果てて立つ迄で、一步一步が艱難であり、闘争であつた。下の第2キャンプ(6,400m)で1,2日たつて再び登つた時、登りは苦しい仕事ではあつたが、前程ではなかつた。コルに着いてから、モースヘッドと私は非常に上気嫌で、エベレストへのルートを探した。更に1,2日おいて再び登つた時に、実際に息切れ以上の不快感には気付かなかつた。」

1925年の遠征で最初は順化がおそい様に見えたオーデルが、遂には高さにも最も適した人となつた。即ち彼は7,000mに11日過し、7,650mへは3回に亘つて登っている。彼も7,650m以上登るのに、この期間の初めよりも終りの方が楽であつたと報告している。(注)

高処衰退

1933年の遠征によつて、人体は7,000m迄は部分的に順化し得るがそれでも体重の急速な減少や、食欲不振、不眠、倦怠、脱力感の増加、疲労回復力の低下と云つた高処に於ける身体の衰退現象がみられるという事が一

般に認められた。7,000m以上では殆んど順化されなくなり、その代りに衰退現象は高度が増える程急速、且重症になる事が認められた。7,650m以上に滞在した人は、非常に衰弱、消耗し、その回復には数日及数週間を要したのである。

6,100mは5,6週間以上滞在したヒマラヤ遠征隊はなく、その高度でどの位の期間滞在出来るかは正確に判っていない。1953年のエベレスト遠征隊員の一致した考えでは、この高度では5,6週間が、健康と生活力に調和する限界であるとされている。一定の高度に人間が滞在出来る期間は個人により著しい差のある事が認められている。

以前には脱水と適合した食物との不足が、特に高い処では衰退の速度を強めた。1953年の遠征でも、栄養には特に注意が振われたが、しかし衰退は依然として起つている。一時的には健康の様に見える、且つ最初の数日は良い様に思えても、結局は食欲が減退し始め、夜は眠り難く、昼間は反対にりとんとする様になり、遂には活動出来なくなつて下に降りねばならなかつた

ハントはサウス コルでの3日間に亘る滞在から帰つて来て後2日間は余りにも消耗が激しい。又まるで老人の

様な声と顔をしていた。又、ヒラリーは、彼が登頂したために、以前のどのヒマラヤ遠征よりも疲れ、その疲労より常態に還つたと感じたのは、カトマンズへの帰途の最後の頃になつてからであつたと述べている。

高度が人体に及ぼす他の影響

判断力の明瞭な低下を裏づける例はヒマラヤの文献にいくらかも見付ける事が出来る。

「1924年のエベレスト遠征(ノートン1925年)では最も順応され且つ深い経験の持主であつたオーデルが残り、代りにマロリーが余り山に慣れていないアービンと共に第2次の攻撃に出発するという不手際を演じている。又、1954年イタリーのK₂遠征隊の登頂隊は頂上の少し下で酸素を使い果し、空の酸素吸入器をつけたまま頂上に登つている。彼等はそれを取りはずそりとしなかつたのである。(注)」

エベレストでは大脳機能の著明な低下を物語る数例を教える事が出来る。

1933年の遠征の或る段階で隊員の1人は医者が彼を殺そうとしていると

云う妄想にかかっている。スマイス(1934年)は8550mを登攀中、空に繫留気球の様に黒い物体が見え、且つ単身であるに拘らず確かに仲間が一諸にいとと思つた(注)。又、シプトンは、スマイスと共に頂上攻撃から帰つた後、7000mの処で失語症になつた。

「翌日ノース、コルから降るのに我々は長時間を要した。出発直后マツクレーンの調子が悪くなり、殆んど歩く事が出来ず、斜面を降るのに注意深く助けねばならなかつた。斜面の下に着いた時、第3キャンプからお茶をもつて我々を迎えに来るパーティを見つけた。我々がお茶を飲むために集つた時私は急に失語症にかかり、適当な言葉が云えないのに気付いた。例えば、一杯のお茶を下さいという積りが、全く違つた何か、即ち電車、ねと、足等と言つてしまひ私の頭は完全にはつきりしていた言いたい言葉はありありと心に描けるのだが、舌の先が言ひ事を聞かないのである。その夜一晩中悩まされた目のくらむような頭痛より考えてこれは偏頭痛の一種ではなかつたのかと考えられるしかしながら翌朝にはすつかりよ

くなつていた。」

後遺症

初期のエベレスト遠征隊の隊員達がその後どの様な状態になるかを調べるためには十分な期間をおく必要があるが、今日ではこれを調べるのに適當である。酸素を使用しないで8550mに登つた8人の登山家の誰かに、飛行機で7650m或いはそれ以上での気圧に突然曝された人に起る性の悪い疾患が起つたとは考えられない。

彼等は皆すばらしい経験を持ち、且つある程度知能の鈍い人では到底達せられない様な地位についている。ノートンは將軍になり、ソマーベルは外科医として成功し、オーデルとウエイジャーは教授の席につき、シプトンとスマイスは後者は死亡したが、夫々著述家や探検家としての生涯を送つたのである。又ウインハリスは植民地の総督となり、ラングランドは教育指導者となつてゐる。

次に7650mに5晩過した一登山家に起つた一例の後遺症は注目すべきである。この登山家はカルカッタ総督府の副秘書官であり、社交場でお互いの客を紹介することが彼の仕事の一つだつた。エベレストに行く迄、彼は100人の客の名前を空で覚えていた

が、山から帰つてからは、名簿を用いねばならなくなつた。

高所順化の方法

順化中に身体に起る生理学的変化についての知識は短時間で最良の順化を得るために、登攀の各段階をどの様にすればよいかという最善の方法について今迄有益な情報を殆んど登山家にとつて余り役に立たなかつた。しかしながら経験的な知識の大部分はこの問題に関するものであり、多くのヒマラヤ遠征を通じて集積されたこれらの事柄はエベレスト遠征の準備期間中に収集され分析されたのである。

さて、戦前のエベレスト遠征隊は5000mと5500mにある峠を越え4000mのチベット高原を横切るアプローチに6週間の行進を必要としたこの高処馴化期間があるにも拘らず、1933年以後の遠征隊は初期の遠征隊が悩まされた頭痛や嘔吐の様な急性高山病症状を避けるために、5000mのベースキャンプと7000mのノース・コルとの間にある中間キャンプで数日を過ごす事が得策である事を見出ししている。1933年の遠征隊のリーダー、ラツトレンジ(1934年)は3950m或はそれ以上のチベッ

ト高原で一冬過ごすならば、エベレスト登頂の良い機会に恵まれるだろうとの見解をもつていた。

しかし他の登山家達は、カメツト(スマイス1932年)の画期的な成功によつて、長期間を高処馴化の為に過ごすことの価値を疑う様になつた。カメツト(7757m)は大体3000m以下の処を3週間行進してから4700mにベース、キャンプを建設し、その後2週間で登頂されている。更にも、3650mから3950mの高さに永住しているシエルノ達でも5800mへ登れば高山病に罹り、7650m以上ではヨーロッパ人と比べて何ら優れた点は見られない。

戦後のイギリス遠征隊はネパールを通つてヒマラヤに近づき、予備的な高処馴化を得ずに3950mのベースキャンプに到着し、しかもその後23日で5500m或いはそれ以上に直登し攻画がすむまで再び降りて来なかつたチヨ、オユウ遠征隊で得た経験より考えると、この様な方法で登山隊の粘り強さや能率が低下するために、7650m以上のピークを登攀する場合、成功の機会を減らす事になるのである。耐久力の弱い特にヒマラヤ未経験者は明らかに激しい高山病にかかり、全員

倒れたりした。高処馴化の為に時間をかけない隊は時間をかけた隊よりも登攀に努力を要し、しかも高処衰退はより低い処から始まり且つきびしいのである。更に酸素欠乏の精神に及ぼす影響即ち意志や判断力の低下や、洞察力の欠如といった事は順化の悪いパーティでは一層危険となり易い。

1953年のエベレスト遠征に採用して成功した計画はアプローチの行進の後、高処順化準備の期間を1ヶ月設定し、数回に亘り短期間5,500mに登り、その間休養をとり3,950mへ帰つたことであつた。パーティが最後にウエスタン・クームに登つた時、彼等はチヨ・オユウのパーティよりも良く馴化しており、体重減少は前年のこの時期には4.9Kgであつたのに比し平均0.9Kgであつた。彼等は又諸種の感染にも打ち勝ち、高山病を除いては病気に罹らなかつた。

既に述べた如くストパートをリーダーとする雪男探険隊は、エベレスト周辺で約6ヶ月過ごした。ストパートは彼等の4,800mから5,500m迄の順化状態は、全期間を通じてうまく行つたと報告している。

しかしながら登山隊が高処の影響をうけずに、4ヶ月も過ごせる事は稀であり、部分的な高処順化だけが目的

を達するために望める唯一のものである。

要 約

前後3回に亘るヒマラヤ遠征において経験された高度による影響を述べたその症状は個人的感受性、以前の経験登攀の段階、且つ与えられた高度で過ごした時間等により変化する。倦怠、脱力、息切れ、そして思考と行動の遅延は普遍的な影響であり、5,500m以上では常にみられた。急性の高山病は頭痛や嘔吐の様な孤立した急性症状以外には見られなかつたのである。

非常な高度から降りて来た隊員の検査での生理学的な知見は、疲労にかかっている3人が異常に低い血圧(85-80/70-60)を示したのを除いて、本質的に正常であつた。

生理学的な衰退は6,100m以上で始まり且つ高度が高くなればなる程急速でしかもきびしい。しかし部分的な順化は最初少なくとも7,000m迄で起る。

以前の遠征では脱水と食物の欠乏は衰退の重要な原因であつた。

非常な高処が知能に影響を与え後遺症を起すことは1922年以後のエベレスト遠征にみられた通りである。

如何にすれば出来るだけ早く高処罰化
を得るかと言ひ問題についても検討を
加えた。

会 員 蔵 書 一 覧

① ヒマラヤ関係

書 名	著 者 名	発 行 所	所 有 者 名
ヒマラヤ	近 藤 等	朋 文 堂	梶本・椎木・大久保
ヒマラヤ	メ イ ス ン 望月・田辺等訳	白 水 社	野田・岡田・梶本
ヒマラヤ登高史	藤 木 九 三	弘 文 堂	野田・野崎
ヒマラヤを語る	今 西 錦 司		大工原・梶本
ヒマラヤ登攀史	深 田 久 弥	岩 波 文 庫	笠松・谷垣・野田・白井・野崎
エベレスト登頂	J. ハ ン ト	朝 日 新 聞	岡田・山本
エベレストその人間的記録	W. ノ イ ス 浦松佐美太郎 訳	文 芸 春 秋 社	笠松・野田・野崎・山本・大工原・ 横尾・三枝・梶本・山本彰・前沢・ 大島浩
エベレストと登山記	ヤングハズバンド	第 一 書 房	野田
エベレストへの闘い — 征頂記録写真集 —		朝 日 新 聞 社	野崎・大島浩・椎木

書 名	著 者 名	発 行 所	所 有 者 名
わがエベレスト	E・ヒラリー	朝日新聞社	前沢
エベレスト征服	マラルチック	新潮社	前沢
エベレストの東	"	ベースボール マガジン社	前沢
はるかなるエベレスト	W・H・マリー		大工原
キャンプ・シックス	F・S・スマイス		白井・岡田
マナスル 第1	J・A・C・	毎日新聞社	山本伸・新保・三枝・大久保・前沢・ 笠松・梶本・椎木・大工原・大島浩・ 岡田
第2		"	" " " "
マナスル登頂記	棋 有 恒	毎日新聞社	大工原・三枝・野崎・大島浩・大久 保・梶本・山本彰
マナスル写真集	依 田 孝 喜	"	野田・前沢
K 2 非情の山	ハウストン・ベーツ	白水社	山本伸・野崎・大工原
K 2	A・デジオ		大工原
カンチエンジュンガ登攀記	長 井 一 雄	博文館	乾

カンチエンジュンガ	チャールズ・エバシズ		白井
カンチエンジュンガをめざして		実業の日本社	前沢
ヒマルチュリ	村木潤次郎	毎日新聞社	野崎・笠松・前沢・大工原・白井・大久保・野田・梶本
登頂ヒマルチュリ	山田二郎	〃	前沢・野田・大工原・三枝・梶本
ダウラギリ登頂	アイゼリン	ベースボール マガジン社	笠松・野田
ナンガバルパット	ヘルリヒ・コツファー		岡田・椎木・大島浩
アンナプルナ日記	今西錦司	京大学士山岳会	大工原・岡田・新谷
✓ 処女峰アンナプルナ	M.エルゾーク 近藤 等 訳	白水社	乾・大久保・白井・大島浩・岡田・椎木・梶本
マチャプチャリ	W.ノイス	文芸春秋新社	大島浩・野田・野崎・大工原・梶本
チヨゴリザ	桑原武夫	〃	谷畑・野田・大工原・山本伸・岡田・前沢
ナンダユツト登攀	竹節作太	大阪毎日・ 東京毎日	椎木
マカール	ジャン・フランコ	白水社	野田・岡田・前沢

書名	著者名	発行所	所有者名
ウムデムカンチ	登高会		遠藤
ガツシヤーブルム	F・マライーニ		大工原・梶本
アピ	江上康		梶本・大工原
ヒマラヤに挑戦して	パウルパウアー	黒白会社	大久保・遠藤
ノシヤツク	京大		笠松
チユーオユー登頂	テイチャー	朋文堂	前沢
スターリン峰	E.A.ベレーツキー 袋一平訳	ベースボール マガジン	笠松
カラコルム		朝日新聞社	大島浩
カラコルムへの道 (バルトロカンリ)	加藤誠平	東大	大工原・梶本・大島浩
インドラサン登頂	京大		大島浩・梶本
サルトロカンリ	京大 AACK		梶本
山にうかれた男	加藤喜一郎	文芸春秋新社	野田・大工原・大島浩・野崎・谷垣
ヒマラヤ山と人	深田久弥	中央公論社	野田・岡田・田村

ヒマラヤの日本人	毎日新聞社		大島浩
ヒマラヤの男	テンジン	紀ノ国屋書店	岡田
天国地獄ヒマラヤ	レツヒエンベルク	朋文堂	笠松
ネパールの高地にて	ノーマンハーデイ 神原・牧野 訳	朋文堂	笠松・梶本・大島浩
ネパール探険記行	長沢和俊		大工原・大島浩・梶本
ネパール主国探険記	川喜田二郎	光文社	大工原・笠松
ピーク29西面	篠田軍二	O.U.M.C.	笠松・野崎
ヒマラヤの旅	竹節作太	ベースボール マガジン社	笠松
氷河の旅	深田久弥		梶本
シエルパの村	J.ボーダイロン		大島浩
チベットの日記	A.L.ストロング	岩波文庫	大島浩・野崎
チベット	マライーニ		大島浩
アジア高原の族	トインビー		大島浩
不老長生の秘境	パニック・テラ		大島浩

書名	著者名	発行所	所有者名
鳥葬の国	川喜田二郎	光文社	野崎・笠松・大工原・梶本
雪男ヒマラヤ動物記	林寿郎	毎日新聞社	笠松
チベット横断記	グエ・カツシス 佐藤清郎訳	ベースボール マガジン社	笠松
秘境ブータン	中尾佐助	毎日新新社	野田
秘境ヒマラヤ	大森栄		山本彰

② アルプス

書名	著者名	発行所	所有者名
白い蜘蛛	ハラ 横川文雄訳	白水社	梶本・大工原
マッタホルンと争う	K.ヘンゼル 書上喜太郎訳		遠藤
アルプス登攀記上	E.ウインバー 浦松佐美太郎訳	岩波文庫	白井・大工原・野崎

アルプス登攀記 下	E. ウインパー 浦松佐美太郎 訳	岩波文庫	白井・大工原・野崎
山の危険	E. シグモンディ W. パウルケ 松井博 訳	朋文堂	梶本
天と地の間に	レビユフア	新潮社	野田
星と嵐	〃	白水社	野田
モンブランからヒマラヤへ	〃	〃	野田
岩と雪	〃 近藤等 訳	新潮社	野田
わが回想のアルプス	ギド・レイ 安川茂雄 訳		梶本・野田
山に斗う	ランベール	三笠書房	野田
シャモニの休日	近藤等	白水社	野田
ドリユの西壁	ギド・マニヨース 山口纏久 訳	朋文堂	野田
アルプスの三つの壁	A. ヘツクマイヤー 安川茂雄 訳	〃	大久保・岡田
若き日の山行	ラシユナル エルゾーク	白水社	山本彰

書名	著者名	発行所	所有者名
八千米の上と下	日・プール 横川文雄 訳	朋文堂	椎木
岩・氷・ランプ	ジャン・コスト 高須茂 訳	"	乾
山	ハンス・ モルゲンタール 荒川道太郎 訳	"	乾
アルプスの谷、アルプスの村	新田次郎	新潮社	谷垣
マツタホルンの十字架	シャルル・ゴス 江口清 訳	朋文堂	岡田
アルピニウツの心	ジャン・コスト 近藤等 訳	"	岡田
わが山の生涯	ロングスタッフ		岡田・前沢
山の魂	スマイス		岡田
アルプスの氷河	チンダル	岩波文庫	野崎
アルプの麓	吉江喬松		岡田

③ 紀行・随筆

書名	著者名	発行所	所有者名
山行	模有恒	改造社	乾・遠藤・大久保
スイス日記	辻村伊助	思索社	乾・岡田・大島浩・遠藤
溪	冠松次郎		梶本
黒部	〃		山本伸・大工原・梶本
黒部溪谷	〃	朋文堂	大工原・大島浩・三枝
続 〃	〃	〃	大島浩
後立山群峰	〃	第一書房	乾
剣岳	〃	〃	乾・大島浩・梶本
立山群峰	〃		梶本
廊下と窓	〃		梶本
双六谷	〃		梶本
雪線散歩	藤木九三	三省堂	大久保・乾・大島浩
峰峠氷河	〃	朋文堂	乾・岡田・梶本

書名	著者名	発行所	所有者名
ケルンに生きる(1~5)	藤木九三等		大工原
雪岩アルプス	藤木九三	梓書房	乾・大島浩
雲表	"	黒百合社	乾
垂直の散歩	"	朋文堂	梶本
屋上登攀者	"	黒百合社	乾
峠と高原	田部重治	角川書店	野田
山と溪谷 (紀行・随筆編)	"	"	野田・大久保・岡田
日本アルプスと秋父順礼	"		大島浩
山への思慕	"	第一書房	大久保
山	大島虎吉	朋文堂	谷垣・岡田
先蹤者	"		新保
山研究と随想	"	岩波文庫	梶本・遠藤
単独行	加藤文太郎	朋文堂	遠藤・岡田・岡久・乾・大島浩・梶本
風雪のピバーク	松壽明	"	大島浩

たつた一人の山	浦松佐美太郎	文芸春秋新社	乾・谷垣・岡田・遠藤
山のパンセ	串田孫一	実業の日本社	野田
父と子の山	松方三郎		大島
遠き近き	〃	龍泉閣	大久保
山のがき大将たち	三田幸夫	二玄社	野田
山なみほるかに	〃		岡田
遠い山はるかな旅	〃		岡田
日本山水論	小島鳥水		大久保
わが愛する山々	深田久弥	新潮社	谷垣
山があるから	〃	文芸春秋新社	野田
山岳展望	〃	三省堂	乾
雲の上の道	〃	新潮社	大久保
山に画く	足立源一郎	古今書院	乾
幽山秘境	三田尾松太郎	雪山房	乾
氷河の旅	田中薫		岡田・大島浩

書名	著者名	発行所	所有者名
登山	田中 薫		遠藤
嘉門次	佐藤	朝日新聞社	野田・野崎
√日本アルプスの自然	小林 国夫		大島浩
山岳征服	三木 高峯		遠藤
山岳省察	今西 錦司		岡田・大久保
峠	深田 久弥		野崎
この山なみの声	信濃 毎日新聞社	二見書房	谷垣・大工原・佐々木
山の詩帖	尾崎 喜八		岡田
山	辻村 太郎	岩波文庫	野崎・大工原
かわいい山	石川 欣一		大工原
霧の山稜	加藤 泰三		岡田
氷と雪	加納 一郎		椎木
あるばい松の独白	中村 清太郎	朋文堂	岡田
静かなる登山	高須 茂	朋文堂	乾

行雲と共に	高畑 煉材	朋文堂	大久保
旅にすむ日	河田 楨		大久保
山とふるさと	〃		大久保
クロヨン	梅棹 忠夫		六工原
日本アルプス	ウエストン	角川文庫	白井・山本彰・野崎・大久保
高原風物誌	今井 雄二	東京同信社	三枝
高い山	大内 兵衛		山本彰
山と漂泊	谷川 徹三		山本彰
無心の山	サン・ルー		山本彰
木屐駒に友をたずねて	阪大山岳部		山口
第三の眼	ロブサン・ランバ	光文社	野崎
雪に生きる	猪谷六合雄	羽田書店	野崎
ザイル	梶原 信男	日本工業新聞社	野崎

④ 技 術 書

書 名	著 者 名	発 行 所	所 有 者 名
岩 登 り 術	水野祥太郎		白井
積山技術セミナー	金坂一郎	山と溪谷社	大島浩
積雪期登山	山崎・近藤	朋文堂	椎木・大島浩・谷垣・白井・梶本
岩 登 り	伊藤洋平		椎木
最新登山技術	マレイノフ		白井
登山技術	J. A. C.	白水社	野田
積雪期登山技術	藤田信		新保
登山とキャンピング	伊藤洋平		椎木
山岳講座 (全六巻)	川崎・近藤編	白水社	椎木
ロッククライミング	梶本徳次郎		岡田
登山全書 冬山編	J. A. C.		椎木
〃 秋山編	〃		椎木
冬期登山とスキーツアー		朋文堂	新保・梶本

登山・技術と用具	西岡・海野・諏訪多	山と溪谷社	新保
ザイル強さと正しい使い方	梶本 信男		新保
登山学の思い出	ジャベル 尾崎 喜八 訳		新保
スキーはパラレルから	猪谷 六合雄		新保・椎木
オールベルクスキー術	高橋 二郎		新保
スキー講座(1,2,3巻)	猪谷・野崎・近藤		新保
スキー - 登山	舟田 三郎		椎木

⑤ 記録案内書

書 名	著 者 名	発 行 所	所 有 者 名
近畿の山と谷	住友山岳会	朋文堂	椎木・遠藤・岡田
北アルプス	小笠原勇八 他		椎木

書名	著者名	発行所	所有者名
穂高岳登攀ルート図集	諏訪多栄蔵		椎木・新保
穂高の岩場	岩稜会		椎木・新保・梶本
BCC報告ⅡⅢⅤ	B C C		大島浩
飢岳ルート図	高須茂	築地書館	大島浩・三枝・野田
日本アルプス登山案内	野沢米三郎 他	高府書房	大久保
山岳第17年第3号	J A C		野崎
55年	"		山本
56年	"		"
57年	"		"
50 ~ 58年	"		三枝
JOCH2(1933年)	東京慈恵医大		野崎
登高行(1928~1931年)	慶応山岳部		野崎
わらじ 1927	松高山岳部		野崎
" 1929	"		
鹿島槍研究	吉田二郎		梶本・山本彰

書名	著者名	発行所	所有者名
高山研究	河野歳蔵		梶本
上高地	津田長尾		梶本
リュックサック	早大山岳部		梶本
奥秩父研究	原全教		梶本
雪の山族・スキーツアー	小島渡辺		梶本
上越の山	日本登高会		梶本
現代登山全集(2~7)			梶本
近畿の山	泉州山岳会		山本彰
白馬岳	塚本		山本彰
槍ヶ岳	〃		山本彰
奥羽の名山	三田尾松太郎		山本彰
関西岳連報告(3)	A A V K	A . A . V . K	遠藤
RCC報告V			遠藤
USAC報告 1982年	T.U.S.A.C		遠藤

書名	著者名	発行所	所有者名
関東学連報告 (8)			遠藤
南アルプス・八ヶ岳連峯	渡辺他		遠藤
山岳展望 1~3	山岳展望の会		野田
山歩 1~6	トヨタ自販山岳部		野田
東京周辺の山々	朋文堂		野田
滝谷	T.U.S.A.C		大工原

⑥ 探 験

書名	著者名	発行所	所有者名
南極の征服 上.下	ロアルト・アムンゼン 道本清一郎訳	淡海堂	笠松
南極横断 上.下	Vフックス, E.ヒラリー 山田晃訳	光文堂	笠松

世界最悪の旅	チエリー・グラード 加納 一郎 訳	朋文堂	笠松
未踏への誘惑	加納 一郎	朋文堂	笠松
北極圏と南極圏	コーリン・ベルトラム 加納 一郎 訳	朋文堂	笠松
モンゴル族探検記	梅棹忠夫	岩波文庫	大島浩
忘れられた国 —外モンゴル紀行—	松野谷夫	角川新書	笠松
中央アジア探検紀行全集	ヘイン		大島浩
大氷河を行く	田中 薫	毎日新聞社	大島浩・笠松
氷河への旅	深田久弥		岡田
ケニヤからキリマンジャロへ	R・トリュフォ		椎木
蒙古	山本実彦	改造社	野崎
瀟州紀行	島木健作	創元社	野崎
熱河風景	村松梢風	春秋社	野崎
トルキスタンへの旅	タイクマン	岩波文庫	野崎
山岳省察	今西錦司	弘文堂	野崎

書名	著者名	発行所	所有者名
ゴリラとピグミーの森	伊谷純一郎	光文社	野崎
√南極越冬記	西畑栄三郎	岩波文庫	大島浩
南極越冬日記	中野征紀		大島浩

⑦ 写真集

書名	著者名	発行所	所有者名
雪線	船越好文	白水社	野田
山を行く	風見武彦	朋文堂	野田
日本山岳写真年鑑 1958	J. A. C.	三笠書房	野田
山岳写真集集	田淵行男		大島浩

⑧ 洋 書

書 名	著 者 名	発 行 所	所 有 者
The Ascent of Everest	J.Hunt	Holder & Stoughton	大久保
Kancheiyunga Challenge	P.Bauer	William Kinber	大久保
Mount Everest(DerAngriff1922)	C.G Bruee	Benno Schwabe & Co	大久保
Der Bergspiegel	H.Fisher		新保
The Complete Mountneer	G.Abraham		新保
The Complete SKi-runner	A.Lunn		新保
The Alps	A.Lunn		遠藤
The Englishman in the Alps	A.Lunn		遠藤
Our Everest Adventure	J.Hunt		梶本
Mensahb in Himalaja	H.Dyhrenfurth		梶本
Mountains in colour	F.S.Smith		梶本
Introduction to Mountaineering	A.Smith		梶本
Mount Everest	G.O.Dyhrenfeerth 他		梶本

書名	著者名	発行所	所有者名
Peaks, Passes and Glaciers	E.H.Blakeney		遠藤
Scrambles amongst The Alps	E.Whymper		遠藤
Topograplischeer Atlas der Schwe	Theodulpass		遠藤
1:50000	Simplonpass		遠藤
Among the Alps with Bradford	Bradfordwashbwin	G.Putrams Sons	野崎
Schweiz (地図)	Baedekers		野崎
To the Unknown Mountain	W.Noyce		笠松
Wunder des Schneeschuhs Sprunglaut und Langlauf	Baade		新保
How to ski	V.Canlfield		新保
Mountaineering Art	H.Raeburn		新保
Das Klettern ims Fels	F.Nieberl		新保
Switzland in Sunshine and Snow	E.Dauvergne		新保
Modern Skiing	A.H.D Egville		新保

The Love of Alps	J. Addington Simonds		新保
Die Schule des Schneelaufs	L. Munchen		新保
Alpine Skifartiechnik			新保
Photographien in den Bergen	E. Boumann		新保
Photo Ski und Schnee	W Heering		新保
Front in Fels und Eis	G Lange		新保

⑨ その他

書名	著者名	発行所	所有者名
山の気象	山の気象研究会		大島浩
気象学概論			

書名	著者名	発行所	所有者名
天気予報と天気図	大谷東平		大工原
高々度における生体		クセジュ文庫	大工原
山のスポーツ		クセジュ文庫	大工原
地図・天気図・地質図			大島浩
スポーツの生理学		クセジュ文庫	大工原
高山植物	山川黙		大島浩
登山の文化史	桑原武夫	岡書院	大久保
雪の研究	中谷宇吉郎		新保

⑩ 岳人

野田	141~196
大工原	50~殆んど全部
三枝	81~104
横尾	145~197(152, 175~7, 185を除く)

会 員 名 簿

1965年4月1日現在

会 長			
篠 田 軍 治		池田市畑町1656	阪大工学部教授
(医学部)			
和 田 豊 種	明 32	大阪市北区南森町52(351-1412)	阪大医学部名誉教授
小 浜 基 次	昭 3	八尾市佐堂147ノ44	阪大医学部第二解剖教授
堀 見 次 郎	" 4	箕面市箕面町桜ヶ丘99(桜井41)	服部診療所長
水 野 祥 太 郎	" 5	神戸市灘区御影町群家御影住宅303号室	阪大医学部教授整形外科
国 里 勇 吉	" 5	茨木市仲之町	開業
小 林 義 郎	" 9	大阪市西淀川区野里町1295(淀川1305)	神戸市赤十字病院長
野 口 晋 一	" 10	京都市左京区下鴨宮川町54(77-7903)	船員保険病院長
坂 谷 信 次	" 14	姫路市の形町	開業
河 原 信 二	" 14	神戸市東灘区住吉町垣内224(御影2206)	開業
新 谷 五 郎	" 14	豊中市桜塚元町1丁目148(豊中3070)	大阪府国立病院外科医長
小 沢 淳 二	" 14		泉佐野病院長
酒 井 英 之	" 15	池田市城南町1丁目54	日本生命本社査定課 (231-0021)
滝 一 郎	" 16	大阪市南区千年町14(751-8571)	阪大病院婦人科
恩 地 裕	" 18	西宮市今津二葉町39(2-8740)	奈良医大整形外科教授
友 田 洋 一	" 22		古川敏業診療所

大久保 勝 己	昭 23	岸和田市池尻町字新開 7 2 2	帝産厚生病院(岸貝② 5406)
伊 藤 俊 夫	" 23	尼崎市森笠字の池 2 7 8 / 3 (481 - 9546)	開業
渡 辺 修 治	" 25	箕面市箕面町平尾 7 3 0 (箕面 5 7)	阪大病院第 2 外科
吉 川 定 範	" 25	布施市長田 1 3 5 5	阪大病院第 2 外科
徳 永 篤 司	" 26	大阪市東淀川区西淡路町 1 (322 - 4498)	徳永病院
松 久 博	" 26	大阪市東淀川区十三東之町 3 / 10 (301 - 363)	朝日新聞社診療所 (231 - 0131)
塚 田 千 尋	" 28	伊丹市伊丹 3 5 8 (伊丹 2022)	近畿中央病院
住 吉 仙 也	" 29	西宮市羽衣町 9 7 (3 - 0316)	川崎病院 (神戸 5 - 2135)
尾 藤 昭 二	" 30	三重県松阪市西町 2 7 0 中央病院社宅	松坂中央病院 (松坂 313 - 314)
東 雅 雍	" 30	大阪市阿倍野区阪南町中 6 丁目 1 6	阪大微研天野研 (451 - 3357)
小 沢 逞 夫	" 30	神戸市東灘区御影字平野 1584 小沢凱夫様方(父)	
岩 永 剛	" 30	宝塚市南口武庫山 6 4	阪大病院第 2 外科
坪 井 圭之助	" 31	豊中市熊野田旭ヶ丘公園住宅 2 2 号の 508	刀根山病院外科
林 伸 一	" 31	神戸市灘区森後町 1 / 2	
宍 戸 元	" 32	西宮市松籟荘 2 5 (5 - 0873)	阪大武田外科 (45 - 0051 ~ 0056)
片 山 徹	" 32	西宮市上太市 3 の 7	国立具病院内科
田 村 俊 秀	" 38	西宮市甲子園口 3 甲玉荘 21 号 (西宮 4 - 2212)	阪大微研
笠 松 卓 爾	" 38	西宮市甲子園口 2 / 3 4 7 (4 - 0346)	阪大医学部高次研
森 村 弘 子	" 38	東京都三鷹市上連雀 6 8 3 (三鷹 4 - 8739)	東京医科歯科大学
三 田 紀 行	" 38	芦屋市南宮町 2 0 / 2 多田忠子方 (芦屋 2 - 4997)	

宇野雅明	39	岸和田市岡山町4ノ3	
豊坂昭弘		八尾市竹淵378	医専4在学中
〔理学部〕			
水野健次郎	化13	芦屋市三条町63	美津濃副社長
山口省太郎	物13		東大原子核研究所
関集三	化13	芦屋市月若町73	阪大理学部化学科教授
国府雄二郎	物15		大阪市大理学部
新保正樹	化15	池田市畑町1658	
塩野良之助	"20	神戸市東灘区住吉町新堂45	
高倉達雄	物21	東京都三鷹市大沢1059 東京天文台官舎	
塩野喜久夫	化23	神戸市東灘区住吉町新堂143(御影1269)	
棚山俊樹	"23	西宮市甲陽園本庄町84ノ2	大阪ガス本社
大島輝夫	数24 化27	西宮市大井手町30	住友化学大阪製作所樹脂課 (461-5401)
加藤幹太	生27	枚方市香里ヶ丘1丁目22香里住宅区10号404	京大理学部生物学教室木庄研究室
細見一仁	生28	長野県須坂市北横町小串鉾山	小串鉾山診療所
堺谷弘	化28	大阪市西成区玉出本通1ノ10	
大村一生	物29	豊中市刀根山3丁目70	椿本チェーン製作所設計課
山本進一郎	"31	川崎市百合ヶ丘公園住宅35ノ307	日本電気玉川工場
関本靖裕	"31	北九州市若松区中畑町3ノ3 日立ハウス43号	日立金属
高木俊夫	化31	堺市上之芝町4丁目528	

玉井康雄	化	35	神奈川県南足柄町飯沢435 富士第八アパート内	富士フィルム
錦田晃一	"	35	芦屋市岩園町319ノ12(芦屋2-9118)	
五百蔵弘典	"	37	東京都練馬区羽沢町1ノ5 日本合成ゴ江古寮	日本合成ゴム
西垣圭二	数	38	西宮市段上大同生命独身寮	大同生命
牧野大輔	高分子	40	河内市西鴻池阪大寮(781-6680)	理学部大学院
吉川信也	生	40	伊丹市千僧公団住宅8ノ10	"
中村稔	化	40	豊中市官山町3ノ94 阪大寮1ノ1	"
〔工学部〕				
川戸俊治	機	5	豊中市本町2丁目83(豊中5891)	大阪ボイラー製作所事務取締役 (471-2451)
山口次郎	電	7	寝屋川市大利137	阪大工学部電子工学科教授
仙波正	船	7	岐阜市加納朝日町3丁目5	仙波能率事務所
村上竜郎	機	9	堺市三国丘町7丁目198ノ8(堺2-8156)	明光精機製作所代表
高島幸男	化	9	姫路市網干区新在家940(網干557)	大日本セル(東区瓦町)
斉藤俊貞	治	9	尼崎市東園田町3ノ28ノ3	大阪鍛造株式会社
手塚正夫	機	9		栗田工業株式会社高槻市大字 庄所152(5-1806~8)
池田滋	治	10	山口県下松市官前社宅1ノ1	日立製作所笠戸工場
吉見俊一	船	11	東京都杉並区菰窪3ノ182(398-8633)	日本郵船工務部副部長
河原峰	機	12	横浜市南区夷台65	いすゞ自動車藤沢製作所 (藤沢2-7141)
池宮清二郎	船	12	西宮市高木石沢町33 西電荘会館内	新明和工業
田村禎造	化	12	高槻市桜丘65	田村香料株式会社

黒川 誠一	機 13	福井市宝永上町 4 1	福井精錬株式会社
坂上 秀夫	機 13		新明和産業
遠藤 常忠	電 13	大阪市阿倍野区長池町 2	関電和歌山支店工務部
大沢 信一	船 13	東京都杉並区東田町 2ノ150	航空庁調査課
福田 正治	化 13	京都市左京区粟田鳥居前町 4 7 (吉田 3 2 1 6)	日本純良薬品株式会社
吉田 達三	化 14	東京都豊島区千早町 2ノ26	荒川林産化学工業株式会社
長岡 振吉	機 14	名古屋市熱田区玉ノ井町 1 0	大隈鉄工所技術部長(取締役)
川村 宏	機 15	豊中市栗ヶ丘町 1 3 0 (豊中 2-6 0 7 2)	汎建製作所
五歩一 純郎	機 15	西宮市甲陽園東山町 2 2ノ12	京阪神急行車輻部第一技術課 技術課長
西堀 清美	電 15	横浜市港北区日吉町 1 9 (046-2517)	東芝玉川工場
盛岡 英次郎	機 16		東京都千代田区大手町
池田 穂雄	治 16	東京都目黒区上目黒 8ノ266 (461-2166)	東京都千代田区丸の内 労働基準局安全課 国鉄工作局
野崎 善威	治 16	名古屋市瑞穂区膳棚町 2ノ3 (88-1375)	大同製鋼平井工場
砂越 竹夫	化 16	横浜市港北区高田町 2 7 2 6	東京都千代田区丸ノ内永楽ビル内 興亜石油株式会社製油課長
奥村 正己	化 16	加古川市加古川町構之口 3 7 5 (加古川 4 1 2 3)	神戸工業大久保工場
大島 直義	航 16		東京都中央区京橋 3 丁目 片倉工業株式会社片倉ビル内
乾 昌弘	化 17	大阪府松原市高見町 8 3	乾貴金属商
京極 与寿郎	化 17	大阪府羽曳野市誉田 3 1 0ノ13	
松本 裕太郎	化 17	北九州市小倉区白萩町 3 丁目 3ノ33 小倉 56-5 0 3 1	北九州市戸畑区中原生ノ浜 4 6 八幡化学戸畑研究所
青木 静男	化 18		防衛庁空幕第三課

岡	三太郎	精	19	神戸市東灘区魚崎町横屋328	川崎製鉄計量器工場
村	田良二郎	電	20		運輸省鉄道監督局民営鉄道部 電気課長
田	中行雄	精	21	臺中市服部本町5-46豊中アパート10ノ278	関西大学工学部機械
久	保三郎	機	27	大阪市南区北桃谷町19(南0790)	住友金属車輛鋳鍛事業部工務課
四	宮誠裕	船	28	大阪市阿倍野区相生通3ノ16(661-2956)	辰己商会
川	島勇	機	29	北海道空知郡赤平市住友平和台左15丁目	住友石炭株式会社
宮	本貞雄	通	29	和泉市富秋町268助松団地16ノ303	早川電機本社工場研究庶務課長
近	璋三	精	29	横浜市保土谷区仏向町公園住宅9ノ302	東芝玉川工場計測專業部
二	木節夫	通	29	岐阜県本巣郡北方町地下	川崎航空岐阜製作所
李	中勝	船	31	箕面市新稲973ノ22	日立造船設計所開発設計部技術係
鷺	沢忍	機	31	横浜市保土谷区南希望ヶ丘2	富士電機川崎工場検査課
立	花直治	精	31	明石市大蔵谷字大野2689ノ2	三菱重工神戸造船機械設計部 機械設計課
鳴	海淑雄	治	31	石川県小松市符津町小松製作所第4寮	小松製作所
西	川元夫	電	32	大阪府富田林市毛入谷353	近鉄玉川工場(781-0995)
戸	井祥夫	化	32	吹田市南泉町2635	
椎	木二郎	精	32	岐阜県各務原市蘇原三柿野町六軒西宮前 廻り西方6ノ111柴田方	川崎航空機工場飛行機工場技術部
村	瀬泰弘	化	33	松山市南吉田 帝人社宅40号	帝人松山工場
樋	下重彦	通	33	川崎市小杉2ノ288ノ1富士通信機青葉寮 (中原398)	富士通信機
兼	清喜雄	精	35	横浜市港北区篠原町1690	日立製作所川崎工場送風機設計課 (川崎3-3751)
山	本信樹	機	35	逗子市逗子1156藤村方(逗子3361)	日産

米村外茂男	化 35	川崎市上小田中 1 8 1 旭グウ新城寮	旭化成
平野恵一	精 35	大阪府泉北郡高石町南 5 2 3 ノ 7	阪大工学部超高温助手
田端剛爾	機 35	愛媛県新居浜市前田町 敬天寮	住友機械
木村征二	通 35		三菱電機
大島浩	化 36	兵庫県高砂市高砂町 鐘淵化学雄心寮	
田井英男	治 36	高槻市芥川 2 ノ 2 富士ハシヨウ 63 号 (高槻 5-5 4 5 7)	松下電子工業
村井忠男	電 36	東京都新宿区下落合 1 ノ 4 0 6 日立目白寮 (951-5569)	
広瀬貞雄	熔 36	大阪市北区中崎町 4 8 (371-2823)	大阪大学工学部大学院渡辺研
谷垣兵一	治 36	神戸市東灘区魚崎町横屋横屋 7 0 3 川崎重工浜横屋寮-0 1 2 2	川崎重工
丸尾能保留	機 36	横浜市港北区大豆戸町安山東芝菊名寮	東芝
酒井次郎	電子 37	北九州市八幡区大字熊手小鷺田安川電機同和新寮	安川電機
前沢祐一	熔 37	東京都大田区田園調布 2 ノ 4 0 三菱重工第一桜ヶ丘寮	三菱重工
黒木隆憲	熔 37	北九州市八幡区南陣山町 (八幡 6-1220)	黒木熔接
金子忠男	精 37	大阪市東住吉区西今川町 5 ノ 2 7	日立製作所
打出英樹	構 37		
佐藤毅	通 37	藤沢市藤沢 5 6 8 8 三菱電機花ノ木第一寮 208 号室	三菱電機
高橋雄二	精 37	大阪市東成区片江町 3 ノ 3 5 (971-9502)	住友電工
白井達郎	機 37	富士市川成島 1 0 0 旭化成第 5 富士寮	旭化成
米沢成二	精 37	池田市尊鉢 8 9	大阪大学工学部大学院篠田研
清水郁生	電子 37	東京都港区芝白金猿町 3 9 ノ 8 ソニー白金寮	ソニー

三 沢 日出夫	焙 38	栃木県日光市清滝丹勢町古河電工紫明寮旧寮	古河電工
梶 本 孝 治	船 38	尼崎市西富松武庫之荘 1ノ15 (481-8915)	梶本商店大阪本店
横 尾 秀次郎	応化 39	豊中市岡町北 4ノ75 (豊中 2-9411)	理学部大学院
桑 原 昭 夫	船 40	尼崎市上ノ島北ノ市 387ノ1 小林方	大阪造船
大 川 和 秋	通 39	京都市北区平野鳥居前町 37 (44-3391)	理学部神谷研
木 原 秀 幸	構 39		日本住宅公団
故 梶 原 信 男	電 11	京都府乙訓郡長岡町開田下町 (神足 116)	
〔薬学部〕			
抱 忠 男	昭 29	大阪市旭区大宮西之町一丁目 41	田辺製薬学術部 (202-2331)
三 枝 礼 子	30	東京都杉並区堀之内 1丁目 158	エーザイ株式会社 (929-1101)
浜 (旧姓 井上) 枝	30	豊中市穂積服部公園住宅 9ノ105	
坪 (旧姓 井 莉) 子	33	豊中市能野田旭ヶ丘公園住宅 22号 508	(坪井圭之助氏夫人)
森 泰 子	37	京都市下京区七条通大宮西入	日本ブラッドバンク
大 角 美佐子	37	神戸市東灘区御影町上東 837	
〔歯学部〕			
石 沢 命 久	32		阪大歯学部矯正科
大工原 恭	38	芦屋市打出楠町 86ノ210 (0797-2-7745)	阪大歯学部大学院
保 母 武 彦	38	西宮市南越木岩町 51古田方 (西宮 2-5669)	阪大歯学部
〔経済学部〕			
田 島 汎	28	芦屋市宮川町 13	住友特殊金属吹田製造所

土田直	29	芦屋市打出楠町57	住友金属本社 (東区北浜新住友ビル内)
木村裕一	31	大阪市北区天満橋筋5丁目95(351-8038)	日本アルミ営業部(391-0021)
辻川直	32	沼津市三枚橋平町110ノ3 佐野信雄方	サンヨー電機
野田憲一郎	35	東京都大田区久ヶ原町654トヨタ自販久ヶ原寮 (351-8116~8117)	トヨタ自動車販売株式会社 直納部業務課
森田幸夫	35	堺市出島海岸通2丁目168	東洋棉花
平田彰	35	豊中市山ノ上宝通2ノ17ノ3	松下電器産業
高田邦雄	40	大阪市生野区舍利寺町3ノ115(716-9062)	朝日新聞
辻光弘	39	東京都千代田区神田司町1ノ2 巽商店内	巽商店
岡久光明	40	豊中市桜塚元町1ノ84(豊中2-9972)	日本生命
〔法学部〕			
山本光二	29	名古屋市中区伝馬町1ノ15 スタービルディング605号	大和銀行名古屋支店 (中区栄町5丁目1番地)
広橋茂	30	西宮市末広町5	西宮市文書課(西宮6-3151)
岡田博司	33	吹田市千里山189(381-7910)	住友信託銀行本店業務部
山本彰三 (旧姓 浜田)	38	豊中市桜塚本通1ノ2 日立造船豊中寮(豊中2-4007)	日立造船筑港工場
山本久夫	38	高槻市南園町336	北海道拓殖銀行大阪支店 (251-5391)
播本裕晃		大阪市阿倍野区天王寺町北1ノ743	伊藤忠商事
〔文学部〕			
由比浜哲也	仏 28	西宮市甲子園三保町55	豊中1中(豊中2-4849)
横山保枝 (旧姓 松木)	英 31	枚方市香里ヶ丘7丁目36ノ6	寝屋川高校
一山幸代	心理 33	豊中市寺内1918	大阪府立産業能率研究所 (941-8156)

佐藤 茂 【工業教員養成所】 堀井 昭彦 (父堀井茂様)	富山市県庁前毎日新聞社富山支店 大阪市城東区野江中ノ町3丁目210	毎日新聞富山支局 61年11月富士山にて遭難死
【現 役】 原 治 左 工 門 石 浜 高 明 大 笹 秀 一 栗 原 完 治 畑 中 薫 泉 田 浩 二 出 雲 路 敬 孝 糸 井 文 彦 大 野 義 照 加 藤 佑 二 黒 田 治 朗 佐々木 義 弘 辻 信 男 平 岡 謙	岸和田市福田町2218(岸和田貝塚5-0573) 大阪市西淀川区花川南之町80(472-1658) 大阪市東住吉区駒川町5ノ15(821-2031) 河内市西鴻池阪大寮(781-6680) 大阪市生野区南生野町4ノ19(717-9691) 大阪市阿倍野区王寺町3ノ37(821-7810) 神戸市灘区一王山町5ノ46(85-5470) 尼崎市東園田町9丁目39ノ7 河内市西鴻池阪大寮(781-6680) 神戸市灘区大石東町2ノ8(87-0641) 堺市浜寺諏訪ノ森町西4丁目340ノ3(堺6-1428) 西宮市甲子園町58第1甲子園住宅211 大阪市東成区東今里3ノ19(971-2554) 大阪市住吉区墨江東6ノ72	理 化 4 工 船 4 工 溶 4 法 2 医 専 1 工 応化 2 工 応化 3 経 3 工 構 3 工 船 2 医 専 3 理 化 3 工 原 3 医 専 1

細川明彦	豊中市岡町南1ノ5 川端方	工原 2
渡部洋	豊中市岡上ノ町3ノ7 1	理生 2
甲田寿夫	茨木市下中条305 (0726-2-2534)	理物理 3
藤井昭彦	池田市石橋町222ノ12 一徳寺内	理物理 2
官崎太郎	寝屋川市郡萩ヶ丘阪大磐上寮(寝屋川3-1044)	工構 2
三好亮	吹田市山田下2601	工原 2

大正九年より伝統のある

吉田屋の

山靴

スキー靴

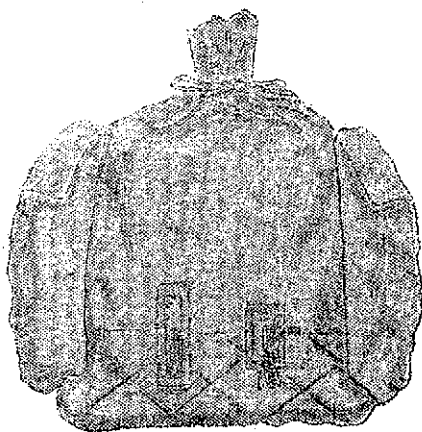
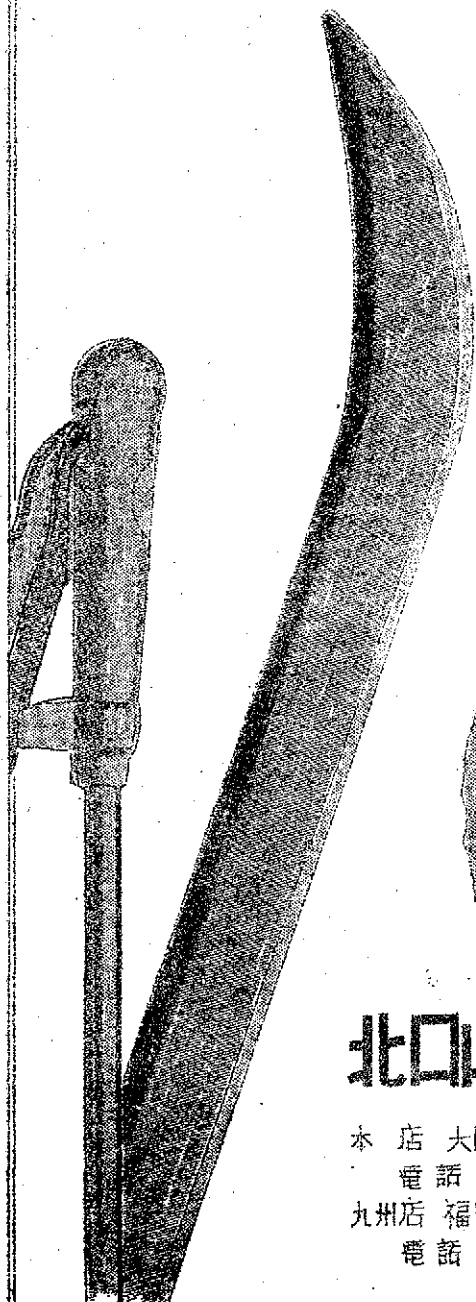
吉田屋株式会社

大阪市阿倍野区松崎町2丁目38番地

TEL 621 - 9541

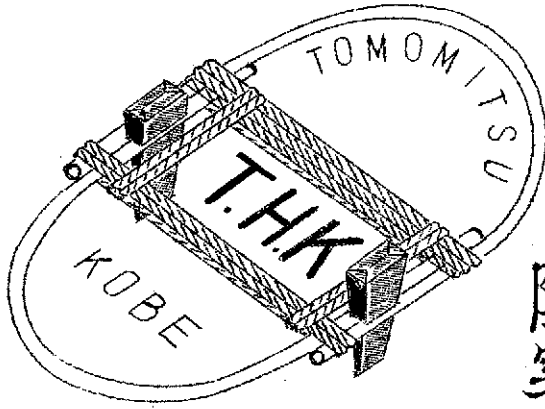
登山
キャンプ
スキー用品

『専門の店』



北口山スキー研究所

本店 大阪市北区・堂ビル裏・回生病院北側
電話 ③ 9593 ④ 3240番
九州店 福岡市蓮池町・善導ビル一階
電話 ② 6097番



テント
リュック

防寒服

登山用専門製造

トモミツ縫互

神戸市東灘区魚崎町横屋159-6

TEL (85) 0287 番

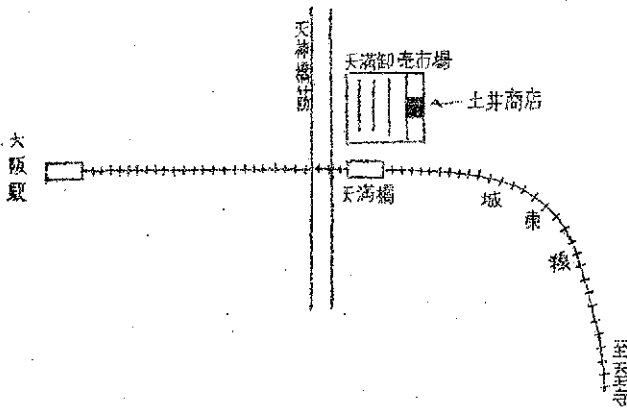
最少量にて

最大のエネルギー源の

保存食料品の

御用命を！

登山携行食料品 (卸価格)



乾物 食料品卸
缶詰

①

土井商店

大阪市北区池田町21 天満卸売市場内 電(351) 5975

昔は
おにぎり
今は
カンパン



サンリリ
カンパン



三立製菓

大阪市城東区西嶋野 4-150

工場 浜松 大阪 東京

朝の食卓を
神戸パンでお楽しみ下さい

パンの王様



神戸屋パン

本社工場 大阪・福島・西通 441-7791

西淀工場 大阪・西淀川・御蔵島 441-0712

袋詰合せ、携帯食糧品

菓子問屋

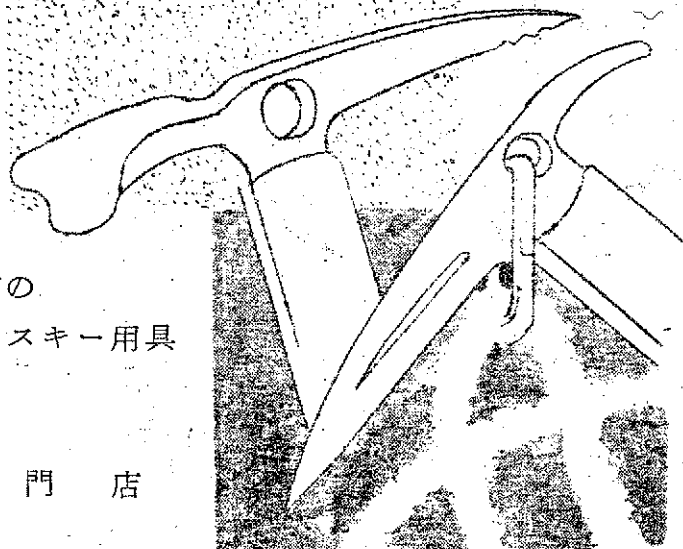
大梅

大阪市北区池田町21

電話 351-6394

日本最古の
登山とスキー用具

専門 店



大正13年創業

大阪・東京・福岡

好日山莊

シモン・シャルレ・ピツケル日本代理店
札幌門田作ピツケル・アイゼン関西総代理店
大阪市北区老松町3-12

TEL 341-7745 361-9330

スキーと

山のコンサルタント

山の店

都心にあるヒュッテ

こんな感じの店に

なりたいと努力しております。

皆様の御協力をお願いします。

登山・スキー用具専門店

山の店

大阪市北区曽根崎上1-24

(梅田大映・お初天神裏)

TEL (341) 41 92 番

